

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

# 觀音林遺跡

(第四次発掘調査報告書)



【觀音林遺跡出土、大洞C2式土偶】

1986. 3. 20

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 集	1968	津軽・前田野目窯址	
第 2 集	1974	原子遺跡	
第 3 集	1975	観音林遺跡	①
第 4 集	1979	狐野遺跡	①
第 5 集	1980	狐野製鉄遺跡	②
第 6 集	1983	福泉遺跡	
第 7 集	1984	観音林遺跡	②
第 8 集	1985	観音林遺跡	③
第 9 集	1986	観音林遺跡	④

## 序 文

五所川原市教育委員会教育長 鈴木太左衛門

五所川原市大字松野木字花笠81番地にある観音林遺跡の調査は昭和48年に始まり。

### 第1次発掘調査

昭和49年（1974）に実施し、その成果は翌50年（1975）五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集として

### 第2次発掘調査

昭和58年（1983）に実施し、59年（1984）に第7集として  
第3次発掘調査

昭和59年（1984）に実施し、60（1985）に第8集としてすぐ報告した通りで  
あります。更に、

第4次発掘調査を昭和60年（1985）に実施しましたところ井戸の中から石斧、そ  
の他線刻石、石槍、岩偶など出土しておりますので、第9集としてまとめ発刊する  
はこびになりました。古い時代の遺跡の記録として、また先人の生活を知る上にお  
役に立てば幸甚に存じます。

この発掘ならびに整理に当って炎天下大変ご苦労下さいました新谷雄藏先生はじめ  
諸先生方、生徒諸君並びに手伝いの皆様、そして、何回にもわたる発掘をおゆる  
し下さった地主の長尾良治氏のご好意に対して深甚なる謝意を表します。

## 例　　言

1. この報告書は、五所川原市教育委員会が実施した「観音林遺跡」の第四次発掘調査の記録である。  
本遺跡は、五所川原市大字松野木字花笠81番地に所在する。
2. 第四次発掘調査は、昭和60年7月22日より8月3日の期間で実施した。
3. 本報告書のうち、出土した「骨類」の鑑定は、早稲田大学金子浩昌氏に依頼し、その結果については「表Ⅱ」に示したとおりである。ここに記して感謝申し上げる次第である。
4. 本報告書のうち、地学に関する事項は、日本地学教育学会々員川村真一が総括担当した。
5. その他の記述は、新谷雄蔵が担当執筆した。また、各調査員は、発掘を担当し、かつ原図の作成にあたった。
6. 本遺跡に関する測量、および遺構の実測等は、五所川原市建設課員が担当した。
7. 発掘に必要な資材・人員の輸送、その他は、五所川原市教育委員会職員が担当し、発掘を援助した。
8. 青森県教育庁文化課員天馬勝也氏より、発掘に関する指導助言を賜わった。また、山田高校葛西勵氏より種口御教示を賜つたここに記して感謝申し上げる次第である。
9. 出土遺物は、すべて五所川原市教育委員会が、市立歴史民俗資料館に保管し、歴史研究の資料に活用する。
10. おわりに、第一次～第四次発掘調査に当って発掘調査を快諾された地主である長尾良治氏に感謝申し上げる次第である。

## 目 次

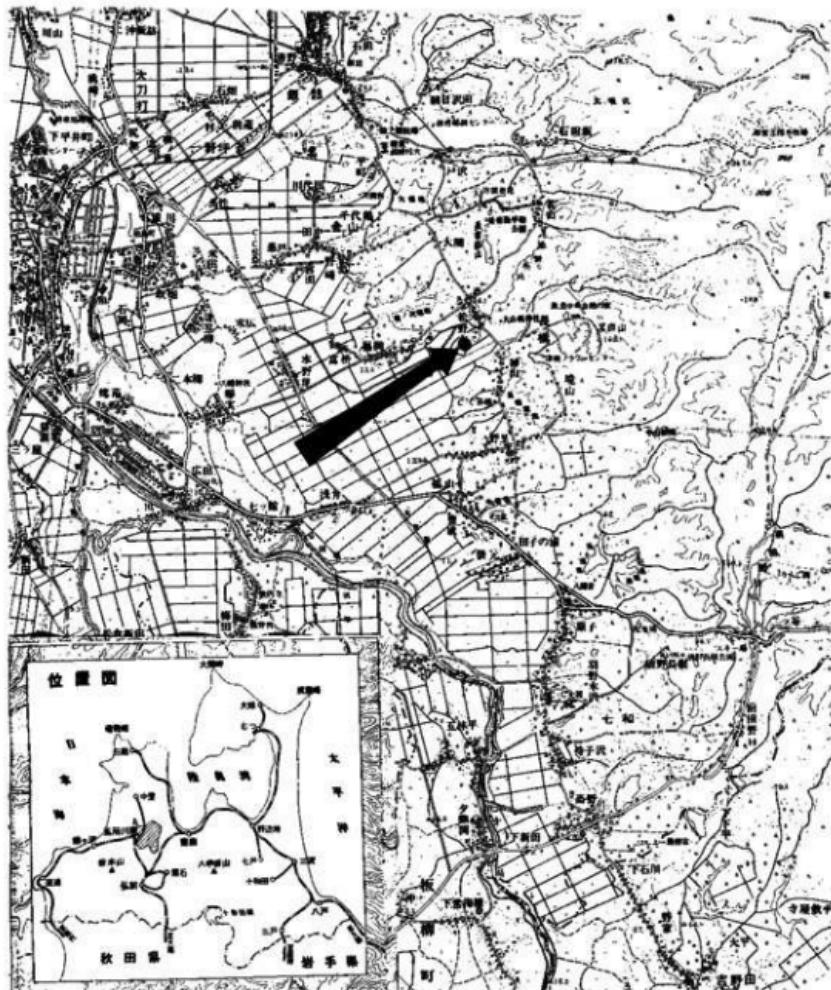
### 序 文

### 例 言

第1図	・観音林遺跡付近地図.....	1
第2図	・観音林遺跡発掘区配置図（航空写真）.....	2
第3図-1	・A～C地区グリット配置図.....	3
第3図-2	・観音林遺跡基本層序図（C-(1)・D-(2)・A-(3)地区）.....	4
第4図	・A地区F <sub>5</sub> 平面図①・F <sub>5</sub> 北壁②・東壁③、AN：東壁セクション図④.....	5
第5図-1	・A地区J <sub>1</sub> ：グリット北壁セクション図.....	6
第5図-2	・A地区J <sub>1</sub> ～J <sub>2</sub> ：グリット東壁セクション図.....	7
第6図	.....	8
	・C地区C <sub>2</sub> グリット東壁セクション図⑤	
	・C地区C <sub>2</sub> グリット北壁セクション図⑥	
	・C地区C <sub>2</sub> グリット横断図⑦	
第7図	.....	9
	・C地区C <sub>3</sub> ・D <sub>3</sub> グリット東壁セクション図⑧	
	・C地区C <sub>3</sub> ・D <sub>3</sub> グリット南壁セクション図⑨	
	・C地区C <sub>3</sub> ・D <sub>3</sub> グリット横断図⑩	
第8図	.....	10
	・C地区X <sub>1</sub> ：グリット遺構平面図⑪	
	・C地区X <sub>1</sub> ：グリット北壁セクション図⑫	
	・C地区X <sub>1</sub> ：グリット東壁セクション図⑬	
第9図	・D地区D <sub>6</sub> 壠状遺構南壁セクション図 .....	11
第10図	・D地区D <sub>7</sub> 壠状遺構南壁セクション図 .....	12
第11図	・C地区X <sub>1</sub> ：グリット検出、井戸状遺構断面図 .....	13
第12図	・D地区壠状遺構断面図（D <sub>1</sub> ～D <sub>7</sub> ） .....	14
第13図	・C地区C <sub>2</sub> ・C <sub>3</sub> ・D <sub>3</sub> ・D <sub>4</sub> 平面図（2号住居址） .....	15
写 <sub>1</sub> ～ <sub>4</sub>	・発掘スナップ等.....	16
写 <sub>5</sub> ～ <sub>12</sub>	・各グリット・トレンチの状況（遺構を含む） .....	20
写 <sub>13</sub> ～ <sub>14</sub>	・遺物の出土状況.....	28
[I] 調査経過と調査要項	.....	30
(a) 調査に至る経過	.....	
(b) 調査要項	.....	

(C) 発掘面積と発掘法	
(d) グリットの設定について	
[II] 発掘日誌抄	34
[III] 地形・層序	39
(1) 地形	
(2) 地質・層序	
[IV] 遺構	42
(a) 堀状遺構	
(b) 住居址(2号)	
(c) 住居址(3号)	
(d) 井戸状遺構	
(e) その他	
表1 各堀状遺構の測定図	47
表2 繩文時代 編年表	48
表3 觀音林遺跡(第四次)出土骨類鑑定表	49
表4 石器・石製品等一覧表(No.1～No.10)	50
[V] 出土遺物	59
(1) 土器・土製品	
(2) 石器・石製品	
(3) 鉄器	
(4) 骨類	
P・LX <sub>1-2</sub> 十腰内Ⅰ式終末期の土器	67
拓影・繩文時代後期「十腰内Ⅰ式」終末期の土器	69
—その1・その2—	
[VI] 考察	71
A・P・L <sub>1-29</sub> ・完形・復原土器	81
P・L <sub>1-56</sub> ・各グリット・トレンチ出土土器	110
A地区 <sub>1-32</sub> 、AN <sub>-33-38</sub>	
C地区 <sub>39-44</sub> 、各地区 <sub>45-54</sub>	
X <sub>1</sub> 井戸内 <sub>55</sub> 、D <sub>6</sub> ・T <sub>・P<sub>2</sub></sub> ・T <sub>・P<sub>3-56</sub></sub>	
P・L <sub>37-60</sub> ・鉄器・骨類	166
S・P・L <sub>1-12</sub> ・石器・石製品	170
参考文献等	182

第1図〔観音林遺跡付近地形図〕 S- $\frac{1}{50,000}$



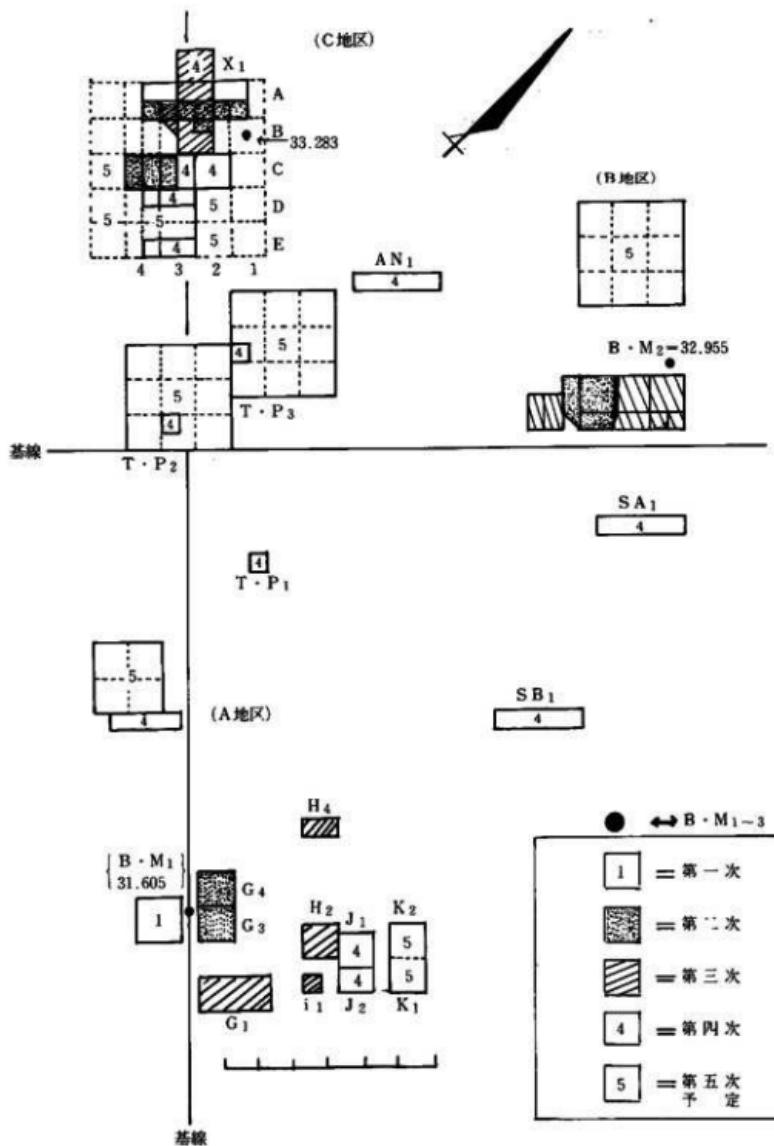
〔第2図〕観音林遺跡付近航空写真（五所川原建設課提供）

S - 約  $\frac{1}{1000}$

☆ (グリット、トレンチ配置図)



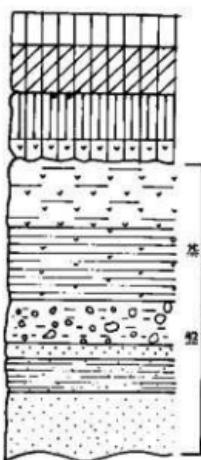
第3図-1 [観音林遺跡A～C地区グリット配置図]  
(D地区は別図)



[第3図]-2 基本層序図

(C地区基本層序)

①



I層 表 土 30-40cm

II層 黒色土 20-40cm

III層 原黑色土 5-15cm

IV層 黄黑色土 5-20cm

V層 黄褐色粘土質  
17-24cm

褐色火山灰質粘土

粘土質砂疊

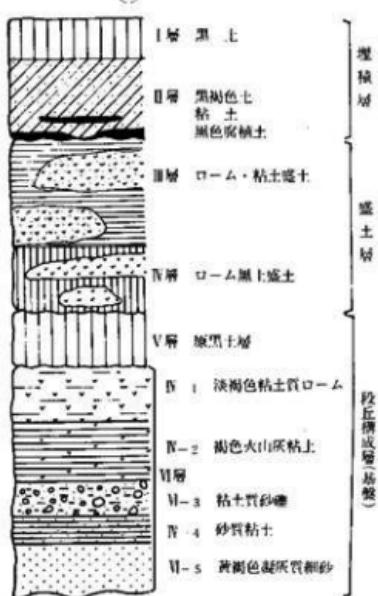
粗 砂

砂質粘土

黄褐色凝灰質細砂

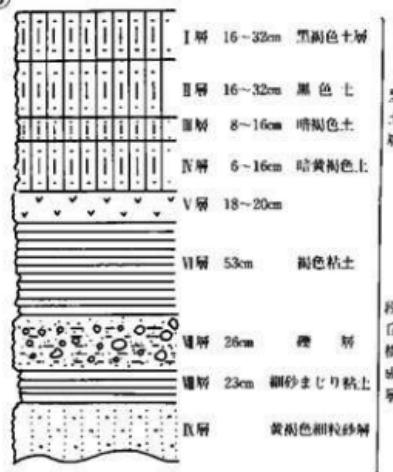
(D地区壠状遺構基本層序)

②



[観音林遺跡基本層序図] — [A地区]

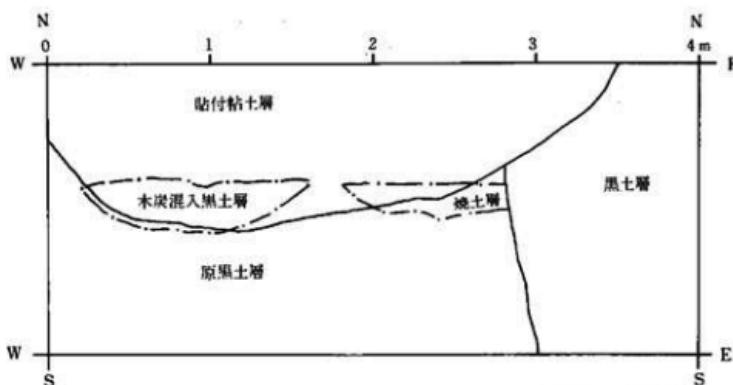
③



第4図 [A地区F<sub>5</sub>平面図] S =  $\frac{1}{20}$

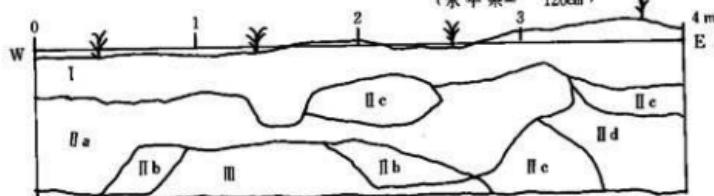
①

実測者  
太田 竜哉



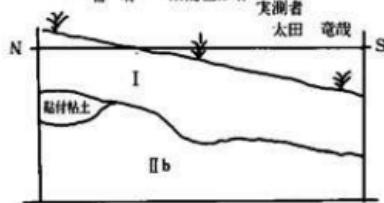
② [A地区E<sub>5</sub>北壁セクション図] S =  $\frac{1}{20}$

B · M<sub>1</sub> = 31.605m  
眼 高 = 185.2cm  
水平系 = 120cm  
実測者  
太田 竜哉

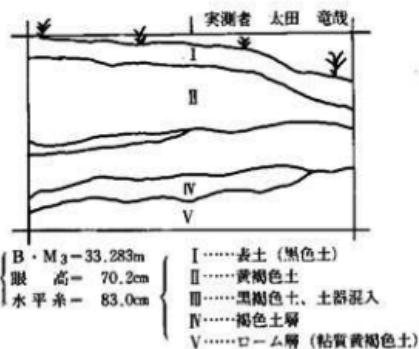


③ [A-E<sub>5</sub>東壁セクション図] S =  $\frac{1}{20}$

- I 層……表土 (黒色土)
- II a 層……土器混入黒色土、粘質なし。
- II b 層……燒土・土器、木炭混入黒色土。
- II c 層……粘土・土器、燒土混入黄褐色土。
- II d 層……土器・木灰・燒土・混入黒色土。
- III 層……茶褐色砂層



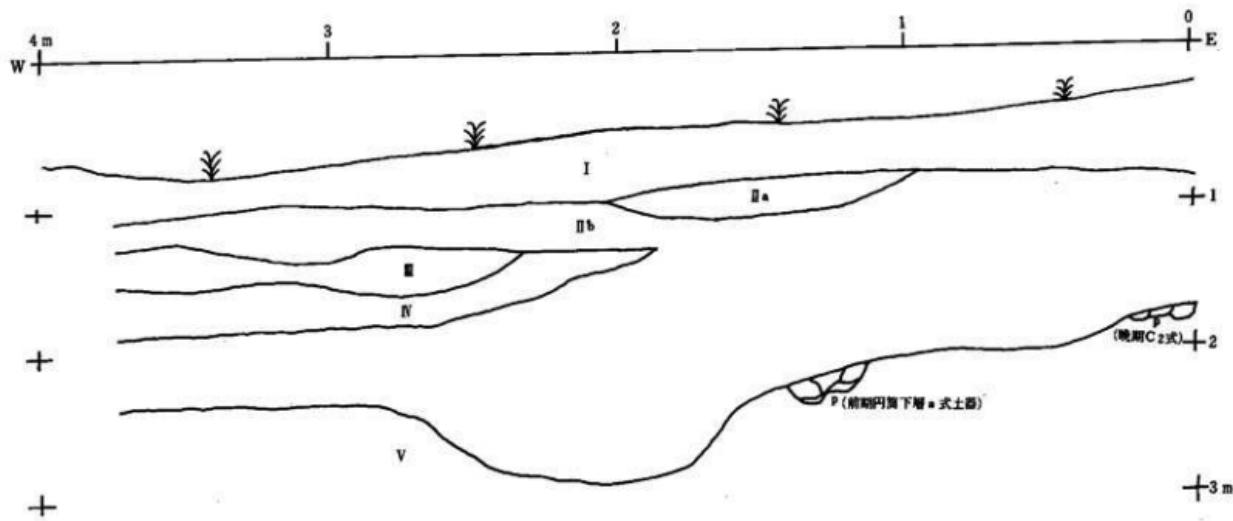
④ [AN<sub>1</sub>東壁セクション図] S =  $\frac{1}{20}$



[第5図-1] A地区J1グリット北壁セクション図 S- $\frac{1}{10}$

$$\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_1 = 31.605 \text{m} \\ \text{眼 高} = 196.0 \text{cm} \\ \text{水平差} = 122.8 \text{cm} \end{array} \right.$$

実測者 小野 雅史  
山川 夏子

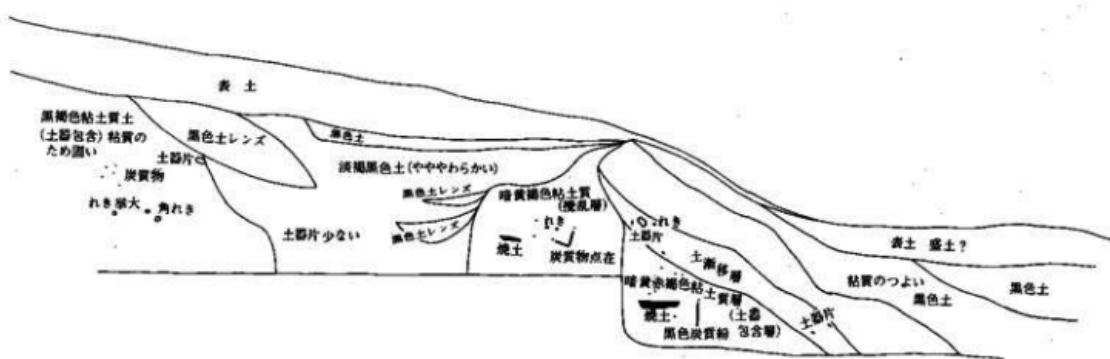


- I -表土（黒褐色土・しまりなく小団塊混入）  
 II a -暗褐色土（しまりがあり、粘性ない。中疊混入）  
 II b -暗褐色土（疊・木灰多量に混入、落込みあり）  
 III -黒褐色土（木灰・疊混入・しまりがあり、粘性やある）  
 IV -暗褐色土（粘性強く、疊・木灰・土器包含）  
 V -黄褐色土（ローム、粘土質ロームで粘性大である）

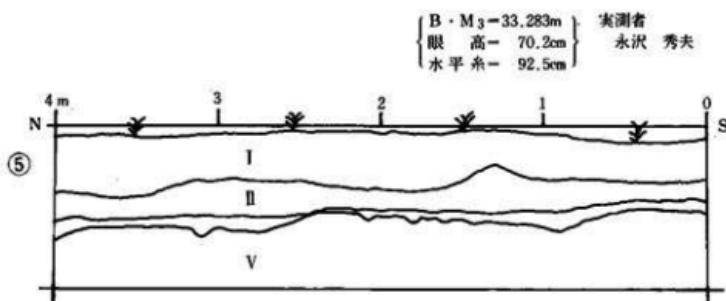
[第5図-2] A地区 J<sub>1</sub>—J<sub>2</sub> 東壁セクション図 S=1/20

$$\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_1 = 31.605 \text{m} \\ B \cdot L = 192.4 \text{cm} \\ \text{水平系} = 122.6 \text{cm} \end{array} \right\}$$

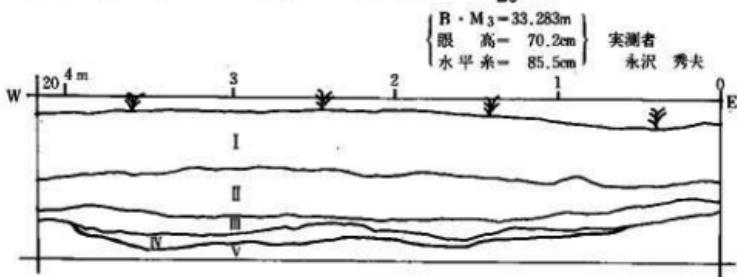
実測者 川村・小野・山川



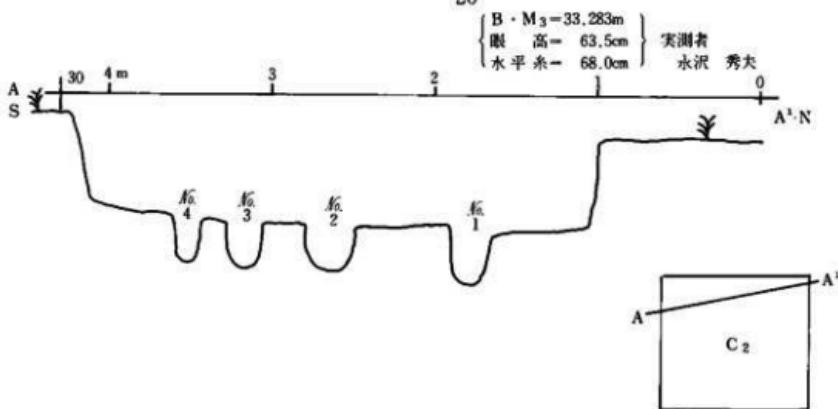
第6図 [C地区C<sub>2</sub>グリット東壁セクション図] S =  $\frac{1}{20}$



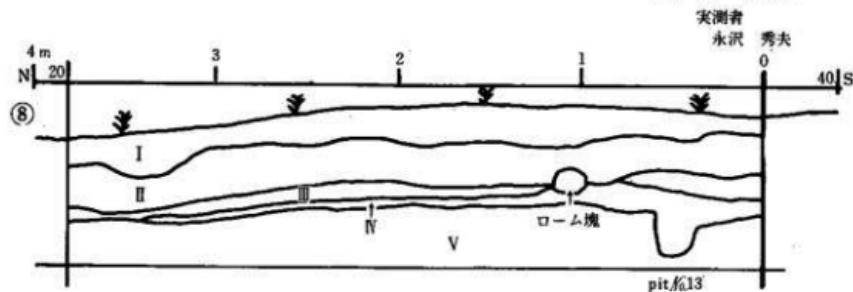
⑥ [C地区C<sub>2</sub>グリット北壁セクション図] S =  $\frac{1}{20}$



⑦ [C地区C<sub>2</sub>グリット横断図] S =  $\frac{1}{20}$

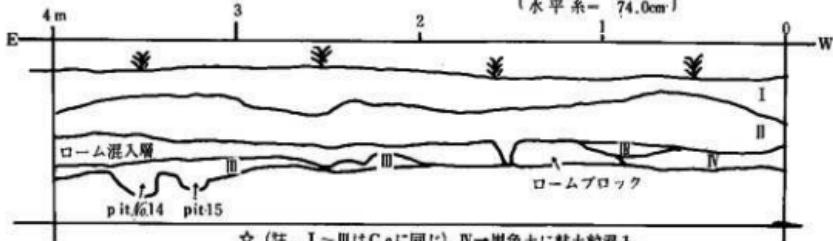


第7図 [C地区C<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>グリット東壁セクション図] S =  $\frac{1}{20}$  {B・M<sub>3</sub> = 33.283m  
眼高 = 70.2cm  
水平糸 = 78.5cm}



⑨ [C地区C<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>グリット南壁セクション図] S =  $\frac{1}{20}$

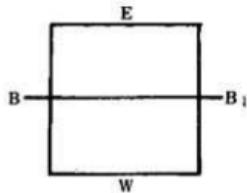
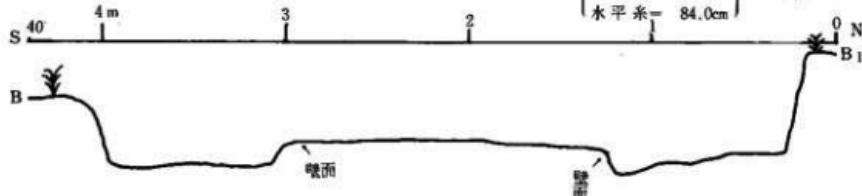
{B・M<sub>3</sub> = 33.283m  
眼高 = 70.2cm  
水平糸 = 74.0cm} 実測者 水沢 秀夫



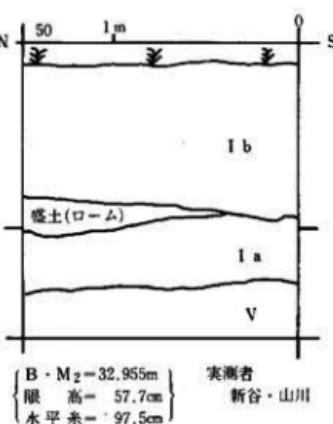
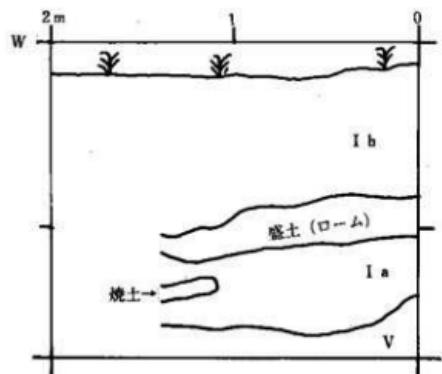
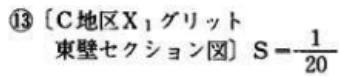
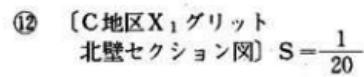
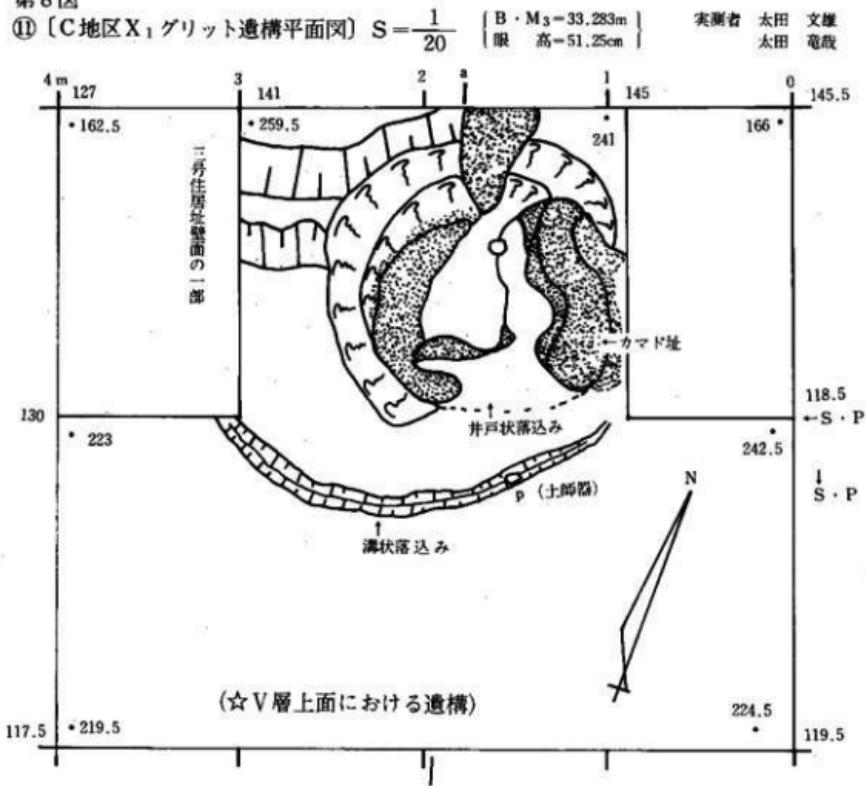
☆ (註: I ~ IIIはC<sub>2</sub>に同じ), IV→黒色土に粘土混入。

⑩ [C地区C<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>グリット(B-B')横断図] S =  $\frac{1}{20}$

\* D<sub>3</sub> ← 1 → C<sub>3</sub> {B・M<sub>3</sub> = 33.283m  
眼高 = 70.2cm  
水平糸 = 84.0cm} 実測者 水沢 秀夫

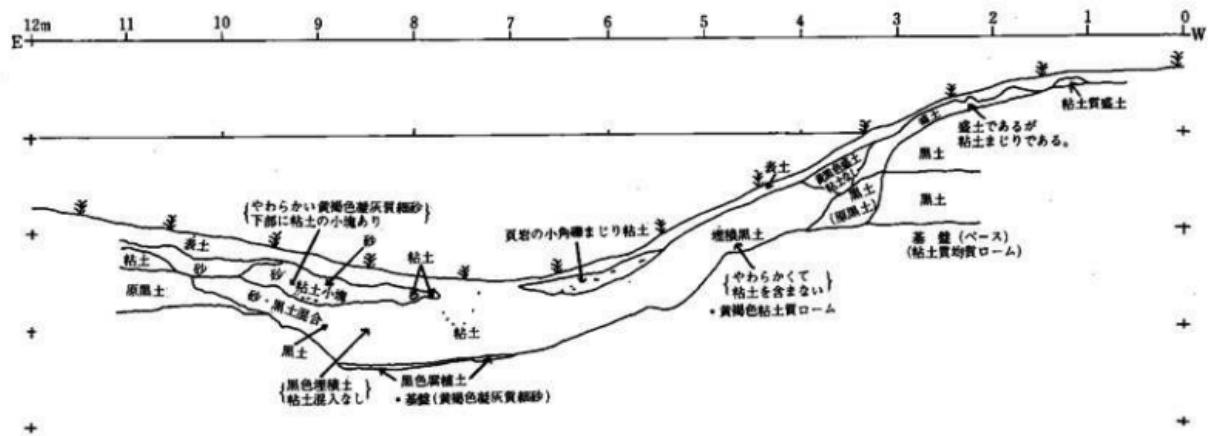


第8図



(第9図) D地区D<sub>6</sub> 堀状造構南壁セクション図 S =  $\frac{1}{20}$   $\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_2 = 32.955m \\ \text{高さ} = 88.5cm \\ \text{水平長} = 87.2cm \end{array} \right\}$

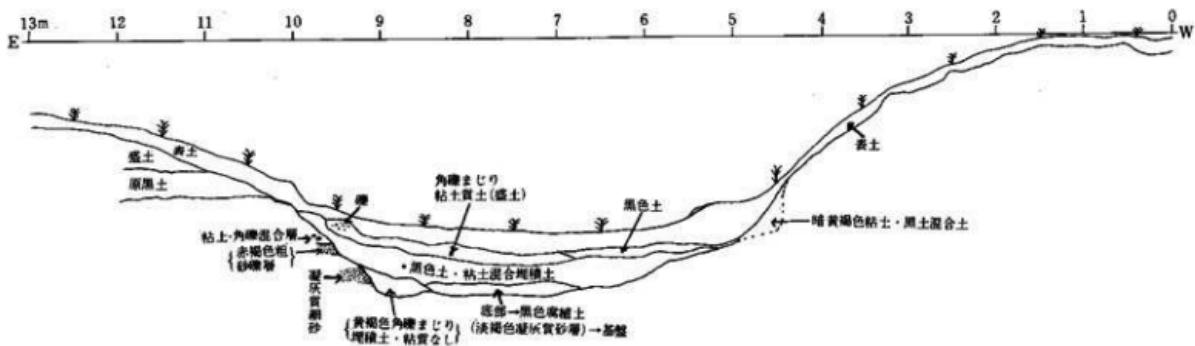
実測者  
(川村・永沢・長内)



(第10図) D地区D<sub>7</sub> 堀状構造南壁セクション図 S-1/20

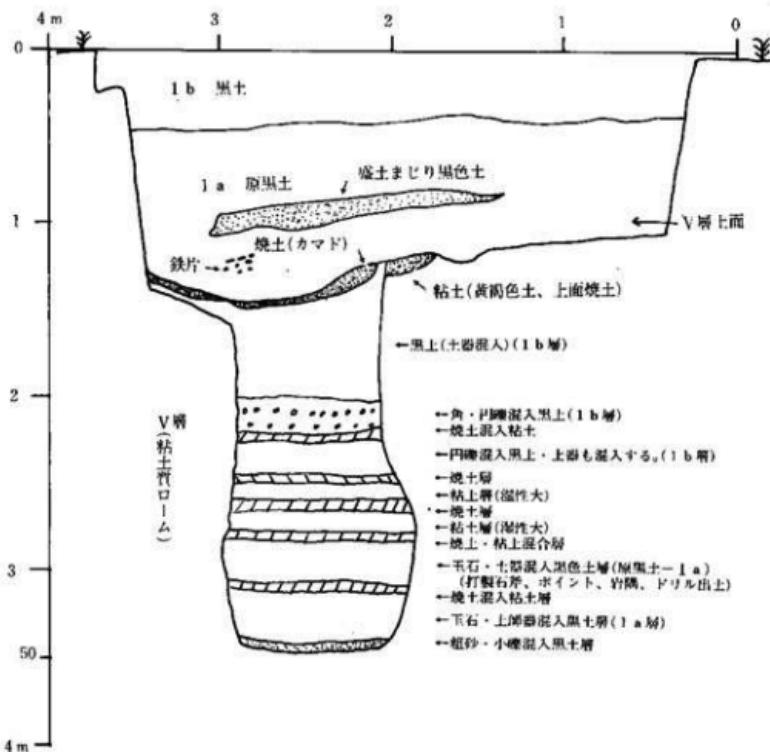
$$\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_2 = 32.955 \text{m} \\ \text{眼 高} - 103 \text{cm} \\ \text{水平 纵} - 82.5 \text{cm} \end{array} \right\}$$

実測者  
(川村・永沢・長内)



第11図 [C地区X: グリット検出・井戸状遺構断面図] S =  $\frac{1}{20}$

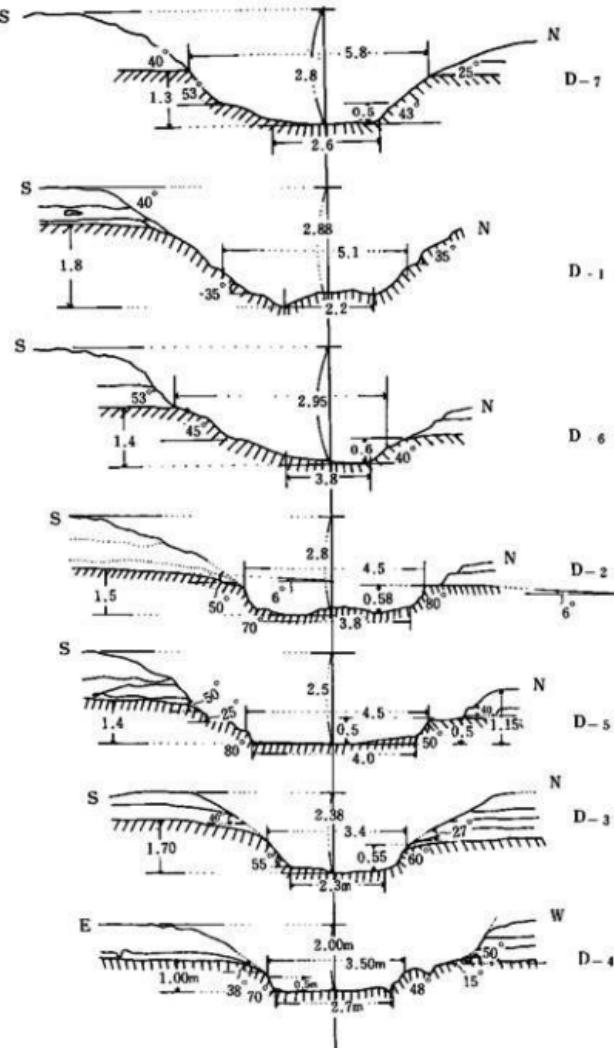
実測者  
太田 文雄  
太田 龍哉



★ { I a → 原黒土層  
1 b → 盛土黒土層  
V → ローム層(ベース) }

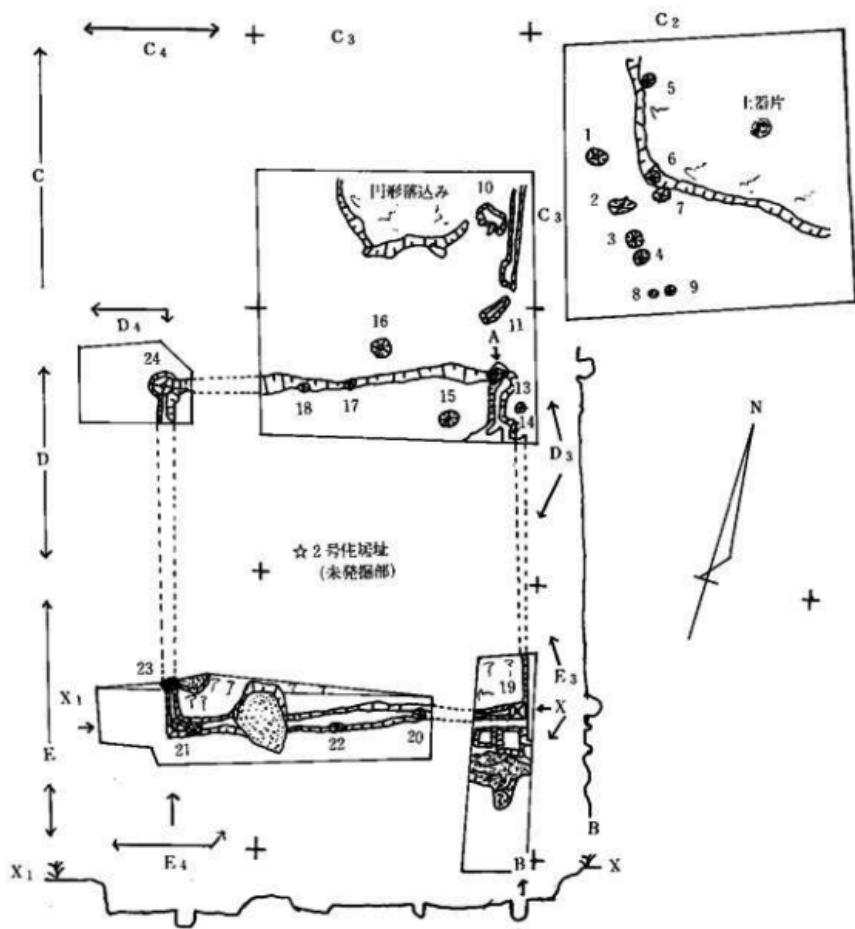
{ B · M 3 = 33.283m  
眼 高 = 91.0cm  
水 平 線 = 162.5 cm }

[第12図] 堀状遺構断面図 scale =  $\frac{1}{60}$



〔第13図〕 C地区C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>、D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>、E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub> グリット平面図

$$S = \frac{1}{50}$$



⚪数字はpit<sub>16</sub>である。  
 ⚪主柱穴は、12・24・19・21と思われる。  
 ⚪住居址中央部は、未発掘である。



☆発掘現場を視察する五所  
川原市文化財審議委員各  
位



☆発掘隊のみなさん



☆小さい考古学者

☆A 地区 J<sub>1</sub> グリットの I 層  
剥ぎとりスナップ



☆A 地区 J<sub>2</sub> グリットの発掘スナップ  
(A 地区担当者とその指導を受ける高校生・  
中学生)

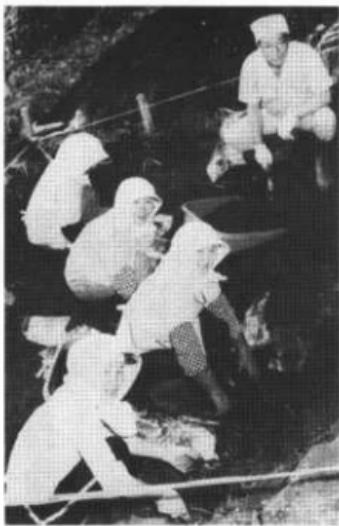


☆A 地区 J<sub>2</sub> グリット II 層の  
発掘状況。

☆A 地区 J<sub>1</sub> グリットⅡ層下の発掘スナップ



☆A 地区 J<sub>2</sub> グリットⅡ層の発掘スナップ



☆A 地区 J<sub>1</sub> グリット上段のスナップ

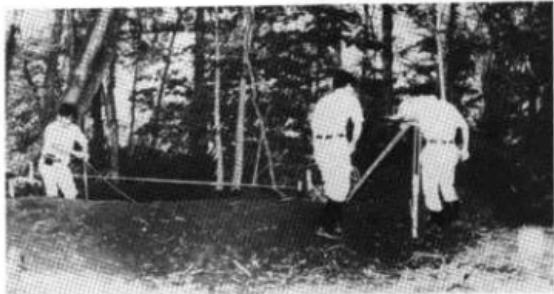


☆A 地区 J<sub>1</sub> グリット上段のスナップ

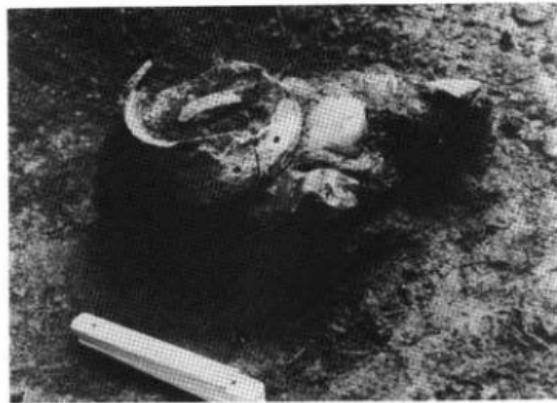




☆A 地区J<sub>1</sub> グリットⅠ層  
の発掘スナップ



☆C 地区X<sub>1</sub> グリットの実  
測風景  
(測量する五所川原市建  
設課員)



☆C 地区C<sub>2</sub> グリット北東  
隅Ⅰ層下出土の「十腰内  
Ⅰ式」広口壺形土器。  
(壺形土器外面からの貫  
通する刺突文が見える。)

☆S A<sub>1</sub> トレンチの状況  
(I 層の下に V 層があつ  
て II ~ IV 層がない。)  
(西南より)



☆S B<sub>1</sub> トレンチの状況  
(このトレンチも II ~ IV  
層がない。)  
(西南より)

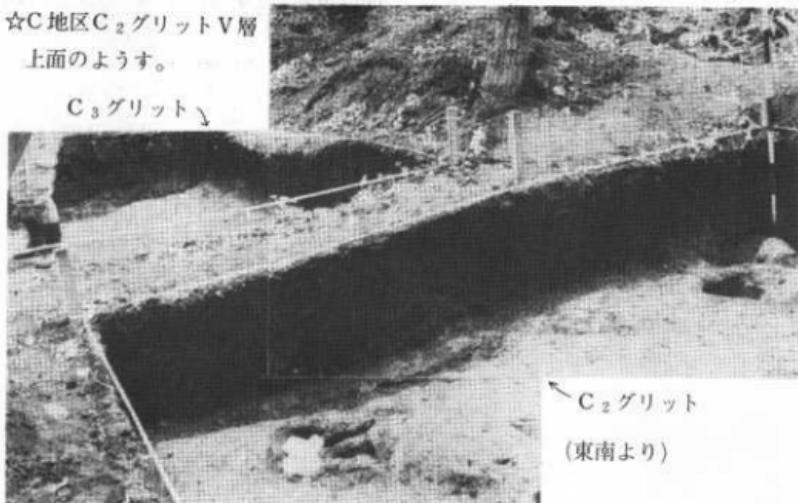


☆A N<sub>1</sub> トレンチの状況  
(A N<sub>1</sub> I 層・II 層は厚  
い。)  
(西方より)

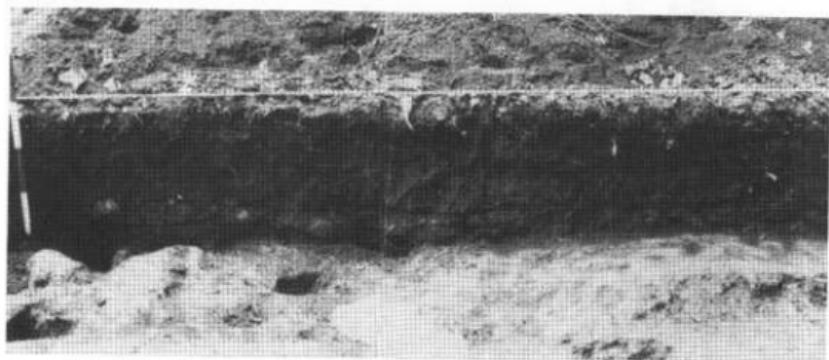


☆C 地区 C<sub>2</sub> グリット V 層  
上面のようす。

C<sub>3</sub> グリット ↴

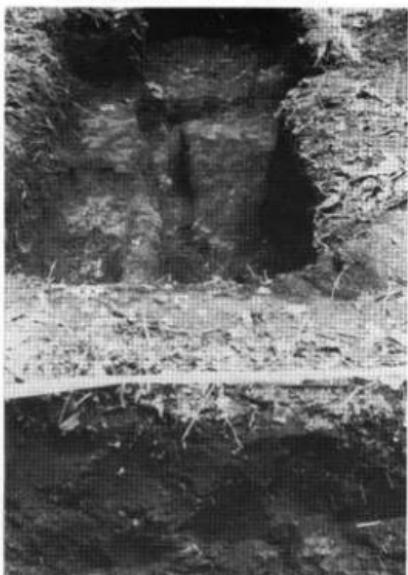


☆C 地区 C<sub>2</sub> グリット 北壁のようす。 (V 層上面の遺構のようす。)



☆C 地区E<sub>4</sub> グリットの遺構

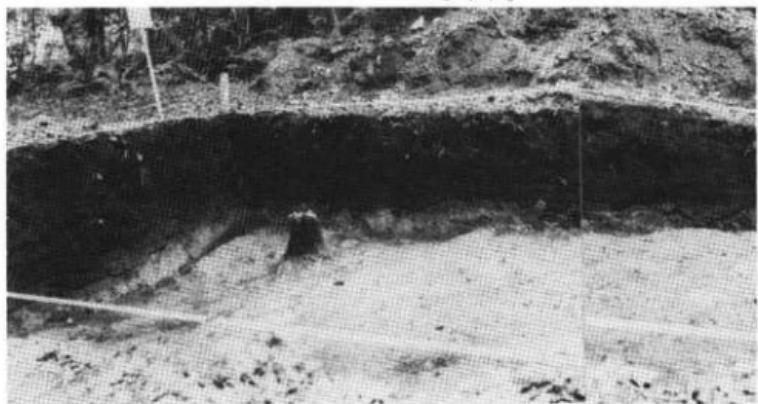
☆C 地区E<sub>3</sub> グリットの柱穴と焼土  
のようす。



(東南より)

(東南より)

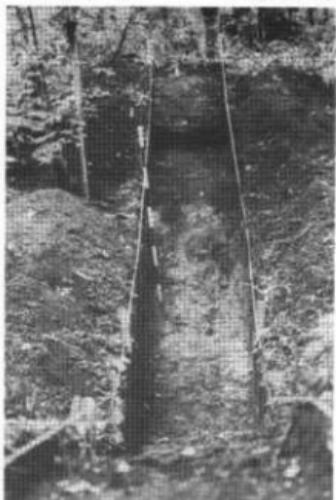
☆C 地区C<sub>2</sub> グリット北・西壁の  
ようす。



(東南より)

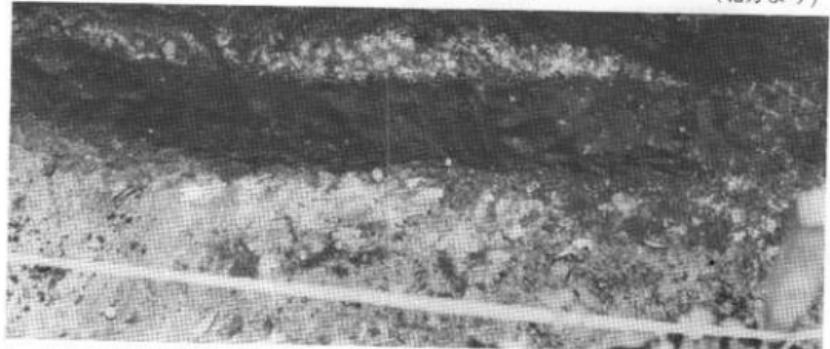
☆D地区D<sub>7</sub>トレンチ  
のようす。 (西方より)

☆D地区D<sub>6</sub>トレンチのようす。 (西南より)



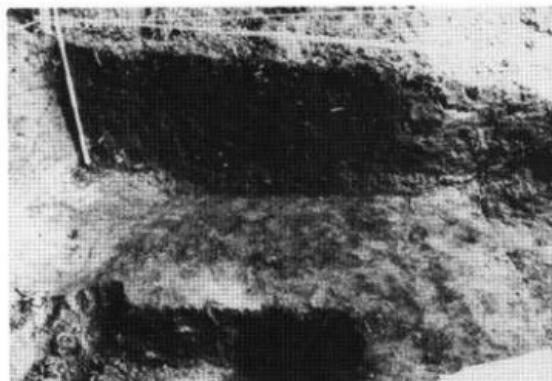
☆D地区D<sub>6</sub>トレンチ南壁のようす。  
(盛土やこの台地の基盤層が見える。)

(北方より)





☆A 地区 J<sub>1</sub> グリット上段  
II 層のようす。 (北壁)



☆A 地区 J<sub>1</sub> グリット上段  
東壁のようす。 (東壁)  
(写真下のサブレンチ  
は、落ち込んでいる。)

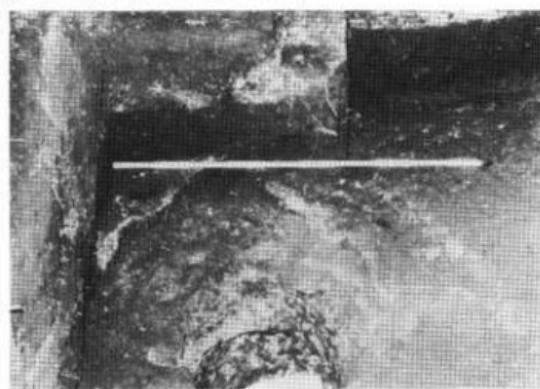


☆A 地区 J<sub>1</sub> 中段と J<sub>2</sub> の下  
段のようす。 (東壁)  
(II 層のようす。 III 層は  
さらに掘下げ必要)

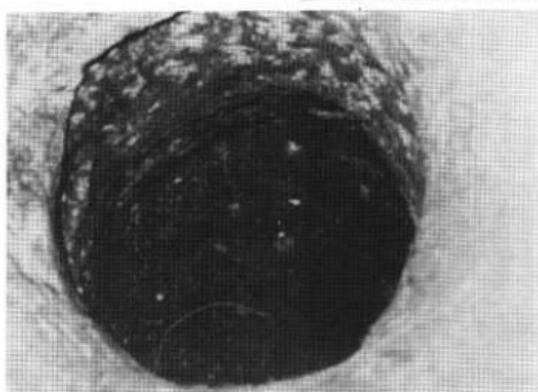


☆A 地区F<sub>5</sub>・E<sub>5</sub>トレンチのようす。  
(F<sub>5</sub>トレンチⅡ・  
Ⅲ層の間に粘土質ロ  
ームの間層がレンズ  
状に堆積する。住居  
址の貼り床の可能性  
あり。)

(東方より)



(西上方より)

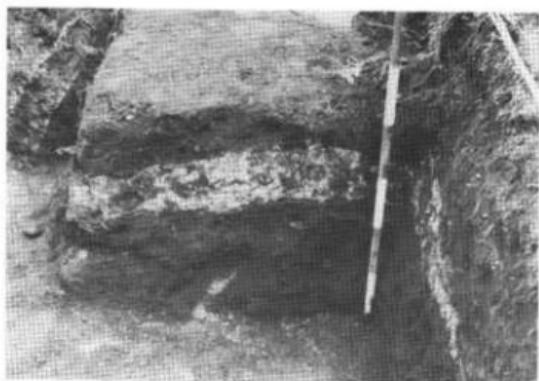


☆C 地区X<sub>1</sub>グリットの井  
戸状遺構のアップ

(西上方より)

☆X<sub>1</sub> グリット北壁のようす。

(盛土のようすが見られる。堀状遺構の盛土である。)



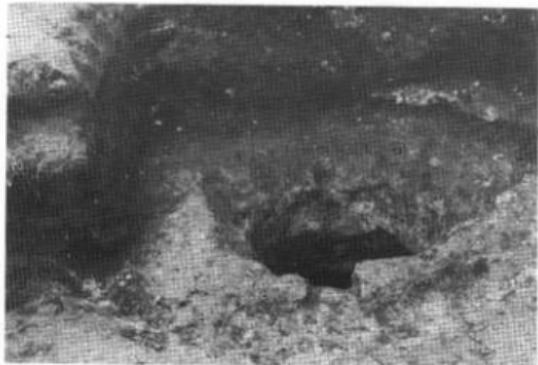
☆同上の東壁、北壁のようす。

(左隅に井戸が見える。)

(西南より)

☆C 地区 X<sub>1</sub> グリットの井戸状遺構のようす。

(西方より)



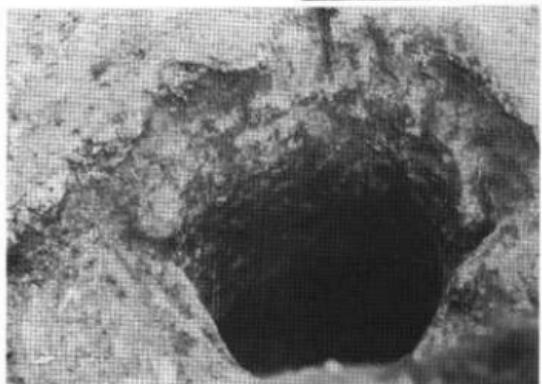
☆C地区X<sub>1</sub>グリットの井戸とそれを囲む溝状遺構の一部  
(左上は、井戸内より掘り上げた礫群)

(南東より)



☆井戸状遺構のようす。

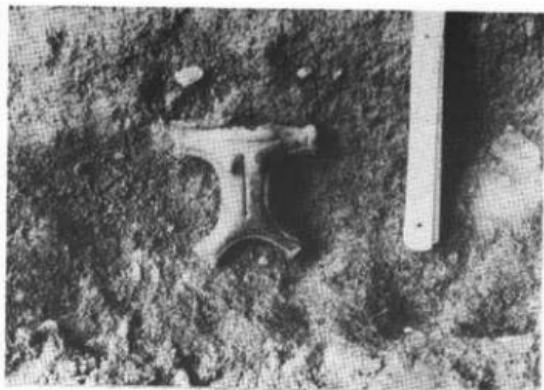
(西方より)



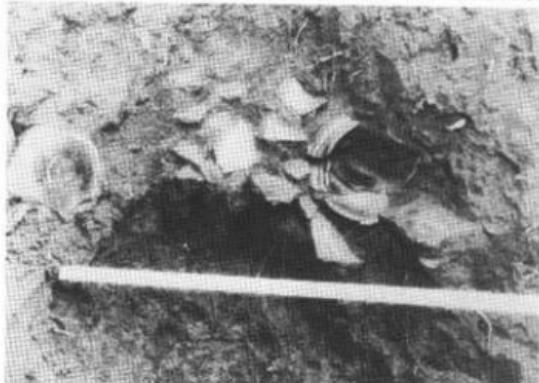
☆井戸状遺構のようす。

(北西より)

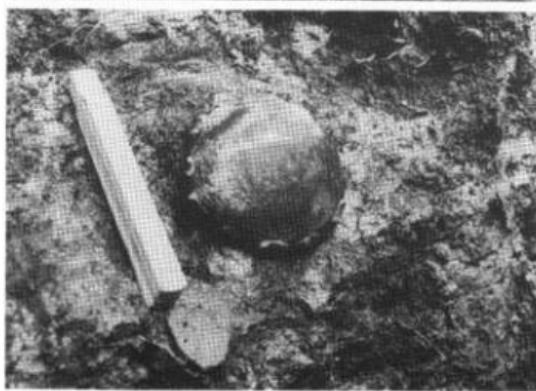




☆A 地区 J<sub>2</sub> グリットⅡ層  
出土の土偶。



☆A 地区 J<sub>1</sub> グリットⅡ層  
の土器出土状況。



☆A 地区 J<sub>1</sub> グリットⅢ層  
出土の皿形土器

☆A 地区 J<sub>2</sub> グリット II 層  
出土の線刻石 (アップ)

①



② 同上出土状況 (西方より)



③ 東壁と線刻石・土器



④ 土器出土状況 (J<sub>2</sub> - II)



⑤ ☆A 地区 J<sub>1</sub> - II 出土鉢形土器



## [ I ] 調査に至る経過と調査要項

### ( a ) 調査に至る経過

昭和49年、土地改良計画により本遺跡の一部が計画範囲に接するため、市教育委員会では試掘調査を実施した。

その結果、当観音林遺跡が「大洞C<sub>2</sub>式」期を中心とする一大遺跡であることが判明した。

以後、当遺跡に注意を払っていたところ、昭和58年、本遺跡の所在する舌状台地の一部が開畑されるため、五所川原市教育委員会は、年次計画により発掘調査をすすめる予定を立案した。

すなわち、昭和58年～同60年度を予備調査の年度とし、昭和61～63年度を本格的調査の年度としたのである。

本年度は予備調査の最終年度としての発掘調査であるが、当遺跡は、縄文時代より歴史時代にわたる遺構・遺物を包蔵する一大遺跡であることが予備調査において判明したのである。

以下、本年度の発掘調査の結果について述べる。

### ( b ) 発掘要項 ( 第2・3図-1 )

☆発掘主体者 五所川原市教育委員会

代表 教育長 鈴木 太左エ門

☆主管課 五所川原市教育委員会社会教育課

○課長 寺田 勇

○課長補佐 時田 武則

○係長 中村 健

○主事 佐藤 文孝

☆発掘期間 昭和60年7月22日～8月3日

☆発掘担当者 日本考古学協会会員 新谷 雄藏

☆調査員 日本地学教育学会々員 川村 真一

・ 北奥文化研究会々員 太田 文雄

・ タクタ 岩崎繁芳

・ タクタ 小山英治

	・北奥文化研究会々員	小野 雅史
	・ タ タ	永沢 秀夫
	・ タ タ	山川 夏子
☆補助調査員	・五所川原工業高校生	太田 竜也
☆特別参加者 (復原担当)	・金木小学校長	浅木 全一
☆測量担当	・都市建設課技師	北川 智章
☆作業員		
	長尾 秀幸・小笠原正男・清野 正一・長尾 テル・長尾由比子・長尾 タミ・	
	小笠原きね・仙庭 春代・長内 和・長尾 繩子・清野 トミ	

### (C) 発掘面積と発掘法 (第2・3図)

☆発掘面積 212m<sup>2</sup>

A地区	• J <sub>1</sub> = 4 × 4 = 16m <sup>2</sup>	52m <sup>2</sup>
	• J <sub>2</sub> = 4 × 3 = 12m <sup>2</sup>	
	• i = 2 × 2 × 4 m <sup>2</sup>	
	• E <sub>5</sub> · F <sub>5</sub> = 2 × 10 = 20m <sup>2</sup>	
中央区	• T · P <sub>1</sub> = 2 × 2 = 4 m <sup>2</sup>	12m <sup>2</sup>
	• T · P <sub>2</sub> = 2 × 2 = 4 m <sup>2</sup>	12m <sup>2</sup>
	• T · P <sub>3</sub> = 2 × 2 = 4 m <sup>2</sup>	
北東T · r	• AN <sub>1</sub> = 2 × 10 = 20m <sup>2</sup>	
南東T · r	• SA <sub>1</sub> = 2 × 10 = 20m <sup>2</sup>	60m <sup>2</sup>
南東T · r	• SB <sub>1</sub> = 2 × 10 = 20m <sup>2</sup>	
C地区	• C <sub>2</sub> = 4 × 4 = 16m <sup>2</sup>	
	• C <sub>3</sub> · D <sub>3</sub> · D <sub>4</sub> = (2 × 4) + (2 × 6) = 20m <sup>2</sup>	88m <sup>2</sup>
	• E <sub>3</sub> · E <sub>4</sub> = 2 × 6 = 12m <sup>2</sup>	
	• X <sub>1</sub> = 4 × 4 = 16m <sup>2</sup>	
D地区	• D <sub>6</sub> · D <sub>7</sub> = 1 × 12 × 2 = 24m <sup>2</sup>	

◎発掘法→トレンチ法およびグリット法による。

(d) グリットの設定について（第2・3図-1、第13図）

今回の第四次発掘調査において、設定したグリット、トレンチは、第3図-1に示したとおりであるが、その意図について若干ふれてみたい。

◎A地区においては、台地の南斜面（約23°の傾斜）に、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリットを設定した。

このJ<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリットは、縄文時代晩期の遺物を主として出土する地区であることは、第1～3次発掘において確認できたところである。このJ<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>は、昨年度のH<sub>2</sub>・H<sub>4</sub>グリットの東側に設定し、主として晩期の土器文化を追求する意図で設定した。

・また、このJ<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリットの北西方、台地の南端に、東西10m、南北2mのトレンチを設定、西側2×5mをF<sub>5</sub>・東側2×5mをF<sub>5</sub>とした。

このトレンチは、台地南端の状況を把握する意図である。

◎C地区は、台地中央北側の地区である。この地区は、第2次調査において、1号住居址を検出した地区である。

この第2次調査で、円形プランの落込みを認めたので、その再調査の目的で、4×4mのグリットを空堀の南端に設定し、X<sub>1</sub>グリットとした。このグリットは、遺構と堀との関係、堀の年代について追求する目的である。

・また、既述した1号住居址（土師器出土）の南側に、C<sub>2</sub>グリット(4×4m)、C<sub>2</sub>グリットの西側にC<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>グリットを、南北に接して、それぞれ、(4×4m)として設定した。

このC<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>グリットのうち、C<sub>3</sub>グリットの北半分(2×2m)は、第3次調査で発掘した部分で、落込みや壁面の一部と思われる遺構が検出されていたので、それを追求する目的である。発掘がすすむ過程で遺構が現れたため、E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>を拡張区として、(2×3m)、および(2×5m)を南北、東西に設定した。（第13図）

このC<sub>2</sub>～E<sub>4</sub>グリットは、土師器を伴う住居址を追求する目的である。

◎AN<sub>1</sub>地区、この地区は、C地区の東側、空堀の南縁に、堀に沿って東西10m、南北2mのトレンチを設定した。

このトレンチは、台地東北部の地層と包含する遺物を知るためにある。（東西基準

線の北側をAN、南側をSAとした。)

◎SA<sub>1</sub>・SB<sub>1</sub>地区、この地区は台地の東南縁辺と、台地の東南、中央南よりに設定し、それぞれ、東西2m、南北10m（西より）、および南北2m、東西10mのトレンチとした。

この両トレンチは、台地中央より東側の地層を調べる意図である。

◎T・P<sub>1</sub>・T・P<sub>2</sub>・T・P<sub>3</sub>、このものは、南北の基準線に沿って、台地の北・中央部・中央南の3地点に、（2m×2m）のテストピットを設定し、台地中央部における縦断地層を点検しようとしたものである。

◎D地区、この地区は、第2次調査から継続して調査してきた堀の様相を知るために、第2～3次調査では、D<sub>1</sub>～D<sub>5</sub>のトレンチを、（1m×12m）5本、堀を縦断して設定してきたものである。

今回の第4次調査では、D<sub>1</sub>トレンチの北にD<sub>6</sub>・南側にD<sub>7</sub>トレンチを（1m×12m）東西に2本掘った。この7本のトレンチを比較して空堀の形態等をつかもうとした。

すなわち、A地区、C地区、AN<sub>1</sub>・SA<sub>1</sub>・SB<sub>1</sub>・T・P<sub>1～3</sub>、およびD地区の発掘結果から、觀音林遺跡の多岐にわたる性格、文化の様子を探る意図である。

## [II] 発掘日誌抄 (第3回)

○7月22日 (月) 曇後雷雨

AM 8:30 全員現地に集合する。簡単な打合わせの後、テントを張る。テントは昨年と同じ場所とする。テントを張り後資材を点検する。本日の作業は、A地区J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリット、およびE<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>、C地区C<sub>2</sub>グリットの設定と草刈りを行う。

草刈り終了後、杭打ちを行ないテープを張る。すなわち、E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>・J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>、C地区C<sub>2</sub>グリットの第I層を剥ぎ取る作業を実施する。

第I層を剥ぎ取る途中で昼となる。昼食中に雷雨を伴う雨となり残念ながら作業を中止する。第一日よりこの調子では今後の作業が心配である。雷は頭上を走っているようである。

○7月23日 (火) 曇後晴

作業開始 8:30 本日の作業は、SA<sub>1</sub>・AN<sub>1</sub>の第I層剥ぎとりから始める。SA<sub>1</sub>では、第I層の下に第II・III・IV層は無く、いきなり第V層である。小落込が認められる。

AN<sub>1</sub>は、第I層が厚い、この層の中位まで掘り下げる。縄文時代後期「十腰内I式」晩期「大洞C<sub>2</sub>式」土器が混在している。

C地区C<sub>2</sub>グリット第I層を掘り上げる。また、SB<sub>1</sub>トレンチの草刈りと杭打ちを行う。このトレンチは明日より掘り下げる。

さらに、C地区X<sub>1</sub>グリットの草刈りと杭打ちテープ張りを行う。

出土遺物は、C<sub>2</sub>グリット(以後C<sub>2</sub>Gと略記する)より注口土器片、半個体の「十腰内I式」土器出土、AN<sub>1</sub>のI層より土偶肩部破片出土、この土偶の文様は珍らしい「十腰内I式」であるが類例が無い文様である。また、C<sub>2</sub>Gより有柄横形スクレーパー出土。本日より土器の出土が次第に多くなる。

○7月24日 (水) 曇後晴

発掘第三日、遺物の出土が次第に多くなる見込みである。本日の作業は下記の予定である。

AN<sub>1</sub>の第I層掘り下げ、C地区C<sub>2</sub>G第I層の掘り下げ、SB<sub>1</sub>の荒掘り続行、およびA地区J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>・E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>の荒掘り開始等である。全員を五つに分け作業に

かかる。

AN<sub>1</sub>は、相変らず後期・晚期の遺物が混在して出土する。第Ⅰ層は、二次堆積の可能性がある。C<sub>2</sub>Gは、第Ⅰ層よりⅡ層に掘りすすむ、「大洞C<sub>2</sub>式」の土器片が出土する。

C地区X<sub>1</sub>-I層を掘り下げる。北壁・東壁セクションに盛土（粘土層）を認め。このC地区X<sub>1</sub>-I層では、後期・晚期の土器片が混在して出土する。I層は、二次堆積土である。

出土遺物は、C地区X<sub>1</sub>Gより石鎌1、鉄製品（刀子片）出土、AN<sub>1</sub>-Iより石鎌1、エンドスクレーパー1、クボミ石が出土する。

○7月25日 (木) 晴

本日の作業はつぎのとおり、AN<sub>1</sub>-I層をさらに掘り下げ、C地区C<sub>2</sub>Gは、Ⅱ層を下げる。

同じくC地区X<sub>1</sub>Gは、盛土の下位の原黒土層を掘り下げる。X<sub>1</sub>Gは晚期・後期の土器と土師器片も出土する。

A地区E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>はI層の次に粘土層を認める、この粘土層は貼り床の可能性がある。

SA<sub>1</sub>、SB<sub>1</sub>の草刈りと杭打ち・テープ張りを行う。

出土遺物は、C-X<sub>1</sub>より「大洞A式」の台付土器、ポイント1、AN<sub>1</sub>-Iより土偶脚部、小石斧1、AE<sub>5</sub>-Iより石鎌1等である。

なお、小泊中生3名、永沢教諭の指導で、発掘に参加する。

○7月26日 (金) 晴

本日の作業は次のとおりである。A地区J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリッド(AJ<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>Gと以後略記する。)の掘り下げと以下の検出である。CX<sub>1</sub>-V層上で焼土とカマド遺構を検出(CX<sub>1</sub>は、Ⅱ~Ⅲ層はない)カマドの下に落込みがさらにあるようである。明日精査必要、C<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>Gで溝状遺構を検出、住居址の一部である。付近には焼土もあり、柱穴も検出する。

また、C<sub>2</sub>G-V層上に南北に伸びる柱穴を検出、出土遺物は円盤状扁平石器、石鎌、スクレーパー、出土土器は、全部で20箱(60cm×28cm×15cm)を数える。晚期10、後期6、土師等4箱の割合である。

○ 7月27日 (土) 晴

本日の発掘は、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>のI層掘り下げと、C-X<sub>1</sub>—カマドの実測、C<sub>3</sub>、D<sub>3</sub>—V層上の溝状遺構の追求、E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>の粘土層の追求である。

J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>は、土器・石器の出土量が多い晩期の土器が主体である。

C-X<sub>1</sub>では、カマドの実測図を作成後それを取り去る。カマドの下に径1.2m程度の落込みがあり、それを追求するためである。

C<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>溝状遺構の追求のためE<sub>3</sub>を設定し掘り下げる。また、E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>の追求によって住居址が所在することが確実になってきた。

出土遺物は、晩期・後期が多いが土師器も少量、須恵器も数片出土した。

○ 7月29日 (月) 晴

本日は、E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>、X<sub>1</sub>、E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>・E<sub>5</sub>の発掘である。

E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>では、トレンチの西側で砂層をI層下で検出する。この台地は西側には砂層が分布しているようである。

J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>のI層は深く晩期「大洞B・C、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、A式」土器の出土が多い。

C-X<sub>1</sub>—V層の落込みは、井戸状遺構のようである。未だ底面に到達しない。の中には円礎が互層的に多く出土する。

E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>・E<sub>5</sub>—V層で溝状遺構と柱穴を検出する。D<sub>3</sub>、D<sub>4</sub>のものと連結する。すなわち長方形プランの住居址らしい。

D地区は、本日より発掘にかかる。すなわち、堀状遺構調査のためである。

第二次調査では D<sub>1</sub>、第三次では、D<sub>2</sub>～D<sub>5</sub>トレンチにより堀状遺構を発掘調査したが、今回は、D<sub>6</sub>・D<sub>7</sub>トレンチにより、さらに堀状遺構の形態を確認する意図である。

○ 7月30日 (火) 曇後晴

本日の作業は次のとおりである。A地区J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>の掘り下げ、C地区X<sub>1</sub>の住居址カマド実測後、それを取り去り、その下位の井戸状遺構を掘り下げる。

また、C<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>で検出した溝状遺構を追跡するためE<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>を設定掘り下げる。さらにD地区はD<sub>6</sub>、D<sub>7</sub>トレンチの掘り下げを行う。

D<sub>3</sub>の南壁V層を掘り込んだ溝状遺構は、E<sub>4</sub>、E<sub>3</sub>・C<sub>4</sub>・D<sub>3</sub>に続き、その四隅には柱穴があることを確認する。すなわち、四ヶの柱穴と溝を備えた方形プランの

4.5m × 4.3m 規模の小住居址と思われる。

出土遺物は、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>より晩期、後期の土器、C<sub>3</sub>～E<sub>4</sub>では土師器、X<sub>1</sub>では井戸状遺構内より、打製石斧、土師器片が出土した。

出土土器は、約40箱分となる。J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>の出土量が多い。

#### ○ 7月31日 (水) 曇後晴

本日の作業は次のとおりである。A地区 J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>は、上段・中段・下段に分けて発掘する。(斜面のためである)この地区は、Ⅱ層よりⅢ層に掘りすすむ。層序は複雑である。

C地区は、V層で確認した井戸状遺構の掘り下げとその実測準備、C<sub>3</sub>～E<sub>4</sub>ではカマドの検出にかかるも検出できない。

D<sub>6</sub>・D<sub>7</sub>トレンチ掘り下げ完了とセクションの実測をする。

朝日・読売新聞記者取材のため来る。

E<sub>3</sub>で焼土堆積地点を検出、この焼土堆は、D<sub>3</sub>の方向と、東方へも小土手状にのびているが性格等は不明、次年度追跡したい。

本日で、C<sub>3</sub>・C<sub>4</sub>・D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>・E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>の発掘を終る。四隅に柱穴を持ち、溝を壁面下に備えた小住居址である。カマドの検出はない。次年度完掘したい。

X<sub>1</sub>グリットの井戸状遺構掘り下げ完了(底面は未完) フラスコ状の形態である。底面には細石を敷きつめている。V層を約2m掘り下げている。

#### ○ 8月1日 (木) 曇後雨

本日より発掘区の整理と図面作成にかかることにする。作業は次のとおりである。

1. E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>のセクション図作成
2. J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>の掘り下げ
3. AN<sub>1</sub>のセクション図作成
4. T・P<sub>1・2・3</sub>を掘る
5. C地区C<sub>3</sub>～E<sub>4</sub>の平板測量と各区のG・Hを計測する
6. 写真撮影

調査員が分担して行う。作業員は、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>の掘り下げに集中する。J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>は相変らず土器・石器の出土量が多い。

本日、五所川原市文化財審議委員全員が集まり、審議委員会が現場で開かれる。

○ 8月2日 (金) 晴

A・M 8:30 通常どおり作業開始、本日の作業は、前日の1~6の続行である。一晩で落葉がたまるため清掃後作業を開始する。

J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>はⅡ層よりⅢ層へ掘り進むも出土遺物が多く、進度は遅い、Ⅱ層とⅢ層の間にブロック状の粘土層が東側に介在する。

この層より線刻石出土、また骨片類も出土した。

出土した土器・石器類は、50箱となったが約20箱は、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>出土である。晩期の「大洞C<sub>2</sub>式」が主体である。

○ 8月3日 (土) 晴

A・M 8:30 作業開始、発掘最終日、前日につづく作業である。

特に、D<sub>6</sub>・D<sub>7</sub>の注記(セクションの)を念入りに行う。掘状遺構は、第二次以来、計7本のトレンチで調査したが結論は箱形掘りであった。

J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>は午前中掘り下げるとともに北壁、東壁、のセクションをとる。J<sub>1</sub>北壁で前期の落込みを検出するも未完掘である。

発掘各区を清掃、杭・テープを取り除き発掘を終了する。

午後より埋めもどし作業を行なう。埋めもどしは6日までの予定である。

### 〔III〕 地形・層序（第1・2・3-2図）

#### （1）地 形

本遺跡は、五所川原市の東方約5km、松野木部落の南端にあって、五所川原駅前より弘南バスにて約20分、南松野木バス停留所下車、約10分の西方舌状台地上に位置する。

この台地は、最も高い地点で標高約33,283m（B・M）であって西南方向に突出する台地である。

この地域には、松野木川が県道福山・五所川原線を横切っており、この周辺には、長者森山・境山・鶴野等の遺跡が梵珠山系の山麓に点在している。

松野木地区の地形を大きく分けると、東方から西方へ向って、中山山脈の南端を占める梵珠山地（標高500～300m）、それに続く大駅迦丘陵（標高200～100m）、前田野目台地（標高70～30m）および津軽平野の四つに区分することができる。

この松野木台地は、既述の前田野目台地上に位置しており、北は天神川、南は松野木川によって挟まれた部分を占めている。

前田野目台地は、海成段丘で津軽平野の東縁に原子・野里・松野木・飯詰と連続して分布しており、この台地を梵珠山地に源をもつ小河川が浸食によって谷をつくり寸断している。この開析谷には境ノ沢溜池・長橋溜池など多くの溜池がつくられている。

前田野目台地は面高度によって3面に細区分ができる。すなわち、標高50～70mのⅠ面、30～40mのⅡ面、20～30mのⅢ面に分けられる。松野木地区は、このⅡ面上にある。

観音林遺跡は、この松野木台地の南西端部にある。この台地は、その北側を流れる松野木川の浸食によって舌状台地となっており、標高は25～30mを示しⅡ面に連続している。

遺跡の南方一帯は小規模ながら松野木および、その支流の形成した扇状地となっている。

なお、遺跡の北側約0.3km付近を西流する松野木川は、津軽平野を北流して十川と合流するが、一部は境ノ沢溜池に注いでいる。

#### （2）地質および層序（第3図-2）

本遺跡の基本層序は第3図-2（C・D・A）に示すとおりである。

遺跡のベースをなすのは、V層のローム層で、遺物の包含層はⅡ～Ⅳ層である。

V～IX層までは段丘の構成層で遺物の出土とは直接的には関係ないが、遺跡内で発見された歴史時代のものと考えられる空掘の構造との関係から特に記載することにした。なお、この段丘の基盤をなすのはIX層の凝灰質細粒砂層である。以下に各層の特徴を述べる。

#### ☆ 層序（第3図-2-③）

Ⅰ層・黒褐色を呈しており、草木根が多数混入する腐植土で表土を形成する。

Ⅱ層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており直径1mm程度の粗砂を混入する。

Ⅲ層・黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈する。

IV層・ローム層から黒土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐を呈する。

V層・粘性の強い黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。

VI層・黄褐色で粘性の強い粘土である。

VII層・粘土・砂および直径数cm程度の主に亜角礫層で段丘礫である。

VIII層・凝灰質細砂まじりの粘土で下層數cmはオレンジ色を呈する。

IX層・遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で黄褐色凝灰質細粒砂層である。

以上が、当観音林遺跡における基本層序であるが、今回の調査では、C地区C<sub>2</sub>グリットの発掘調査において得た観察の結果、基本的には既述の層序と同様なるも、C地区における基本層序図を第3図-2-①に掲げることにする。

#### ☆ C地区基本層序（第3図-2-①）

Ⅰ層・表土で草木根が多数混入する腐植土である。

Ⅱ層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており、直径1mm程度の粗砂を混入しており、前記のⅡ層と同様である。

Ⅲ層・原黒色土である。粒子が細かく、粗砂も混入することは、Ⅱ層と同質であるが、しまりがあり、粘質もややある。

IV層・黄黒色土で、V層の粘土質ロームも混入しており、Ⅲ層からV層へうつる漸移層である。

V層・黄褐色粘土質ロームである。均質ロームで粘性も大である。

以深は、本台地の基盤をなす層で、第3図-2-②に同じである。当遺跡は、この層序のI～III層に遺物が包含されているが、特にII・III層が濃密である。また、検出された遺構は、いずれもV層を掘り込んでいるものであった。このV層以深は、本舌状台地の基盤をなす層（V～IX層）であって、既述したとおり堀状遺構との関係からV～IX層を基本層序として示した。

#### (IV) 遺構 (第4-①、6-⑦、 7-⑩、8-⑪、11・12・13図)

観音林遺跡の第1～第3次発掘において検出した遺構を列挙すると下記のとおりである。

- 1) 土偶 (大洞C<sub>2</sub>式) を内蔵した小土括 (第1次)
- 2) 焼土堆積遺構 (第1次) → 「大洞C<sub>2</sub>式期」 (以上A地区)
- 3) 土括群 (縄文時代、後期「十腰内I式期、および晩期「大洞C<sub>2</sub>式」期 (第2次)
- 4) 小土塁をもつ住居址 (土塁は五～六角形に近いプラン) → (土師器使用期)  
→ (以上B地区、第二次)
- 5) 竪穴住居址 (4m × 4.5m → 長方形プラン) カマドを備え、壁面内側に溝をもつもの。(土師器使用期 → 第二型式 → (C地区))
- 6) 堀状遺構 (第二次より第四次まで継続調査) → 歴史時代

以上の1～6が第1次～第3次発掘調査において検出した遺構である。

これらの検出した遺構については、第1～第3次発掘調査報告書において既に述べてある。

この報告書では、これらの遺構については割愛して、第4次調査で検出した分について述べることにする。なお次年度に残した未完掘のものについても簡単にふれることにする。

##### ☆第4次発掘調査で検出した遺構

- (a) 堀状遺構 (b) 住居址(2号) (c) 住居址(3号) カマド  
(d) 井戸状遺構 (e) その他

以上であるが、これらの(a)～(e)について以下に述べることにする。

##### (a) 堀状遺構 (第2・3・2・9・10・12図・表1)

この遺構については、さきに述べたとおり、第2次発掘調査よりD地区として継続して調査をすすめてきたところである。

すなわち、第2次では、D<sub>1</sub>、第3次では、D<sub>2</sub>～D<sub>5</sub>トレンチによって調査をすすめてきたのであるが、(第12図、表1)に示すとおりD<sub>2</sub>～D<sub>5</sub>トレンチのセクション、および表1のデーターを見ると理解されるように堀の形態は、多少の相違はあると

しても堀り方は箱形であることが理解される。

しかし、最初に掘ったD<sub>1</sub>トレンチのセクションでは、堀の底面には、細い溝が東端、西端に認められる。(第12図)

そこで、箱形掘りであるとの結論を控え、再度検討を加えることにした。

○第三次発掘調査におけるD<sub>2</sub>～D<sub>5</sub>のトレンチ発掘に引き続き、本調査では、D<sub>6</sub>・D<sub>7</sub>の2本のトレンチを掘り調査した。以下に本遺構の調査結果について述べる。

#### (1) 位 置 (第2図)

本遺構の北東隅から西へ弧状に伸びる堀状遺構に第2図に示すように、既に調査したD<sub>1</sub>～D<sub>5</sub>に加え、本調査では、D<sub>1</sub>トレンチの北・南にD<sub>6</sub>・D<sub>7</sub>トレンチを設定した。

#### (2) 形態・構造 (第12図)

第12図には、第二・三次および本調査で発掘した堀状遺構(D<sub>1</sub>～D<sub>7</sub>)の断面図を、また、(表1)には、これらの断面から得られた形態・構造上の諸要素の測定値を示した。

第二次発掘で調査したD<sub>1</sub>については、その形態のタイプは薬研堀的ではあるが明確ではなく、底部の両側に溝を通しているのが特徴であった。

第三次発掘による堀状遺構(D<sub>2</sub>～D<sub>5</sub>)では、それらの断面から箱堀りタイプであることがわかった。本調査の2本のトレンチからもさらにそれが裏づけられた。

第二次から本調査までに得られた資料から遺構の形態・構造について判明したことを次に述べる。

①堀状遺構内側(南側)の基盤から盛土への傾斜は、どのトレンチでも40～50°である。

②基盤掘り込みの深さは0.5～0.6mで共通している。

③底面の幅は、2グループに分けられる。すなわち、幅4mのD<sub>2</sub>・D<sub>5</sub>と2～2.7mのD<sub>7</sub>・D<sub>1</sub>・D<sub>6</sub>・D<sub>4</sub>のグループである。

④盛土から底面までの深さは、D<sub>7</sub>・D<sub>1</sub>・D<sub>6</sub>・D<sub>2</sub>は2.8～2.9m、D<sub>5</sub>・D<sub>3</sub>は2.4～2.5m、D<sub>4</sub>が2mと3グループに分けられ、次第に低くなっている。

⑤基盤掘り込みの幅は、D<sub>7</sub>・D<sub>1</sub>・D<sub>6</sub>は5m台、D<sub>2</sub>・D<sub>5</sub>は4m台、D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>

は3m台とやはり3つのグループに分けられ、西に行くほど狭くなっている。

④・⑤について、グループに分けられる理由は、基盤傾斜とトレンチの位置関係に由来するものと考えられる。

トレンチの中でD<sub>4</sub>が傾斜以外のどの項目も測定値で低い値が出て、特異な存在となっているようにみえるのも基盤傾斜と直角という位置を考えればその理由がうなづける。

#### (b) 2号住居址（第13図）

このものは、C地区C<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>・E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>、グリットのV層を掘り込んだもので、表土下約40cmで検出した。（注、1号住居址は第三次でC地区B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>グリットで検出）

遺構は、東西4.5m・南北4.2mの方形プランを持つもので、溝は四周に所在する。溝の四隅には、柱穴があり、この柱穴は、V層上面より約15~20cmは方形、それ以深は円形をなすものである。

この住居址には、カマドがあるかどうかは完掘していないので不明であるが、住居址外に焼土の堆積が認められる。

完掘は次年度の予定であるが、住居址とすれば小形のものと思われる。なお、この遺構は、土師器（第二型式）を伴う遺構である。

#### (c) 3号住居址・カマド（第8図-⑪）

この遺構は、C地区X<sub>1</sub>グリットV層上面で検出した。

この三号住居址は、第8図-⑪に示したとおり、表土より約1m下のV層で出土したものである。カマドは煙出し口など欠失していたが南向きのものと考えられる。なおカマドの基部も欠失していたが北西隅に住居址壁面がわずかに残存していた。

以上のことから三号住居址としたものである。なお、注目すべきは、この三号住居址の北側は、一部の壁面を残して掘によって切られていたこと、および、カマドの下にV層を掘り込んだ「井戸状遺構」があったことである。このことについては後述する。

#### (d) 井戸状遺構（第8図-⑪、第11図）

本遺構は、半径約60cmの円筒形を呈しており、基盤に深く掘り込まれている。深さは基盤面（第VI層上面）から2.1mまで確認しているが、それよりまだ深く掘削し

ているようでその下限は本調査では認められなかった。

形態から本遺構は「井戸」と考えられる。

本遺構の地下確認面までの地質は、第3図-2の「堀状遺構基本層序」の基盤(VI層)の構成とほぼ同じで遺構は基盤(VI層)を掘り込んでいる。

遺構中の下位に向っての地質は、ローム層(VI-1・VI-2)、粘土質礫層(VI-3)、粗砂層(VI-4)、砂質粘土(VI-5)、凝灰質細砂(VI-6)となっており、このうち、砂質粘土層を基底として、その上位の粗砂層(一部粘土質礫層)が滲水層になっていると考えられる。

以上のような地質構成から「井戸」としての機能は果たしていると思われるが滲水層がやや薄いため優秀な井戸とはいえないようである。

なお、井戸内には底面に土師器(甕形)、焼土、粘土、黒土、石斧(打製)、小形ポイント、縄文式土器片、および、大量の円礫が互層して堆積していた。(第11図)

#### (e) その他の遺構(第4図-1、第6図-⑦、第7図-10、第8図-⑪)

☆第4図-①に示したF5平面図を見るとわかるとおり、表土約10cm、黒土約10~15cmの下に貼付された粘土層が不整な円形プランで検出され、一部に木炭混入黒土層、焼土層が分布して検出された。

また、貼付された粘土層の下位には原黒土層が存在する。

すなわち、黒土層の上面に粘土層が所在することから住居址床面の一部と判断される。

☆第6図-⑦は、C地区C<sub>2</sub>グリットの横断図である。このグリットでは、A<sup>1</sup>-Aの線において、柱穴状ピット、N<sub>6.1</sub>~N<sub>6.4</sub>が北西より南東に一列に並んで検出されたが、柱穴の対応関係等は、不明である。(第13図参照)

☆第7図-⑧にpit N<sub>6.13</sub>、同図-⑨にpit N<sub>6.14</sub>・15を認める。また、同図-⑩には、別個な壁面が検出される。

このうち、pit 14・15は、二号住居址に伴うものであり、また、⑩の南側壁面は、これも二号住居址のものと認められる。

☆第8図-⑪に示したように、X<sub>1</sub>-V層上面に溝状落込みを検出した。この溝状落込みは、5~8cmの浅い円形のもので、土師器片が密着して出土したが、性格そ

の他は不明である。

以上、その他の遺構としたものは、未完掘のものもあり次年度に解明したいと思う。

〔表1〕

各 堀 状 遺 構 の 測 定 値

測定項目	遺構番号	D <sub>7</sub>	D <sub>1</sub>	D <sub>6</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>5</sub>	D <sub>3</sub>	D <sub>4</sub>	
基盤掘込みの幅(m)		5.8	5.1	5.3	4.5	4.5	3.4	3.5	
底面の幅(m)		2.6	2.2	2.1	3.8	4.0	2.3	2.7	
基盤掘込みの深さ(m)		0.5	0.59	0.6	0.58	0.5	0.55	0.5	
基盤上面から底面までの深さ(m)		1.3	1.8	1.4	1.5	1.4	1.7	1.0	
盛土から底面までの深さ(m)		2.8	2.88	2.95	2.8	2.5	2.38	2.0	
基盤掘込みの傾斜(角度°)	N (W)	43	35	40	80	50	60	48	
	S (E)	53	35	45	70	80	55	70	
基盤から盛土への傾斜(角度°)	N (W)	25	35	28	52 の 2 段 階段状		40	27	50
	S (E)	40	40	53	50	50	40	38	

[素2]

經文時代編年表(含觀音林遺跡第1~4次)

推定年代	区分	土器型式	觀音林第一次 S49試掘	觀音林第二次 S58	觀音林第三次 S59	觀音林第四次 S60	主な遺跡
13000 ± 6000	草創期 早期	省略	/	/	/	/	・鶴ヶ沢町 鳴戸遺跡
5 5000	前期	a b c d d <sub>1</sub> d <sub>2</sub>	/	/	円筒下唇式 a式 d <sub>2</sub> 式	円筒下唇式 1. a式 d <sub>1</sub> 式	・五所川原市 原子A遺跡
5 4000	中期	a b c d d <sub>1</sub> d <sub>2</sub> e	/	円筒上唇式 b式	円筒上唇式 d <sub>2</sub> 式	円筒上唇式 3. b式	・深浦町 ・本松遺跡 ・五所川原市 原子B遺跡
5 3000	後期	I II III IV V VI 十種内式	十種内式 I 式	十種内式 I 式	十種内式 II 式	十種内式 4. I 式 5. II 式	・五所川原市 原子B遺跡
5 2000	晚期	B B-C C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> A A 大洞式 大洞式(鶴ヶ円)	大洞式 C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> A A	大洞式 B-C式 C <sub>1</sub> 式 C <sub>2</sub> 式 A式	大洞式 B-C式 C <sub>1</sub> 式 C <sub>2</sub> 式 A式	大洞式 6. B-C式 7. C <sub>1</sub> 式 8. C <sub>2</sub> 式 9. A式	・木造町 鶴ヶ岡遺跡 ・市浦村 五月女庵 遺跡
B-C 300 A-D 300	弥生	省略	/	/	/	/	・五所川原市 山道遺跡
5 800	歴史時代	土師器 第一型式 第二型式 須恵器	土師器 ・第二型式 ・須恵器	土師器 ・第二型式 ・須恵器 ・珠州焼	土師器 ・第二型式 ・須恵器	土師器 10. 第二型式 11. 須恵器 ・鉄器片	・五所川原市 前田野目 遺跡 持子沢遺跡
備考		*他に擴状遺構がある。また、井戸状遺構も出土した。 *第四次のらん——1~11——の数字は、第1~第11群土器の意である。					

〔表3〕観音林遺跡A地区J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリット出土骨類鑑定表

鑑定者 金子 浩昌

資料	記録
No 1	シカ中手骨左近位端内側部分の破片 骨端を輪切りにするように割っているものである。加工の方法としては珍しい。
No 2	A. 鳥骨片と思われる骨片と中形獸骨片 1 B. 鹿角断片か
No 3	1. シカ、イノシシなどの大形獸の骨片と思われるもの 2. 骨、針の破片ではないか円形断面の棒状品、長さ7.0、径4.4mm
No 4	シカ、イノシシの小骨片 No 5と同じものかと思われる。
No 5	焼けた小骨片のみである 大形の獸の小骨片 中形（イヌ・タヌキ・キツネなど）の獸のものと思われる小骨がある。
No 6	同定不能の小骨片、おそらくシカ、イノシシなどの指骨等の骨端の破片ではないか。

〔表4〕

觀音林遺跡出土石器・石製品等一覽表(第4次)

種別	類別	S・P・L	No.		計測値(cm) (長径×最大幅×厚)	重量 (g)	石質	出土区・層位
			写	器種別				
石器	S・P・L		1	1	2.55×0.95×0.49	1	珪質頁岩	A-J <sub>2</sub> -II
			2	2	3.90×0.42×0.45	1	◆	A-J <sub>1</sub> -I
			3	3	2.68×1.40×0.5	1	◆	A-J <sub>2</sub> -I中
			4	4	3.78×0.54×0.5	2	◆	A-J <sub>2</sub> -I
			5	5	3.30×1.7×0.3	1	◆	A-J <sub>2</sub> -I上
			6	6	3.3×0.85×0.4	1	◆	A-J <sub>1</sub> -III下
			7	7	2.66×1.50×0.3	1	◆	A-J <sub>2</sub> -II
			8	8	3.0×1.46×0.72	1	めのう	A-J <sub>2</sub> -II
			9	9	2.5×2.51×0.48	1	珪質頁岩	A-J <sub>2</sub> -I下
			10	10	2.2×1.07×0.38	1	◆	A-J <sub>1</sub> -III
			11	11	2.12×2.18×0.50	1	◆	A-J <sub>2</sub> -II
			12	12	3.15×1.4×0.5	2	◆	A-J <sub>2</sub> -III
			13	13	2.48×1.5×0.38	1	◆	AN <sub>1</sub> -I
			14	14	2.42×1.08×0.7	3	◆	A-J <sub>1</sub> -III
			15	15	3.3×1.51×0.58	1	◆	A-J <sub>1</sub> -III
			16	16	3.28×1.20×0.42	0.5	◆	A-E <sub>5</sub> -II
			17	17	3.30×1.16×0.5	1	◆	A-J <sub>1</sub> -I
			18	18	4.7×1.2×0.38	1	◆	A-J <sub>1</sub> -I
			19	19	2.99×1.58×0.5	1	◆	A-J <sub>1</sub> -III
			20	20	2.62×0.81×0.4	1	◆	全上
			21	21	3.58×1.1×0.38	1.5	◆	A-J <sub>2</sub> -I下
			22	22	3.96×1.05×0.55	5	◆	A-J <sub>1</sub> -III
			23	23	3.22×1.30×0.46	4	◆	A-J <sub>1</sub> -III
			24	24	3.15×1.0×0.4	8	◆	A-J <sub>2</sub> -II
			25	25	2.62×1.26×0.44	1	◆	A-J <sub>2</sub> -III
			26	26	3.38×1.12×0.6	2	◆	A-J <sub>1</sub> -III
			27	27	2.92×1.14×0.46	2	◆	A-J <sub>1</sub> -I下
			28	28	3.28×1.23×0.53	2	◆	A-J <sub>1</sub> -I下
			29	29	2.13×2.6×0.39	2	◆	A-J <sub>2</sub> -II

☆註 (△印は欠損品である)

石 織	S · P · L <sub>1</sub>	30	30	$2.26 \times 0.67 \times 0.6$	2	珠 質 頁 岩	A - J <sub>1</sub> - III
		31	31	$2.08 \times 1.34 \times 0.48$	2	◆	A - J <sub>1</sub> - III
		32	32	$2.28 \times 1.36 \times 0.5$	2	◆	A - J <sub>2</sub> - II
		33	33	$2.71 \times 1.11 \times 0.47$	1	◆	A - J <sub>1</sub> - I 下
		34	34	$3.22 \times 1.38 \times 0.4$	2	◆	A - J <sub>1</sub> - III 下
		35	35	$1.22 \times 1.24 \times 0.56$	1	◆	A - J <sub>2</sub> - I 中
		36	36	$4.72 \times 1.66 \times 0.57$	4	◆	A - J <sub>1</sub> - III
		37	37	$3.42 \times 1.0 \times 1.0$	2	◆	A - J <sub>1</sub> - I 下
		38	38	$3.82 \times 1.54 \times 0.7$	8	◆	A - J <sub>2</sub> - I
		39	39	$2.61 \times 1.62 \times 0.54$	5	◆	C - CX <sub>1</sub> - I
		40	40	$3.97 \times 1.32 \times 0.64$	3	◆	A - J <sub>2</sub> - I
		41	41	$4.82 \times 1.43 \times 0.72$	2	◆	A - E <sub>5</sub> - I
		42	42	$8.02 \times 1.64 \times 0.91$	2	◆	A - E <sub>5</sub> - II
		43	43	$3.14 \times 1.48 \times 0.6$	1	◆	A - J <sub>2</sub> - II
		44	44	$2.89 \times 1.48 \times 1.68$	1	め の う	A - J <sub>1</sub> - II
削 器 Side scraper	有柄	45	1	$4.70 \times 4.22 \times 0.75$	10	珠 質 頁 岩	A - J <sub>1</sub> - III
		46	2	$5.86 \times 7.87 \times 1.28$	40	◆	A - J <sub>1</sub> - III
		47	3	$6.92 \times 3.52 \times 1.42$	38	◆	A - J <sub>2</sub> - II
		48	4	$7.78 \times 3.34 \times 0.6$	15	◆	C - E <sub>3</sub> - II 下
		49	5	$4.15 \times 4.96 \times 1.28$	20	◆	A - J <sub>2</sub> - II
		50	6	$6.86 \times 3.0 \times 0.87$	20	黒 曜 石	A - J <sub>2</sub> - I 下
		51	7	$4.68 \times 5.41 \times 1.03$	23	珠 質 頁 岩	A - J <sub>2</sub> - I 上
	無柄	52	8	$7.82 \times 2.80 \times 1.22$	30	◆	A - J <sub>2</sub> - II
		53	9	$2.80 \times 3.82 \times 0.7$	8	◆	A - J <sub>1</sub> - III
		54	10	$4.8 \times 6.3 \times 1.1$	32	◆	A - J <sub>2</sub> - III
		55	11	$5.1 \times 6.08 \times 1.23$	38	◆	A - J <sub>1</sub> - III 下
		56	12	$6.1 \times 3.85 \times 1.05$	20	◆	A - J <sub>1</sub> - III
		57	13	$6.64 \times 4.35 \times 1.21$	32	◆	A - J <sub>1</sub> - II 上
		58	14	$5.38 \times 3.42 \times 1.4$	30	◆	A - J <sub>2</sub> - II
	有柄	59	15	$6.0 \times 3.78 \times 1.05$	23	◆	A - J <sub>1</sub> - III
		60	16	$5.22 \times 4.8 \times 1.53$	28	玄 武 岩	A - J <sub>2</sub> - I
		61	17	$6.0 \times 6.34 \times 1.15$	50	珠 質 頁 岩	A - J <sub>1</sub> - III
		62	18	$7.72 \times 4.47 \times 1.86$	60	◆	A - F <sub>5</sub> - III

削器 scraper	無柄 有柄 無柄 有柄	S · P · L <sub>3</sub>	63	19	7.66 × 4.82 × 6.12	50	珪質頁岩	A - J <sub>1</sub> - III
			64	20	4.15 × 6.1 × 1.0	25	*	A - J <sub>1</sub> - III
			65	21	7.99 × 3.49 × 0.89	30	*	A - J <sub>1</sub> - III
			66	22	8.4 × 4.48 × 1.84	65	*	A i - I 下
			67	23	10.63 × 5.88 × 1.62	126	*	C - C <sub>2</sub> - I
			68	24	4.98 × 3.13	20	*	A - J <sub>1</sub> - III
刮器 scraper	無柄 有柄 無柄	S · P · L <sub>2</sub>	69	25	4.72 × 4.84 × 1.10	21	*	A - J <sub>1</sub> - III
			70	26	<sup>Flake</sup> 6.05 × 2.36 × 0.82	10	*	A - J <sub>2</sub> - III 下
			71	27	4.05 × 5.12 × 1.22	25	*	A - J <sub>2</sub> - II
			72	28	4.0 × 7.88 × 1.20	21	*	C - C <sub>2</sub> - I
			73	29	3.11 × 5.83 × 0.53	10	黑曜石	A - E <sub>5</sub> - II
	有柄 無柄	(S · P · L <sub>3</sub> )	74	30	3.25 × 5.50 × 0.98	18	珪質頁岩	A - F <sub>5</sub> - I
			75	31	4.65 × 6.25 × 0.88	30	*	C - C <sub>3</sub> - I 下
			76	32	7.4 × 3.67 × 0.97	30	*	C - C <sub>2</sub> - I
			77	33	6.28 × 3.0 × 1.32	20	*	A - F <sub>5</sub> - I
			120	34	<sup>Flake</sup> 5.68 × 3.00 × 0.88	20	*	A - J <sub>1</sub> - 3
搔器 End scraper	Flake 活用	S · P · L <sub>3</sub>	121	35	4.76 × 2.43 × 1.0	18	*	A - J <sub>1</sub> - 3
			99	1	6.0 × 2.8 × 1.55	23	*	A - J <sub>1</sub> - I
			100	2	<sup>Flake</sup> 6.1 × 4.2 × 1.18	20	*	A - J <sub>1</sub> - I 中
			101	3	5.36 × 2.85 × 0.94	15	*	A - J <sub>1</sub> - III
			102	4	<sup>Flake</sup> 4.52 × 2.52 × 1.16	12	*	A - F <sub>5</sub> - I
			103	5	3.75 × 2.19 × 1.26	10	*	A - J <sub>1</sub> - I 小
			104	6	<sup>Flake</sup> 3.50 × 4.15 × 1.84	30	*	C - C <sub>2</sub> - I
			105	7	5.15 × 2.3 × 1.0	10	*	A - E <sub>5</sub> - I 下
			106	8	6.05 × 2.06 × 1.17	20	めのう	A - J <sub>4</sub> - II
			107	9	5.66 × 2.80 × 1.22	20	珪質頁岩	C - C <sub>2</sub> - I
			108	10	<sup>Flake</sup> 5.38 × 2.86 × 0.5	12	*	C - D <sub>4</sub> - I
			109	11	4.7 × 2.23 × 1.18	20	*	A - J <sub>3</sub> - III
			110	12	<sup>Flake</sup> 3.5 × 3.4 × 1.86	20	*	A - J <sub>1</sub> - III
			111	13	<sup>Flake</sup> 4.52 × 2.78 × 1.78	23	*	A N <sub>1</sub> - I
			112	14	4.04 × 3.03 × 0.98	12	*	C - X <sub>1</sub> 拾(井戸内)
			113	15	7.80 × 3.82 × 1.32	60	*	A - J <sub>2</sub> - I
			114	16	14.0 × 4.0 × 2.72	120	*	A - F <sub>5</sub> - II

			115	17	$4.92 \times 3.22 \times 1.13$	30	珪質頁岩	A - J 1 - I
			116	18	$5.36 \times 4.26 \times 2.36$	50	*	A - J 2 - II
			117	19	$6.34 \times 2.95 \times 1.07$	13	*	C - CX 1 - I
			118	20	$4.98 \times 2.91 \times 1.02$	10	*	A - J 1 - I
			119	21	$3.8 \times 1.79 \times 0.48$	2	*	AN 1 - I
			78	22	$8.57 \times 3.98 \times 1.86$	72	*	C - C 2 - I
			79	23	$3.48 \times 4.11 \times 2.0$	40	*	A - J 1 - II
			80	1	<sup>Flake</sup> $8.14 \times 1.0 \times 3.18$	25	*	AN - I
			81	2	$5.49 \times 1.32 \times 1.05$	10	*	A - J 2 - III
			82	3	$2.96 \times 1.18 \times 1.09$	10	石英結晶	A - J 2 - II
			83	4	<sup>Flake</sup> $2.93 \times 1.22 \times 0.68$	8	珪質頁岩	A - J 1 - III
			84	5	<sup>Flake</sup> $5.93 \times 2.99 \times 2.14$	30	*	A - J 1 - III
			85	6	<sup>Flake</sup> $5.69 \times 1.92 \times 0.62$	10	*	A - J 2 - II
			86	7	<sup>Flake</sup> $5.0 \times 2.38 \times 0.96$	14	*	A - J 2 - II
			87	8	$5.68 \times 2.36 \times 0.99$	15	*	A - J 2 - III
			88	9	<sup>Flake</sup> $9.74 \times 3.34 \times 1.25$	20	*	A - J 2 - I
			89	10	<sup>Flake</sup> $6.12 \times 1.80 \times 1.03$	10	*	A - J 2 - I
			90	11	$4.32 \times 1.72 \times 0.55$	8	*	A - J 1 - III
			91	12	<sup>Flake</sup> $4.93 \times 3.02 \times 1.31$	20	*	A - J 1 - III
			92	13	$6.65 \times 3.84 \times 1.12$	20	*	A - J 2 - II
			93	14	<sup>Flake</sup> $5.12 \times 2.16 \times 0.81$	10	*	C - X 1 - 中(井戸内)
			94	15	$8.78 \times 2.16 \times 1.18$	30	*	C - CX 1 - I
			95	16	<sup>Flake</sup> $5.52 \times 3.57 \times 1.10$	20	*	C - C 4 - I
			96	17	<sup>Flake</sup> $5.62 \times 3.44 \times 1.08$	28	*	A - J 2 - II
			97	18	<sup>Flake</sup> $5.0 \times 2.56 \times 1.34$	20	*	C - D 3 - I
			98	19	<sup>Flake</sup> $4.05 \times 1.8 \times 0.92$	10	*	A - E 5 - I
			122	1	$5.85 \times 2.0 \times 1.08$	10	*	A - J 2 - I
			123	2	$3.18 \times 1.1 \times 1.0$	10	*	全上
			124	3	$5.5 \times 1.4 \times 0.68$	10	*	A - J 2 - I
			125	4	$5.4 \times 2.17 \times 0.93$	10	*	A - J 2 - II
			126	5	<sup>Flake</sup> $10.14 \times 3.31 \times 2.21$	50	*	A - J 2 - II
			127	6	<sup>Flake</sup> $8.37 \times 5.15 \times 4.26$	120	*	A - J 1 - II
			128	7	<sup>Flake</sup> $3.8 \times 1.08 \times 0.74$	10	ホルンフェルス	AN 1 - I

岩 隔	S · P · L <sub>3</sub>	129	2	$4.12 \times 2.06 \times 0.65$	10	ひ き 玉	A - J <sub>2</sub> - I 中
		130	3	$9.48 \times 4.24 \times 2.42$	140	玢 岩	A - J <sub>1</sub> - I 下
		131	4	$8.91 \times 5.17 \times 3.08$	260	石 英 斑 岩	A - J <sub>2</sub> - I
		132	5	$6.73 \times 4.18 \times 2.87$	140	玢 岩	A - J <sub>1</sub> - III
	S · P · L <sub>4</sub>	133	6	$19.8 \times 7.94 \times 4.01$	520	珪 質 頁 岩	C - CX <sub>1</sub> - 植(井戸内)
		137					
		134	7	$11.67 \times 4.92 \times 3.70$	298	タ	A - J <sub>1</sub> - II 下(東壁面)
		135	8	$1.10 \times 1.25 \times 1.0$	8	ホルンフェルス	A - J <sub>1</sub> - III
石 冠	磨製	136	9	$5.72 \times 2.66 \times 1.95$	40	玄 武 岩	A - J <sub>2</sub> - III
		138	1	$12.2 \times 11.8 \times 2.16$	240	凝 灰 岩	C - CX <sub>1</sub> - (井戸内)
		139	1	$6.86 \times 9.71 \times 3.08$	280	緑色砂質凝灰岩	C - CX <sub>1</sub> - (井戸内)

刀 子 (破片) 残 欠	P · L <sub>57</sub>	1	$7.8 \times 2.24 \times 1.50$	20	鐵 製 品	C - CX <sub>1</sub> - I 下	
		2	$6.7 \times 3.14 \times 2.23$	20	タ	タ	
		3	$2.86 \times 2.16 \times 1.01$	4	タ	タ	
		4	微細鉄品	計量不能	タ	タ	
		5	タ	タ	タ	タ	
		6	タ	タ	タ	タ	
		7	タ	タ	タ	タ	
		8	タ	タ	タ	タ	
		9	タ	タ	タ	タ	
		10	極小片	タ	タ	タ	
		11	タ	タ	タ	タ	
クボミ石	S · P · L <sub>5</sub>	140	1	$12.98 \times 7.72 \times 3.48$	310	頁 タ 岩	A - J <sub>2</sub> - II
		141	2	$10.82 \times 6.88 \times 3.06$	380	花崗 閃 綠 岩	A - J <sub>1</sub> - III
		142	3	$14.76 \times 5.85 \times 5.04$	460	安 山 岩	A - J <sub>2</sub> - II
		143	4	$8.65 \times 6.7 \times 4.2$	210	凝 灰 岩	A N <sub>1</sub> - I
		144	5	$5.89 \times 6.30 \times 2.82$	80	頁 岩	タ
		145	6	$16.5 \times 17.1 \times 4.5$	1256	安 山 岩	C - C <sub>2</sub> - I 上
軽 石 品	S · P · L <sub>6</sub>	149	1	$12.7 \times 9.42 \times 5.5$	310	輕 石	C - CX <sub>1</sub> - (井戸内)
		148	2	$10.42 \times 4.16 \times 4.76$	145	タ	A - J <sub>2</sub> - III
		147	3	$11.0 \times 5.9 \times 2.10$	50	タ	A - J <sub>1</sub> - II
		146	4	$7.9 \times 4.15 \times 3.22$	30	タ	A - J <sub>1</sub> - III

鉈 状 石 器		S · P · L <sub>8</sub>	188	1	4.50 × 7.28 × 2.01	60	流 紋 岩	A N <sub>1</sub> - I
			189	2	7.92 × 8.46 × 1.31	120	*	D - D <sub>6</sub> - II
円盤状 扁 平 石 器		S · P · L <sub>7</sub>	176	1	5.40 × 5.18 × 1.56	62	*	A - A N <sub>1</sub> - I
			175	2	5.76 × 6.21 × 1.36	60	*	C - C <sub>4</sub> - I F
			174	3	9.02 × 7.17 × 2.37	200	*	A - J <sub>2</sub> - III F
			173	4	4.50 × 4.39 × 2.56	70	*	A - J <sub>2</sub> - II
			172	5	6.32 × 6.04 × 2.26	102	*	*
			171	6	10.78 × 9.0 × 3.02	460	*	A N <sub>1</sub> - I
			170	7	7.63 × 6.14 × 2.03	130	*	A - J <sub>2</sub> - I F
			169	8	7.22 × 6.55 × 2.62	170	*	C - C <sub>2</sub> - I
			168	9	10.86 × 8.92 × 3.48	362	*	C - C <sub>2</sub> - I
方形		S · P · L <sub>6</sub>	150	10	6.72 × 5.98 × 2.05	102	*	C - C <sub>2</sub> - I F
			151	11	6.22 × 6.02 × 2.36	120	*	A - E <sub>5</sub> - I
			152	12	7.66 × 5.8 × 2.50	130	*	A - E <sub>5</sub> - I
			153	13	8.0 × 5.61 × 2.48	110	*	A - E <sub>5</sub> - I
			154	14	5.2 × 5.92 × 2.02	70	*	A - J <sub>2</sub> - II
			155	15	5.92 × 5.58 × 2.35	110	*	A - J <sub>2</sub> - II
			156	16	7.12 × 5.36 × 2.78	120	*	*
			157	17	7.28 × 6.08 × 2.30	20	*	*
			158	18	9.88 × 8.4 × 2.55	210	*	D - D <sub>6</sub> - II
不整 椭円形		S · P · L <sub>7</sub>	159	19	7.8 × 7.83 × 1.98	150	珪 質 頁 岩	C - CX - 中(井戸内)
			160	20	7.5 × 7.36 × 2.88	192	流 紋 岩	C - CX - 中(井戸内)
			161	21	6.65 × 6.75 × 2.01	160	*	*
			162	22	6.9 × 6.65 × 2.31	140	*	A - J <sub>2</sub> - 2
			163	23	6.08 × 5.8 × 3.10	70	*	C - CE <sub>4</sub> - I
			164	24	5.08 × 4.93 × 1.80	60	*	C - CE <sub>4</sub> - I
			165	25	5.63 × 5.6 × 1.42	60	*	C - CE <sub>3</sub> - I
			166	26	7.5 × 4.88 × 1.14	32	*	C - CX - I
			167	27	4.42 × 4.39 × 1.30	40	*	C - C <sub>2</sub> - I
S · P · L <sub>8</sub>		S · P · L <sub>8</sub>	177	28	4.31 × 4.34 × 1.75	40	*	C - C <sub>2</sub> - I
			178	29	4.78 × 4.25 × 1.38	40	*	A - F <sub>5</sub> - III
			179	30	7.3 × 5.99 × 2.28	100	*	C - CX <sub>1</sub> - (井戸内)
			180	31	7.73 × 4.32 × 1.6	60	*	A N <sub>1</sub> - I

			181	32	$3.25 \times 5.62 \times 1.22$	30	流紋岩	C-CX <sub>1</sub> - <sup>(井戸内)</sup>
			182	33	$6.51 \times 5.0 \times 1.74$	40	頁岩	C-CX <sub>1</sub> -I
			183	34	$6.0 \times 5.28 \times 9.6$	30	*	AN <sub>1</sub> -I
			184	35	$6.72 \times 7.2 \times 1.64$	40	*	A-F <sub>5</sub> -III
			185	36	$6.06 \times 5.82 \times 1.3$	58	流紋岩	A-J <sub>2</sub> -2
			186	37	$5.93 \times 6.0 \times 1.72$	90	*	C-CD <sub>3</sub> -III
			187	38	$\frac{3}{2} \times 6.28 \times 1.11$	24	*	A-F <sub>5</sub> -I
石刀	S・P・L <sub>8</sub>		192	1	$14.45 \times 3.62 \times 1.10$	123	ホルンフェルス	A-F <sub>5</sub> -II
			193	2	$\frac{3}{2} \times 2.31 \times 0.78$	10	頁岩	A-J <sub>1</sub> -I
			194	3	$6.77 \times 3.20 \times 0.86$	22	ホルンフェルス	A-J <sub>1</sub> -I
石彈	S・P・L <sub>9</sub>		195	1	$4.86 \times 5.0 \times 4.95$	120	流紋岩	A-F <sub>5</sub> -II
			196	2	$4.97 \times 4.50 \times 4.15$	115	花崗閃綠岩	C-C <sub>2</sub> -I下
			197	3	$7.1 \times 4.0 \times 3.98$	100	流紋岩	C-X <sub>1</sub> -中 <sup>(井戸内)</sup>
			198	4	$5.76 \times 5.92 \times 4.69$	150	凝灰岩	*
			199	5	$5.32 \times 5.68 \times 5.02$	170	*	C-C <sub>2</sub> -I
			200	6	$3.35 \times 3.86 \times 3.89$	38	泥岩	A-J <sub>2</sub> -II
			201	7	$4.8 \times 4.0 \times 3.02$	30	*	
異形石器	S・P・L <sub>8</sub>		190	1	$7.74 \times 8.02 \times 4.14$	370	頁岩	A-E <sub>5</sub> -I
			191	2	$12.56 \times 7.45 \times 1.18$	158	流文岩	A-J <sub>1</sub> -III
台石	S・P・L <sub>12</sub>		270	3	$18.0 \times 12.0 \times 8.32$	2170	安山岩	C-X <sub>1</sub> 柱 <sup>(井戸内)</sup>
タタキ石	S・P・L <sub>9</sub>		203	1	$10.12 \times 6.75 \times 3.9$ <small>×××</small>	395	花崗閃綠岩	A-J <sub>2</sub> -II下
			204	2	$9.6 \times 6.95 \times 2.78$ <small>×××</small>	300	*	A-J <sub>2</sub> -I上
			205	3	$8.59 \times 7.80 \times 5.04$	512	*	A-J <sub>2</sub> -II
			206	4	$14.67 \times 5.96 \times 3.22$ <small>×××</small>	410	*	A-J <sub>1</sub> -II
			208	5	$12.49 \times 5.50 \times 3.13$	350	安山岩	A-J <sub>1</sub> -II
			207	6	$\frac{3}{2} \times 7.62 \times 2.6 \times 3.6$	320	花崗閃綠岩	A-J <sub>2</sub> -II
			209	7	$11.67 \times 7.98 \times 6.19$	922	*	C-X <sub>1</sub> 柱 <sup>(井戸内)</sup>
			210	8	$7.0 \times 7.96 \times 2.53$	40	砂質凝灰岩	A-J <sub>1</sub> -I
三角形石器	S・P・L <sub>10</sub>		211	1	$6.32 \times 6.86 \times 2.69$	95	頁岩	AN <sub>1</sub> -I
			212	2	$5.58 \times 8.71 \times 2.27$	80	*	A-J <sub>1</sub> -I
穿孔のある石器	S・P・L <sub>9</sub>		202	1	$4.92 \times 3.68 \times 2.55$	50	*	A-J <sub>1</sub> -III
磨痕のある扁平石器	S・P・L <sub>10</sub>		213	1	$10.26 \times 6.47 \times 2.12$	240	玄武岩	A-J <sub>1</sub> -I下
			214	2	$9.14 \times 5.18 \times 2.02$	135	安山岩	A-E <sub>5</sub> -I

磨痕のある扁平石器	S・P・L <sub>10</sub>						
		215	3	6.24×4.14×1.32	60	玄武岩	A-J <sub>1</sub> -III
		216	4	7.36×6.18×1.70	118	安山岩	A-J <sub>2</sub> -II
		217	5	7.94×3.38×1.10	50	※	C-CX <sub>1</sub> -I
		218	6	5.90×2.17×1.0	30	玄武岩	C-CX <sub>1</sub> -I
打欠きと磨痕のある扁平石器	S・P・L <sub>10</sub>	219	1	7.9×5.81×1.46	110	流紋岩	C-CX <sub>1</sub> -(井戸内)
		220	2	6.24×5.86×1.49	70	安山岩	A-F <sub>5</sub> -I
		221	3	5.81×5.3×1.56	42	流紋岩	C-C <sub>4</sub> -I
		222	4	8.0×5.75×1.32	110	安山岩	C-C <sub>E</sub> 4-I
		223	5	6.60×6.46×1.36	87	※	C-CX <sub>1</sub> -I
線刻石	☆ P・L <sub>18</sub>	1	3.70×2.08×1.13	10	泥岩	A-J <sub>1</sub> -III	
		2	11.9×7.26×4.0		※	C-X <sub>1</sub> 並(井戸内)	
		181	3	6.1×6.3×2.12	100	※	A-J <sub>2</sub> -III
黒曜石	S・P・L <sub>10</sub>	224	1	4.56×1.92×1.82	20	黒曜石	A-J <sub>2</sub> -II
		225	2	4.46×3.5×1.43	20	※	A-J <sub>1</sub> -III
		226	3	2.38×2.48×0.75	10	※	A-J <sub>1</sub> -III
		227~229	4	小片4ヶ		※	A-J <sub>1</sub> -III
赤鉄鉱原石	S・P・L <sub>10</sub>	230	1		190	赤鉄鉱	C-CX <sub>1</sub> -(井戸内)
		231	2			※	A-J <sub>1</sub> -II
石皿	S・P・L <sub>11</sub>	236	1	10.57×6.1×3.54	280	安山岩	C-X <sub>2</sub> 扯
		237	2	10.36×9.45×2.95	370	凝灰岩	A-J <sub>2</sub> -II
		238	3	8.08×4.62×2.03	90	安山岩	A-J-1
		239	4	10.98×9.68×4.26	462	※	C-CX <sub>1</sub> 並(井戸内)
		232	5	12.2×7.8×5.71	1010	※	C-CX <sub>1</sub> 並(井戸内)
		233	6	12.6×10.98×3.90	508	※	A-N <sub>1</sub> -I
		234	7	8.85×9.5×3.55	310	※	A-J <sub>1</sub> -III
		235	8	3.1×4.92×2.10	30	※	A-J <sub>1</sub> -III
小玉	S・P・L <sub>12</sub>	240	1	串孔あり	2		A-J <sub>1</sub> -1下
		241	2	串孔あり	2		A-J <sub>1</sub> -III
		242	3	串孔なし	1		A-J <sub>2</sub> -I
		269	1		2	頁岩	D-D <sub>7</sub> -II
		268	2		1	流紋岩	A-J <sub>2</sub> -III

綠色石 原石	S · P · L <sub>12</sub>	267	3		10	頁岩	A N <sub>1</sub> - I
		266	4		1	綠色凝灰岩	A - J <sub>2</sub> - I中
		265	5		2	*	*
		261	6		2	*	*
		263	7		10	碧玉	A - J <sub>2</sub> - II
		262	8		2	變朽安山岩	*
		264	9		2	凝灰岩	*
		260	10		10	綠色凝灰岩	A - J <sub>1</sub> - III
		259	11		1	變朽安山岩	A - J <sub>2</sub> - II
		258	12		4	八き玉	A - J <sub>1</sub> - III
		257	13		5	*	*
		256	14		12	*	A - J <sub>2</sub> - I下
		255	15		30	流紋岩	A - J <sub>1</sub> - III
		254	16		1	綠色凝灰岩	*
		253	17		2	*	A - J <sub>2</sub> - III
		252	18		10	頁岩	A - J <sub>1</sub> - III
		250	19		1	綠色凝灰岩	A - J <sub>1</sub> - III
		251	20		1	*	*
		249	21		10	流紋岩	A - J <sub>2</sub> - II
		248	22		40	變朽安山岩	A - F <sub>5</sub> - II
		247	23		20	頁岩	A - F <sub>5</sub> - I
		246	24		10	流紋岩	A - J <sub>2</sub> - I
		245	25		5	頁岩	A - i <sub>1</sub> - II上
		244	26		2	流紋岩	A - J <sub>1</sub> - III
		243	27		1	變朽安山岩	A - J <sub>2</sub> - II

## [V] 出土遺物 (P・LX1-2、AP・ L1~29、P・L1~56、P・L57~60)

### (1) 土器・土製品 (P・Lx1-2、A・P・L1~29、P・L1~56)

出土した土器・土製品は、縦60cm×横28cm×深さ15cmの箱で約50箱の出土である。このうち、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリット出土が約23箱、E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>グリット出土が2箱で、A地区が計25箱の出土である。

また、C地区X<sub>1</sub>グリットより約10箱、AN<sub>1</sub>トレンチより約5箱、C地区C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>、D<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>、E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>が計10箱の出土である。

これらの各地区より出土した土器群のうち、60%が縄文時代晩期、30%が後期、10%が土師器・須恵器である。(但し須恵器は少數)

各発掘区ごとに出土した土器等の傾向を概観すると、つぎのとおりである。

### ☆各発掘区ごとの土器群出土状況

- A地区 | E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub> 縄文晩期の土器群 | J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub> 縄文晩期・後期の土器 } →晩期が主体
- B地区 本年度は発掘せず、後期・晩期の土器群が主体(第二・三次)
- C地区 C<sub>2</sub>、C<sub>3</sub>、D<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>、E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>では、晩期・土師器が主体で少量の後期の土器。  
X<sub>1</sub>では、晩期、土師器の土器群。
- SA<sub>1</sub> | 地区 | SB<sub>1</sub> では、遺物包含層がなく、V層上面に数片の土器散在。
- AN<sub>1</sub>地区 このトレンチは、後期の土器群が主体で晩期の土器が混入する。  
以上のように発掘区のうち、A地区は晩期・B地区は、後期、C地区は、上層に晩期、下層に土師器が出土する。  
また、SA<sub>1</sub>、SB<sub>1</sub>、すなわち台地の東南は土器群の出土はなく、AN<sub>1</sub>、すなわち台地の北東部は縄文時代後期の遺物が多く出土する。
- C地区は、V層上面に土師器を伴う住居址、井戸状遺構があり、I~IV層の上層には縄文晩期の土器群が出土することから、歴史時代において台地が削平され北方に包含層が移動させられたものようである。  
そのことは、本遺跡は堀を備えた館址であることからも理解させられるところである。

本遺跡の各発掘区における出土土器の傾向、および館址であると言う性格を捉えた上で、つぎに出土した土器・土製品について述べる。

(a) 出土土器 (表2、P.Lx<sub>1-2</sub>、A·P.L<sub>1-29</sub>、P.L<sub>1-56</sub>)

出土した土器群は、(表2)に示したとおり第1～第11群土器に分けられる。

- 第1群土器 (円筒下層a式土器) →縄文前期
- 第2群土器 (円筒下層d<sub>1</sub>式土器)
- 第3群土器 (円筒上層b式土器) →縄文中期
- 第4群土器 (十腰内I式土器) →縄文後期
- 第5群土器 (十腰内II式土器)
- 第6群土器 (大洞B·C式土器)
- 第7群土器 (大洞C<sub>1</sub>式土器)
- 第8群土器 (大洞C<sub>2</sub>式土器) →縄文晚期
- 第9群土器 (大洞A式土器)
- 第10群土器 (東北北部の土師器型式→第二型式) →歴史時代
- 第11群土器 (須恵器) →歴史時代

以上、縄文時代前期の土器2型式、中期の土器1型式、後期の土器2前式、晚期の土器4型式、および土師器・須恵器に分けられる。

これらの土器群のうち、前期・中期の土器型式のものは、すべて破片のみで各発掘区に散在して出土したものである。

また、後期の土器群は、AN<sub>1</sub>トレンチを中心に、A地区、B地区(第二・三次)、C地区に混在して出土した。

晩期の土器群は、A地区が中心で、B·C地区に混在して出土した。

これらの出土土器の傾向から当遺跡は、縄文時代においては、後期・晩期が中心であり、歴史時代においては、館址を中心とする遺跡と考えられる。

☆出土した土器については、各発掘区・各層ごとに、(P.Lx<sub>1-2</sub>、A·P.L<sub>1-29</sub>、P.L<sub>1-56</sub>)にサンプリングの上、示してあるので、ここでは省略する。

(b) 土製品 (A.P.L<sub>1</sub>、P.L<sub>37</sub>、49-50-53)

出土した土製品は、A·P.L<sub>1</sub>、に示した土偶(頭部欠損)、P.L<sub>37-456-460-464-468</sub>に示した土偶脚部、およびP.L<sub>37-470</sub>の板状土偶片、P.L<sub>49-679</sub>、P.L<sub>50-685</sub>に

示した土偶脚部、土偶肩部、および、P・L<sub>37-459-463</sub>に示した三角形土製品、さらにP・L<sub>53-726-755</sub>に示した円盤状土製品、P・L<sub>37-467-471</sub>に示した球形土製品である。

すなわち、1) 土偶、2) 三角形土製品、3) 円盤状土製品、4) 球形土製品の四種である。

1) 土偶→S・P・L<sub>1</sub>に示した土偶は、高さ9.70cm。

・最大幅9.35cm、厚さ2.20cmの「大洞C<sub>2</sub>式」期のものである。この形態の土偶は、類例はあるが出土数は少ないものである。

・また、PL<sub>49-679</sub>に示したものは現存高5.70cmのもので朱ぬり痕もあり、多分遮光器土偶のものと思われる。断定は控えるが「大洞C<sub>2</sub>式」のものであろう。

・P・L<sub>50-685</sub>に示したものは、欠損部に貫通する孔があることから土偶肩部と思われる。

この土偶に施文された文様は、沈線による渦文を主体にしたもので、当遺跡では始めての出土であり、類例も少ないものである。

P・L<sub>37-465-460-464-468</sub>は、後期「十腰内I式」のものである。また、P・L<sub>37-470</sub>は、板状土偶かも知れない、「縄文前期」のものかとも考えられる。

2) 三角形土製品 (P・L<sub>37-459-463</sub>)

2ヶの出土である。このうち463には、未貫通の小孔があるもので、多分晩期のものであろう。

3) 円盤状土製品 (P・L<sub>53-726-755</sub>)

30この出土である。このうち、730・731・736は未貫通の孔がある。これらは、縄文中期・後期の土器片を活用したものである。

4) 球形土製品 (P・L<sub>37-467-471</sub>)

大小2この出土である。用途・機能および、どの形式に伴うかは不明である。

以上のように、出土した土器・土製品は、その器形・その他で分類すると、つぎのとおりになる。

- |                          |            |          |
|--------------------------|------------|----------|
| ① 鉢形                     | ② 台付鉢形     | ③ 壺形     |
| ④ 瓢形                     | ⑤ 皿形       | ⑥ 注口     |
| ⑦ 深鉢形                    | ⑧ 台付深鉢形    | ⑨ 台付浅鉢形  |
| ⑩ 土偶                     | ⑪ 三角形土製品   | ⑫ 円板状土製品 |
| ⑬ 球形土製品                  | ⑭ 土師器甕形、壺形 |          |
| ⑮ 須恵器長頸（細口）壺、須恵器甕形、須恵器壺形 |            |          |

以上のように、土器・土製品・その他を分類することができる。

このうち、前・中期は、円筒形深鉢形土器の破片、板状土偶片のみである。また、後期のものは、鉢形・台付鉢形、甕形～深鉢形等の出土である。

これに対して、晩期の土器は、1)～11)にわたる土器組成を持っている。この土器組成から見ても、本遺跡は、縄文晩期を主体とする遺跡であることが考えられる。

また、既述のように、縄文時代前期のものが、2型式、中期が1型式、後期が2型式で、縄文時代の前期・中期には、当遺跡が生活の本拠地とは考えられないが、後期初頭「十腰内Ⅰ式」期には、土壤（第二次）の存在から、生活の本拠地でもあったように思われる。

- ・また、晩期の土器は、4型式にわたっており、特に、大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式土器を使用した時期にこの台地が生活舞台であったものと考えられる。
- ・さらに、第二型式の土師器使用の時代には住居址の存在から人々が居住したこと証明できるところである。

土師器は、甕形、壺形が出土し、須恵器は、長頸（細口）壺、壺形で、ロクロを使用しているものである。

## (2) 石器・石製品 (S・P・L<sub>1~12</sub>、表4)

今回の第四次発掘調査において出土した石器・石製品は、(表4)に示すとおり、緑色原石<sub>27</sub>、赤鉄鉱<sub>2</sub>、黒曜石<sub>4</sub>、鐵器<sub>11</sub>を除くと、総数239ことなる。

この239この石器・石製品を、器種別に整理すると、つぎのように分類かれる。

### (a) 器種

① 石鎌44、18.41%	⑯ 石弾	7
② 削器36、15.06%	⑯ 異形石器	2
③ 搗器23、9.62%	⑯ 台石	1
④ 石槍19、7.95%	⑯ タタキ石	8
⑤ 石錐 6	⑯ 三角形石器	2
⑥ 石斧 9	⑯ 穿孔石	1
⑦ 岩偶 1	⑯ 磨痕のある扁平石器	6
⑧ 石冠 1	⑯ 磨痕と打欠きのある石器	5
⑨ クボミ石 6	⑯ 線刻石	3
⑩ 軽石製石冠 4	⑯ 石皿	8
⑪ 鈎状石器 2	⑯ 石核	1
⑫ 円盤状扁平石器38、15.90%	⑯ 小玉	3
⑬ 石刀 3		

以上のように分類されるのである。このうち、出土数の多いものの%を調べると、上に示すとおりである。

すなわち、石器類の器種は、25器種に分けられる。このうち、台石、石核、穿孔石、線刻石、小玉、岩偶、石冠等を除くと、生産・調理用具は、21器種となる。

・そのうち、①~④、⑫、のものが多く、その合計が160ことなり、全体の66.95%となる。

すなわち、生産・調理用具としての石器の占める割合いが高いことを示している。・また、台石としたものは、歴史時代のものであり、石核は、石器を作成するため剥離した残りであろう。小玉には穿孔があり、石冠とともに装身具の類と考えられる。これらのものは、縄文晩期のものである。

・また、岩偶は、凝灰石製のもので、祖形的な形態を示しており、高さ12cm、最大

幅11.8cm、厚さ2.16cmのもので前期のものとみられる。(S・P・L<sub>4-138</sub>)

• さらに、線刻石(3ヶのうち)P・L<sub>18-181</sub>に示したものは、泥岩の自然石に線刻したもので、長径8.37cm、短径6.42cm、厚さ2.22cmを計った。このものは中央にクボミを有する。この線刻石は「大洞C<sub>2</sub>式」朱ぬり皿形土器と伴出した。

• S・P・L<sub>4-137</sub>に述べた「打製石斧」は、X<sub>1</sub>グリット内で検出した井戸内の原黒土層より出土したものである。このものの計測値は、長径19.8cm、最大幅7.94cm、厚さ4.01cmを計った。

この打製石斧は、縄文前期のものであろう。出土した石器・石製品は縄文時代晩期のものが多く、前期のもののが少ないと見られるが、晩期・後期の土器が混在して出土するため、その区別がむずかしいので一括してS・P・L<sub>1-12</sub>に掲げたものである。つぎに石器の岩質について述べる。

#### (b) 石器の岩質(表4)

S・P・L<sub>1-12</sub>に示した石器・石製品の岩質を分類すると、つぎの18岩質に分けられる。

① 珪質頁岩	124	51.88%	⑩ 石英斑岩	1
② 頁岩	10	4.14%	⑪ 凝灰岩	5
③ めのう	3		⑫ 緑色砂質凝灰岩	1
④ 黒曜岩	4		⑬ 砂質凝灰岩	1
⑤ 石英結晶	1		⑭ 花崗閃綠岩	8 3.3%
⑥ 玄武岩	6	2.51%	⑮ 安山岩	17 7.11%
⑦ ホルンフェルス	7	2.93%	⑯ 流紋岩	41 17.15%
⑧ 碧玉	1		⑰ 泥岩	4
⑨ 珍岩			⑲ 軽石	3

計239の石器のうち、多く原材として使用されているものの%を計算すると、上に示したようになる。

すなわち、珪質頁岩が過半数を占めており、つぎが、流紋岩の17.15%である。縄文人は、岩石の性質によって、その目的に応じた原材を選んだものようである。

特に当遺跡付近で常時入手できる珪質頁岩の活用が多く、この岩質は、生産用具

としての活用に適しているものであろう。

なお、石器・石製品についての計測値、および出土区、層位等については、(表4)を参照されたい。

### (3) 鉄器 (P・L<sub>57</sub>、第8図)

鉄器片の出土は、全部で11片の出土であるが、このうち9片をP・L<sub>57</sub>に示してある。(2片は、微小のため掲示せず)

これらの鉄器片は、C地区X<sub>1</sub>グリットの北壁下のIa層、すなわち、原黒土層下位で出土したものである。

このX<sub>1</sub>グリットは、既述したように、3号住居址があり、この住居址の壁面上の黒土層出土であるから、この三号住居址に関係するものかも知れない。

出土した11片の鉄片は、同一の鉄器のものである。P・L<sub>57</sub>に示した1a・1b、2a・2b、3~9の破片を観察すると、1a・1bは刀子の中央部、2a・2bは、刀子のツカ部分と観察されるものである。

本遺跡では、鉄器の出土は、今回が最初で、全体が腐植しており、形状、年代等は今後の研究に待ちたいと考える。

### (4) 骨類 (P・L<sub>58~60</sub>、表3)

出土した骨片類は、次のグリットの各層から出土した。

A地区J<sub>1</sub> - II層出土のもの → M.1・M.2

A地区J<sub>2</sub> - II層下位出土のもの → M.3

A地区J<sub>2</sub> - III層出土のもの → M.4

A地区J<sub>1</sub> - III層出土のもの → M.5

A地区J<sub>2</sub> - II層出土のもの → M.6

A地区J<sub>2</sub> - III層出土のもの → M.7

以上のグリット、および層から出土したのであるが、これらの骨片は、J<sub>1</sub>南端、J<sub>2</sub>北端の東壁よりにレンズ状に堆積した粘土層内、(II層)および、その下層のIII層上面より出土したもので、このII層は、二次堆積と見られるものである。

これらの骨類を、早稲田大学金子浩昌氏に鑑定を依頼し、御回答をいただいたの

が（表3）である。

（表3）にあるように出土した骨類は、つぎのとおりである。

M.1 → シカの中手骨

M.2 → ①鳥骨片、中形獣骨片、②鹿角

M.3 → シカ、イノシシなどの大形獣

M.4 → シカ、イノシシの小骨片（M.5）と同じものかとも思われる。

M.5 → 焼けた小骨片、大形獣の小骨片、中形（イヌ、タヌキ、キツネなど）の獣のものと思われる。

M.6 → 同定不能の小骨片、おそらくシカ、イノシシの指骨

以上のような鑑定結果である。御多忙中、御手数を煩らわせまして感謝申し上げる次第である。

当観音林遺跡では、第二～三次発掘調査においても、骨類の出土がある。

すなわち、シカ、イノシシ、アシカ、イルカ、鳥骨等であるが、焼けたものが多いように見られる。

第四次調査（今回の）においても、ほぼ同様の結果であるが、イヌ、タヌキ、キツネ等の獣骨は今回が最初である。

今までの結果から、当遺跡の縄文人が何を狩猟し、食料としていたか、また、当時の生物の一端を知る手がかりになるよう思うところである。

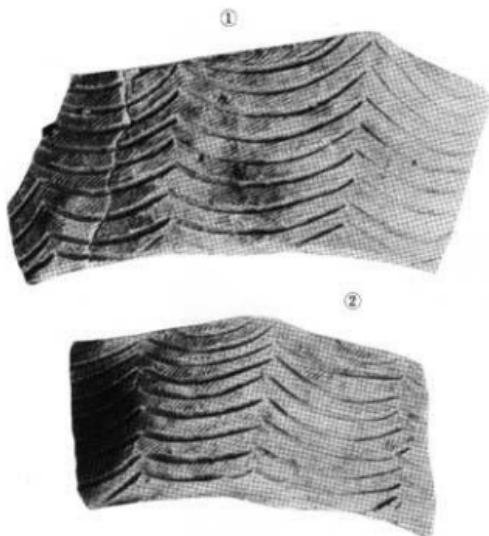
なお、これらの骨類は、「大洞C<sub>2</sub>～A式」土器に伴うものである。

第二次調査では、B地区において、「十腰内I式」土器に伴って骨類が出土した。

すなわち、後期初頭「十腰内I式」期より、晚期「大洞C<sub>2</sub>～A式」に至る永い間にわたって、ほぼ同様の獣類・鳥類が生息していたことも興味深いところである。

I [十腰内 I式終末期の土器] その 1  
〔A J<sub>1</sub>—II出土、土器〕

P・LX-1

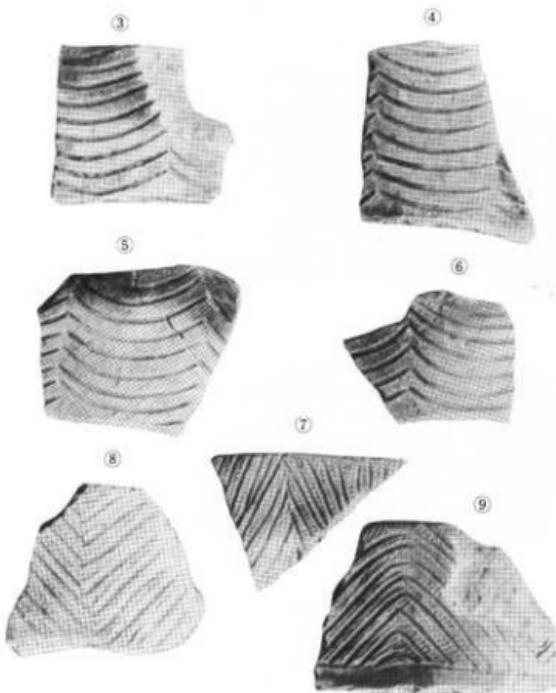


☆ここに掲げた  
1・2は、本文  
で再度述べ  
る。

[變形土器]—1・2

☆ここに掲げたものは、A地区J<sub>1</sub>グリットII層出土の「十腰内I式」終末期の土器である。

- ・このものは、1・2とも同一個体のもので、P・LX-2に示した3・4・5・6もこの土器の口頸部破片である。口縁は、低い山形突起を持つ波状口縁をなす。また、その口唇部には(L・R)縄文が施される。
- ・器形は、全体器形は不明であるが、口頸部は外反するが口端は内傾気味のものである。(以下次頁へつづく)



☆ここに掲げた  
ものも本文で  
再び述べる。

[斐形土器] - 3 · 4 · 5 · 6 ~ 7 · 8 · 9

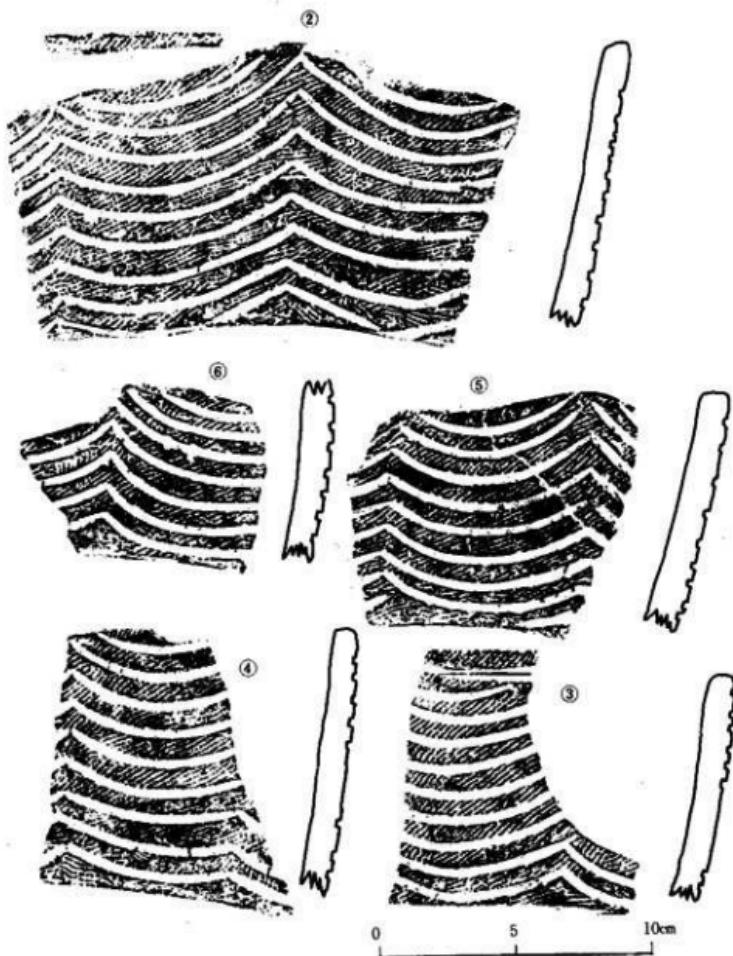
- 口頸部には「連続弧状文」が縄文（L・R）の地文の上に重層的に施文されるものである。

☆また、7としたものも別個のもので、このものも、口唇部に（L・R）縄文が施文され、口頸部が外反するものであるが、直線的に外反する。

この頸部には、「連續山形文」が地文である縄文（L・R）の上に施文されるものである。

☆さらに、8・9は、同一個体のもので、口唇部・口頸部に（R・L）縄文を地文に「連續山形文」が重層して施文され、口頸部は、強く外反するものである。

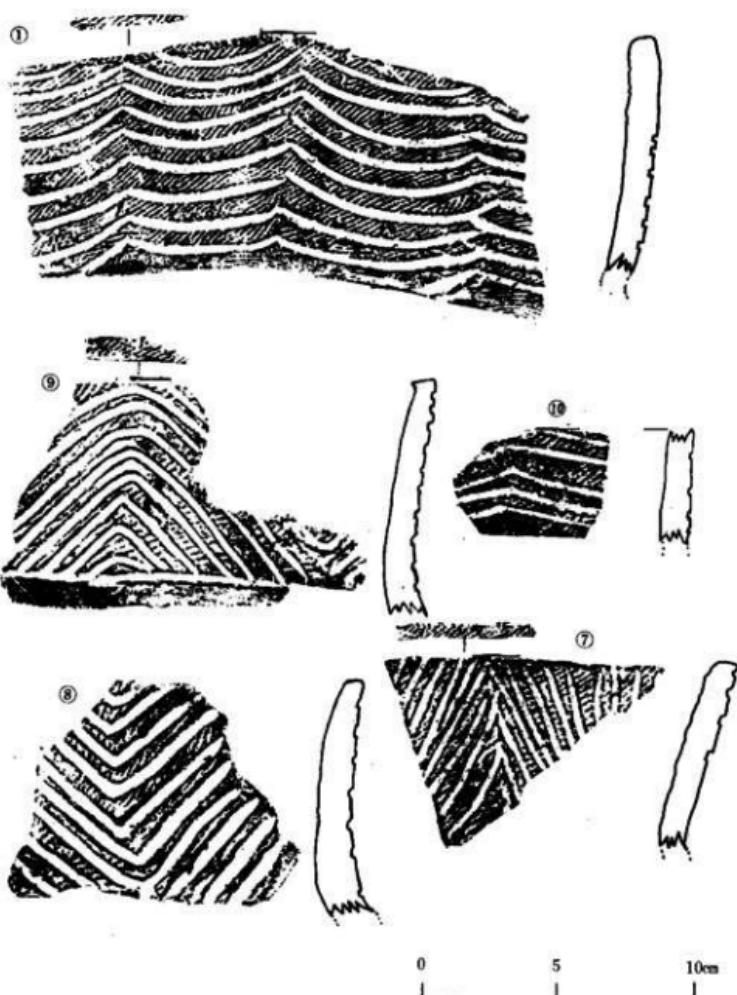
[拓影] その 1、 「十腰内 I 式」終末期の土器  
(☆P・LX-1・2と番号は同じである。)



[拓影] その2、「十腰内I式」終末期の土器

(☆P・LX-1・2と番号は同じである。)

☆⑩は、写真なし



## 〔VI〕 考察

本遺跡は、〔Ⅲ〕地形・層序の項で述べたとおり、前田野目台地のⅡ面、すなわち、標高30～40mの面上にある。

当五所川原市の東部、梵珠山脈の西麓に展開する前田野目台地のⅡ面にある松野木地区には、縄文時代の前期・中期・後期・晚期、および歴史時代にわたる各期の遺跡が分布しており、それぞれの時代において人間生活を営むのに好条件を備えた地域であったものと考えられるところである。

本遺跡をのせる舌状台地も、そのことを物語るように、歴史時代の伝承をも残しており、現地形を表面上から観察する限りにおいても地形が階段状を呈する部分もあり、また、空堀状遺構（堀）もあって館址の様相を示している。

この舌状台地に、第三次発掘調査につづいて、A地区・C地区・D地区・中央区の四地区を設定し、本遺跡の予備調査の最終調査とし、本調査への手がかりとしたのである。

第一次調査より第三次発掘調査にわたって、解明されなければならない問題点や発掘結果についての知識は蓄積されつつあり、それらについては、各報告書に述べてきたとおりであるが、今回の第四次調査においても若干の問題意識や、新知見を得ることができた。

以下、第四次発掘調査の結果について、若干の考察を加えてみる。

### （I） 地形・地質・層序（第3図-2-①②③）

◎A地区、このA区は、館址と伝承される

階段状地形の平面部・南斜面部にあたる地点で、歴史時代の擾乱の影響は少なく、台地上部の削平・整地による黒土の二次堆積がやや厚い程度で第Ⅱ層以下は、縄文時代における後期・晚期・および前期・中期における擾乱が見られ、研究面としては極めて価値の高い地層を示している。

この地区的層序は、第3図-2、第5図-1-2に示したとおりであるが、第Ⅰ～Ⅴ層にわたって縄文時代晚期～後期の遺物が多量に出土したが、前・中期の土器片、須恵器片の混入も少數出土した。

未確認ながら、セクションには、前期の遺構も所在するものと考えられる。

すなわち、A地区における層序の検討からすれば、晚期の土器が中心となる第Ⅱ

・Ⅲ・Ⅳ層に、後期の土器が第Ⅰ・Ⅱ層に混入する状態であり、台地上部の削平、および晚期の擾乱の影響があったものと考えられるところである。(第5図-1-2)

◎C地区、この地区では、第3図-2に示す層序が基本である。また、第6図-5-6に示したセクションのとおり、この地区においても第Ⅰ層が特に厚い。しかも北方に進むにしたがって厚さを増している。

このことは、A地区で述べたとおり、台地中央部の削平・整地の際、第Ⅰ層を北方に移動させたとも考えられるが、第12図の「堀状遺構断面図」—D<sub>6</sub>・D<sub>2</sub>・D<sub>5</sub>・D<sub>3</sub>にみられるように、B地区(本年度は発掘せず)、C地区においては、基盤が南から北へ約6°～8°傾斜し、北側ほど低くなっているため黒土の堆積は北側の低いところ程厚くなつたと考えるべきであろう。

◎D地区、この地区は既述したとおり、堀状遺構を解明する意図で第二～四次発掘調査にわたって継続して調査をすすめてきた地区である。

第3図-2-②に「堀状遺構基本層序図」を掲げたが、堀内より掘り上げた盛土は、意図的に西・南側に高く盛土している。

今回発掘してD<sub>6</sub>・D<sub>7</sub>トレンチの調査結果からは、第9・10図でわかるように、堀の形態は、箱形掘りであることが明らかになった。

第二次調査ではD<sub>1</sub>トレンチにおいては、第12図に示すように、そのセクションから若干の形態の差異が認められたが、D<sub>2</sub>～D<sub>7</sub>においてはそれが認められず、本遺跡の堀は、既述のとおり、「箱形掘り」であると断定した。

この点について諸先学の御指導をいただきたいと考えるところである。

・D地区の地質は、第二次調査で作成したA地区の基本層序(第3図-2-③)と基本的には同じである。D地区堀状遺構の基本層序は、(第3図-2-②)に示した。これによれば、基盤をなす段丘構成層、基盤を掘り込んで上げた盛土層、遺構を埋めた堆積層の三層からなる。

段丘構成層は、下から細砂・粘土・砂礫・ロームと重なり、これらの上に遺構掘削前の原黒土が被覆する。遺構は、この基盤であるローム以深の各層を掘り込んでいる。

・盛土層は、土壌形成後、自然崩壊・流出により、遺構を埋積した層で最低所に薄く堆積している黒色腐植土層・粘土層があり、それらの上に土壌から流出したロー

ム・粘土・黒土の混合層である黒褐色土層が厚く埋積する。

最上部は、現在の黒色土で全体を薄く覆う。

なお、基盤の傾斜は、D<sub>6</sub>・D<sub>2</sub>・D<sub>5</sub>の断面が示すように南から北へ約6°～8°でゆるく傾斜している。

## (II) 遺構 (第8・9・10・11・12・13図)

出土した各遺構の個々については、[IV]において述べたので省略するが、ここでは、総合的に考察してみる。

### (1) 3号住居址と井戸状遺構、および堀状遺構について

[IV]-(a)・(c)・(d)において述べたように、南向きのカマドを備えた3号住居址は、その壁面の一部を残して、東西にのびる堀によって切られている。したがって、3号住居址より堀の年代は新しいことになる。

また、この3号住居址のカマドの直下に、円形プランの「井戸」が存在した。

VIの(I)で述べたとおり、堀は、当遺跡の基盤をなす段丘構成層のうち、(第VI-1層)より掘り込んでおり、3号住居址のカマドは、同層の上面に乗っている。したがって、堀の構築は、層位的にも3号住居址より新しいものと考えられる。

また、井戸は、カマドの直下にあって、(第VI-1層)を約2.1m程掘り込んで構築されていることは前に述べたとおりである。

したがって、これらの遺構の新・旧を求めるに、堀が最も新しく、3号住居址は、それより古く、さらに、井戸は最も古いものと考えられる。

3号住居址からは、土師器片の出土はあるが、これらの土師器は、「東北北部の土師器型式」第二型式のものである。しかし、その出土状況から住居址そのものの年代を決定する資料にはならない。

また、井戸内の底面上にも落込んだと考えられる壺形土師器の出土はあったが、この土師器も第二型式のものである。

この第二型式の土師器を、9世紀以降のものと考えれば、井戸・堀・3号住居址とも、さきに述べた、新・旧の差はあるとしても、9世紀以降～鎌倉期初頭の年代で考えることが可能とも思われるところである。

なお、堀の盛土内からは須恵器片の出土があり、それ故、鎌倉期初頭という下限を想定した。

## (2) 井戸について

この遺構についても〔VI〕-(d)で述べたので省略するが、さきにふれたように、滯水層が薄く、優秀な井戸とは言い難いようである。

したがって、別個の井戸が他に存在する可能性を否定できないと考えるところである。

また、この井戸は、単に日常生活上の用途に供するものか、防衛用としての戦時に使用するものは、堀とともに一考を要する問題であろう。

## (3) 住居址について

本遺構の第三次発掘調査において、1号住居址を検出している。この住居址は、南向きのカマドを有し、4m×4.5mの方形竪穴住居址である。

今回の第四次発掘では、3号住居址を検出したが、既述のように堀によって東西に切られており、その規模は不明であるが、カマドは南向きのものである。

(第8図-⑩)

・2号住居址は、これも既述したとおり、C地区、C<sub>3</sub>・D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>・E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>地区で検出したものである。

この2号住居址は、四周の壁面と、壁面下の溝を追求したのみで、住居址の中央部は未発掘である。プランは、長方形か方形で、約4.5m×4.6m程度のものである。

今回の調査では、カマドは検出されず、焼土の堆積地点のみは確認できた。

現時点では、I号・II号住居址とも、きわめて小規模な住居址と思われる。

## (4) その他の遺構については、未完掘のものであるので省略する。

また、堀については、(I)で詳細に述べたので、ここでは割合したい。

## (III) 土器・土製品 (表2・A・P・L<sub>1~29</sub>・P・L<sub>1~56</sub>)

当遺跡における土器・土製品の出土状況について再度最初に概観してみると、つぎのとおりである。

・A地区J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>→「十腰内I式」「十腰内II式」「大洞C<sub>1</sub>式」「大洞C<sub>2</sub>式」「大洞A式」の各型式の土器、および須恵器、土師器が出土した。また、A地区E<sub>5</sub>・F<sub>5</sub>トレンチにおいては、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>と同様の型式、それに加えて、「大洞B・C式」土器か1片

出土した。(P・L<sub>31-358</sub>)、また、iグリットにおいても「大洞C<sub>2</sub>、A式」土器が出土した。さらに、J<sub>2</sub>-IIより「十腰内Ⅱ式」土器が2片(P・L<sub>51-687</sub>、P・L<sub>23-244</sub>)および、須恵器(P・L<sub>52-712</sub>)が出土している。

すなわち、A地区では、「十腰内Ⅰ式」「同Ⅱ式」および「大洞B・C、C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>、A式」の各型式土器、須恵器片(P・L<sub>52-709</sub>)の出土である。

このうち、「大洞B・C式」「十腰内Ⅱ式」土器は、各1~2片のみである。また、前期、中期の土器片も小破片で出土した。(P・L<sub>54</sub>参照)

- AN<sub>1</sub>地区では、「十腰内Ⅰ式」「大洞C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>式」および、土師器(第二型式)、須恵器(P・L<sub>51-695</sub>)が出土した。
- C地区→X<sub>1</sub>グリットでは、「十腰内Ⅰ式」「大洞C<sub>2</sub>・A式」土器、および土師器(P・L<sub>51-696</sub>、P・L<sub>52-724</sub>、725)が出土した。
- また、C地区C<sub>2</sub>、C<sub>3</sub>、D<sub>3</sub>、D<sub>4</sub>、E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>地区では、「十腰内Ⅰ式」「大洞C<sub>2</sub>・A式」土器、および土師器(第二型式)が出土した。
- T・P<sub>1</sub>、T・P<sub>2</sub>、T・P<sub>3</sub>においては、土師器(P・L<sub>52-714</sub>、717)が出土した。
- C地区X<sub>1</sub>グリットの井戸状遺構内の出土土器は、土師器の他に「十腰内Ⅰ式」「大洞C<sub>2</sub>・A式」土器が出土している。
- また、堀状遺構のD地区よりは、「十腰内Ⅰ式」「同Ⅱ式」(→P・L<sub>51-686</sub>)「大洞C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、A式」土器、および須恵器(P・L<sub>52-713</sub>)が出土している。
- その他、各発掘区より、P・L<sub>45</sub>~P・L<sub>54</sub>に示した土器、土製品が出土した。  
これらの出土土器、土製品を資料にして若干の問題点を考えてみたい。

#### (1) 土器型式について

○当地方(津軽半島西部)においては、縄文時代後期初頭「十腰内Ⅰ式」土器を出土する遺跡が多い、しかし「十腰内Ⅱ式」に比定される土器群が多量に出土する遺跡は現時点では知られているものは極めて少ない状態である。

当遺跡においても第2次、第3次発掘調査において、二タイプの土器が数片ずつ出土するのみである。

この二タイプの「十腰内Ⅱ式」土器とは、一つは、「青森県考古学」所載の次郎左衛門長根遺跡出土（1984・鈴木・三浦）のものと同一タイプ、いま一つは、P・L<sub>51</sub>-686、687、P・L<sub>56-823</sub>に示すタイプである。

今回の発掘においては、前者のタイプは出土せず、後者のタイプの他に、「十腰内Ⅰ式」終末期のものP・LX<sub>-1</sub>、-2（拓影1・2）、さらにA・P・L<sub>4-8</sub>、P・L<sub>17-180</sub>-1・2（P・L<sub>19-☆</sub>）のタイプの土器が出土した。

すなわち、縄文時代後期の土器群では、「十腰内Ⅰ式」および、その終末期の土器、「十腰内Ⅱ式」では、二タイプの少数土器、「十腰内Ⅴ式」土器1片（第二次）が出土している。

◎晩期の土器群では、[表2]に示したとおり、土器型式では、「大洞B・C式」か1片のみで「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式」土器が多く出土しており、特に「大洞C<sub>2</sub>式」土器群が主体である。

・この晩期の土器のうち、A・P・L<sub>27-28</sub>に掲げた壺、鉢形土器について若干述べてみたいと思う。

A・P・L<sub>27-28</sub>に述べてあるとおり、壺形土器では、器形が「大洞C<sub>2</sub>式」の典型的な形状を有しながら、肩部下の施文を見ると、縄文を地文に、「大洞C<sub>2</sub>式」の主文様と、「大洞A式」の主文様を合わせもつというものである。

また、鉢形土器でも同様である。これらの土器は、両型式の基本文様を有するタイプである。「大洞C<sub>2</sub>式」とされる土器型式は、その視点が異なるとしても、新・旧に分けられると言うのが定説であろうと考える。

筆者は、器形（壺形は頸部の直立、鉢形は頸部が無文帶で、底面径と口縁径の差が大きいもの）と既述の文様要素を有するタイプのものを、「大洞C<sub>2</sub>式」の新しいものとして、「大洞C<sub>2</sub>-A式」→（仮称）として型式分類したいと考えている。

◎つぎに、既述した「十腰内Ⅰ式」終末期の土器として位置づけたP・LX<sub>1-2</sub>・拓影1・2の土器について述べる。

この土器については、P・LX<sub>1-2</sub>において述べたとおりであるが、当観音林遺跡では今回はじめて出土したものである。（器台も出土）

類例を求めるとき、県内では、尾上町の「李平Ⅱ遺跡」→（報告書第28図-7）、および、青森市「四ツ石遺跡」からも出土があると云う（葛西 勉氏の教示による）。

また、北海道松前町の「白坂遺跡」においても出土例がある。(1983・山岸英夫・松前町教育委員会)

すなわち、「白坂遺跡」出土のものは、「大津式（十腰内I式併行）から発展したものとされ、手稻式（十腰内II式併行）との間を埋める資料とされるところである。

以上の類例から、「十腰内I式」終末期の土器とした。

これらの「李平II」「白坂」遺跡の出土土器を検討すると、第二～四次発掘で出土した「十腰内I式」土器の中には、口唇部に縄文のあるもの（A・P・L 4-8）、方形区画文のあるもの、口頸部が無文帶で幅の広いもの、その他、「十腰内I式」としたものの中には、新しいグループの土器が所在する。この「十腰内I式」土器の新・旧の分類については、つぎの機会にゆずりたい。

#### ◎土師器・須恵器について

後期の土器（十腰内I式・同II式）、晩期の土器（大洞B・C・C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式）の他に、土師器・須恵器が出土した。

土師器は、すべて「東北北部の土師器型式」第二型式のもので、壺形・壺形土器である。

壺形のものは、底面に砂粒のあるもの（例→P・L 42-566）もあり、壺形土師器は、底面に糸切り痕を認める。

また、須恵器は破片のみの出土で器形等は不明なるも、長頸（細口）壺・壺形と思われる。

◎その他、前期→円筒下層式土器（P・L 54-767～775）および、中期→円筒上層式土器（P・L 54-766～788）が小破片で出土している。

#### (2) 出土土器の総括

これらの出土土器は、第I～IV層に混在して出土した。このことから、歴史時代またはそれ以前に擾乱があったものと認められる。

観音林遺跡の所在する舌状台地は、館址と思われる地形であり、堀も所在する。この台地の上部は削平されたものと観察されるところであり、包含層は、北部に移動した可能性が強いように観察される。そのことが土器群の混在する原因のように考えられるところである。

#### (IV) 石器・石製品 (表4・S・P・L<sub>1-12</sub>)

第四次発掘調査において出土した石器・石製品は、[V]-(2)において述べたとおり、総数239点の出土である。

これらの石器・石製品の計測値・出土区、出土層位については、(表4)に述べてあるので参照されたい。

出土した土器・土製品は、既述したように、後期「十腰内I・II式」土器群および晚期「大洞B・C～A式」の各型式の土器群であって、これらの後期・晚期の土器は、第I～第IV層に混在して出土した。

これらの土器に併出して出土した石器・石製品は、層位的には後期・晚期の区別は、正確を期し難いのである。

出土状況、併出土器との観察からは晚期のものが多いように考えている。以上のことから、石器・石製品を一括して取扱っていることを了解されたい。

このような状況を考えた上で若干の問題点を考えてみたい。

◎石器の器種について、器種については、[V]-(2)-(a)で述べたとおり、石器、石製品を含めて、25器種に分けられる。

これらの品種のうち、総出土数239に対する石鎌の占める割合は、18.41%、削器(side-scraper) 15.06%、円盤状扁平石器15.90%、搔器(end-scraper)9.62%、石槍7.95%の順に多い。

すなわち、石鎌・石槍等狩猟用具が約26%、削器・搔器等調理用具が約24%を占めている。縄文人の生活は、この一例から考えても狩が生活の中心であったものと考察される。

また、15.9%を占める円盤状扁平石器は、当遺跡では、極めて多量に出土する点に注意したいと考える。(第三次では21%)

なお、発掘所見では、後期に多く、晚期のものの出土は少ないように観察される。

◎つぎに問題にしたいのは、石器・石製品の岩質についてである。

今回の発掘で出土した石器・石製品の岩質を分類すると(b)に示したとおり、軽石を含めて、18種に分類される。

すなわち、珪質頁岩51.88%、流紋岩17%が最も多く、当時の人々は、岩質の特性によって、その目的・機能に応じた用器を製作したものと推察されるところである。

◎出土した石器・石製品のうち、注目すべきものについて、つぎに述べる。

・線刻石 (P・L 18-181)

このものは、泥岩の自然石を利用したもので、表面と裏面に線刻があるものである。

この線刻の意味・機能等は不明なるも出土例が少ないものである。なお、このものは、朱ぬりの皿形土器（大洞C<sub>2</sub>式）を伴って出土したものである。

・軽石製品 (S・P・L 6-146-148)

当遺跡では、第一次発掘調査以来、軽石製品の出土が少數ながら出土している。

出土品のうち、明らかにウキと思われるものもあり、石冠状のものもある。今回の第四次出土のものは、底面が平面に整形されたもの、および、平行に溝の掘られたもの (S・P・L 6-146-148) も出土した。一応軽石製石冠とした疑問が残る。

しかしながら、漁に使われたと考えられるウキの存在から当遺跡を営んだ人々は、近く河川で網を使って漁をした可能性も考えられるが現在までのところ魚骨の出土は無い。

◎小玉・緑色原石等について (S・P・L 12-240-242, 243-269)

当遺跡においては、緑色の原石が第一～四次発掘において多数出土している。

これらの原石を材料に装身具としての小玉等の製品が出土する。

これらの緑色を呈する原石は、小粒で装身具等の製作以外には考え難いものである。

これらの原石が、多量に出土することは、縄文人は、この緑色をなす色調を好みで集めた可能性があるように思われる。これらの原石の岩質は、ホルンフェルス、碧玉、緑色凝灰岩等が含まれる。

特に注意していきたいのは、ホルンフェルスである。このものは、装身具の他に、石斧その他石器のかなりの器種に活用されているように考えられるからである。筆者の考えでは遺跡によって差があるとしても、10～30%の比率で石器の原料として用いられているように考えている。

(V) 鉄器 (P・L 57、第8図)

この鉄器については、[V]-(3)において述べたとおり、微小片を含めて11片で出土した。その出土区、層位は、C地区X<sub>1</sub>グリットの原黒土 (Ia層) である。

既述したように、このX<sub>1</sub>グリットからは、3号住居址がカマドを南向きに備えて検出された。この3号住居址の直上に堆積する黒土層から鉄製品は、まとまって出土した。

この11片の鉄製品は、同一個体のもので、その形態から「刀子」と判断されるものである。

形態その他、細部については不明であるが、今後の研究に期待したいと考える。

この刀子の年代等も不明であり、3号住居址との関連、あるいは、既述の壠状遺構との関連等も含めて今後に問題を残したいと考えている。

#### (IV) 骨類 (P・L 58-60, 表3)

当観音林遺跡では、第一～第四次発掘調査において、A地区、B地区より、毎回骨片類の出土がある。

今回の調査においても、A地区J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>グリット（晩期中心）より（表3）に示す骨類を検出した。

すべて微小骨片のため取上げの際ピンセットで拾い上げる方法で採取したが、包含層は、二次堆積と考えられる焼けた粘土質ローム層（第Ⅱ・Ⅲ層の間にレンズ状に堆積する）の出土である。

これらの骨類は、（表3）に示したように、獸骨・鳥骨が含まれており、その中に焼けたものも認められている。

この事実は、当時の縄文人は、焼いて食料にしたとも考えられる。

また、出土骨類から、当時の動物相の一端をも知ることが可能と考えるところである。

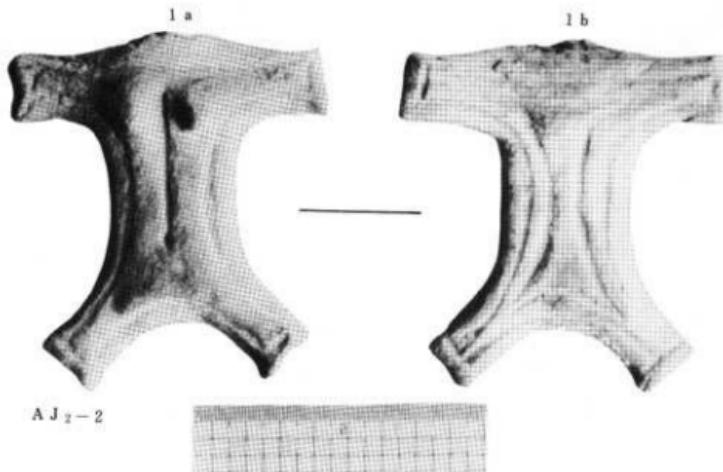
これらの第一～四次にわたる発掘調査において出土した骨類は、一貫して早稲田大学、金子浩昌氏に鑑定していただいた。ここに記して謝意を表する次第である。

なお、観音林遺跡出土の骨類は、次の機会に一括して述べ研究に供したいと考えるところである。

II [出土遺物]

[土 偶]

A · P · L 1



A J<sub>2</sub> - 2

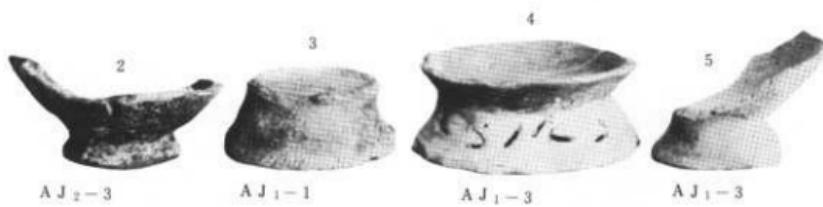
[土 偶] — 1 a , 1 b

☆ここに掲げたものは、J<sub>2</sub> - 2 より出土した大洞C<sub>2</sub>式土偶である。

・縄文時代の晩期、大洞C<sub>2</sub>式期には、遮光器土偶が一般に知られているが、ここに示した形の土偶も類例が見られる。

☆観音林遺跡では、第一次調査で、両手を組み座った土偶（昭49）や遮光器土偶、頭部欠損の土偶（昭59）も出土している。

また、後掲する大形の遮光器土偶の脚部も出土した。



A J 2 - 3

A J 1 - 1

A J 1 - 3

A J 1 - 3

## 〔台付土器の台部〕—2・3・4・5

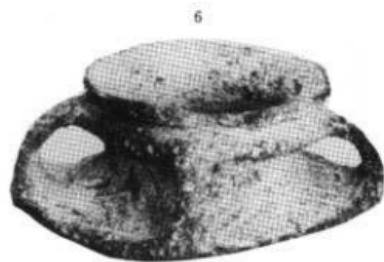
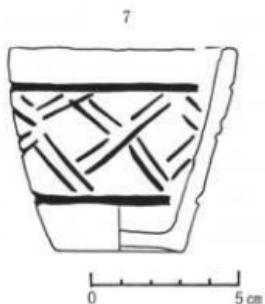
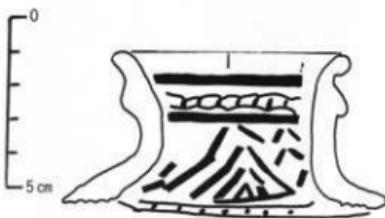
☆ここに掲げたものは、鉢形か深鉢形土器の台部である。

- ・いずれもJ<sub>1</sub>グリット出土で、2・4・5はⅡ層出土、3はⅠ層出土である。

このうち4は精製土器で、スカシ彫りがあり、他は粗製のものである。

- ・また、3は台部下端に縄文(L・R)が施文されるものである。いずれも大洞C<sub>2</sub>式土器と思われる。

☆台部は、無文のもの、台部下端に隆帯をめぐらし、その上に縄文の施文されるもの等に分けられる。また、精製では、スカシのあるもの、無文のもの、隆帯があり粘土粒の付くものもある。

AJ<sub>2</sub>-2AJ<sub>2</sub>-2

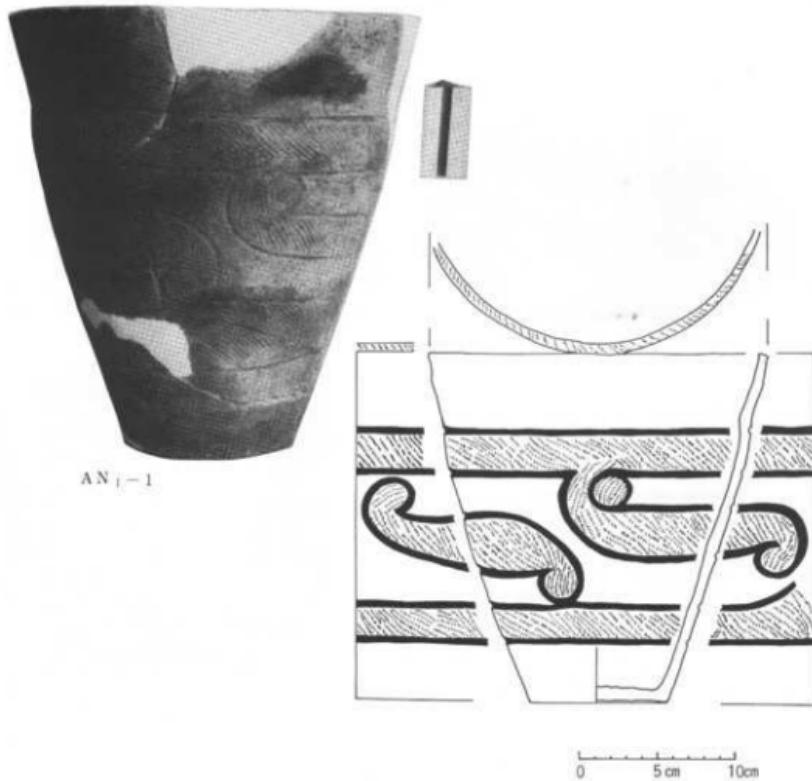
## 〔器台・小形深鉢〕—6・7

☆ここに掲げた6は、器台・7は小形の深鉢である。両者はA地区のJ<sub>2</sub>グリットII層出土（以後AJ<sub>2</sub>-2と略記する）である。

☆この6・7とも「十腰内I式」土器であって、6の器台は当方では、「十腰内I式」に顯著に出土するが、小形のものは出土が少ない。

また、7も小形のもので、施文は、格子目状文でこの期の一タイプとして把握できる。

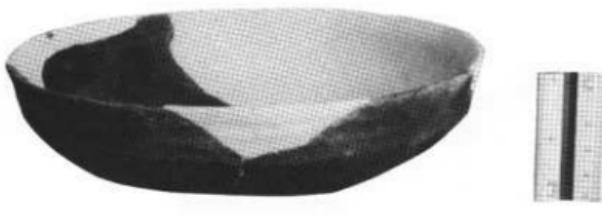
- 色調は、6は暗黒色、7は、明白褐色で、胎土は前者が悪く、後者は良好で焼成も同様である。
- なお、6は、「十腰内I式」終末期のものである。



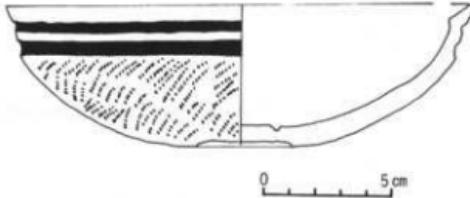
### [深鉢形土器]—8

☆このものは、AN 1-1出土のもので、「十腰内 I 式」土器としては、新しいものである。

- ・器形は、口頸部がやや外反し、肩部でしばまり、ややふくらむ肩部～胴部で、平底をなすものである。
- ・施文を見ると、口頸部が無文、頸部を平行沈線で区画し、縄文帯がめぐり、巴状の沈線によって磨消帯と縄文を充てんした部位に分けられる施文法である。縄文は0段多条の(R·L)で、巴状の沈線で区画した後、縄文を充てんしたものである。このものも「十腰内 I 式」の後半のものである。
- ・色調は、黒褐色、胎土、焼成とも良く堅緻である。



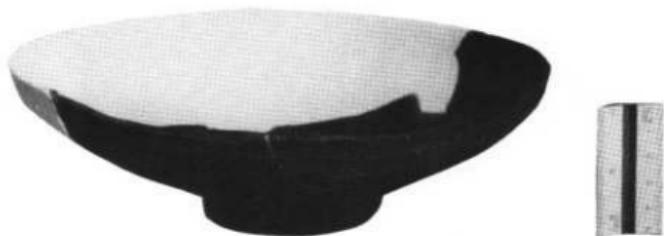
A J 1 - III



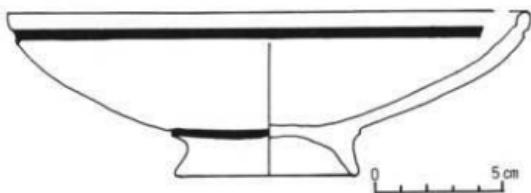
## 〔皿形土器〕—9

☆このものは、A J 1 - III出土の皿形土器で、「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

- このものは粗製土器で、皿形土器としてはやや深い器形である。施文は、口頸部に浅い沈線文が2条めぐり、胸部には、やや左傾する縄文（L・R）が密に施文されるもので、底面は小さくやや上げ底である。
- 色調は、黒褐色、胎土、焼成とも良く堅緻である。



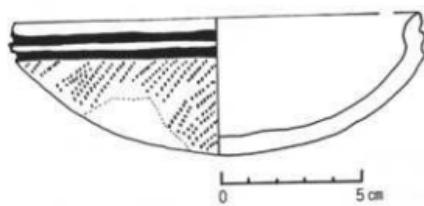
A J 2-II



## [台付浅鉢形土器]—10

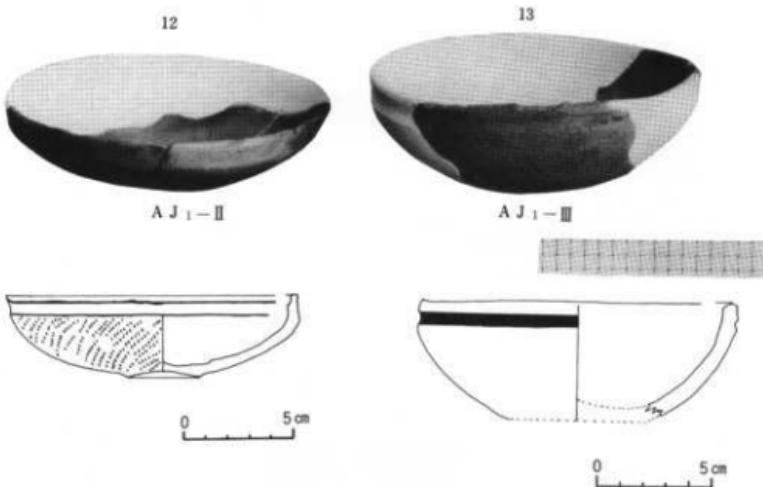
☆ここに掲げたものは、A J 2-II出土の台付浅鉢形土器で「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

- このものは、低い台部をもつのが特徴で、浅鉢は台部に比して口径が大きいものである。平縁で頸部より口縁に至る口頸部は直立に近く、胴部のふくらみも小さい器形である。
- 施文は、頸部に浅い沈線文が2条めぐるほかは無文で、研磨されたもので、精製土器である。色調は黒褐色、胎土、焼成も良好であるが光沢はない。



### [皿形土器]—11

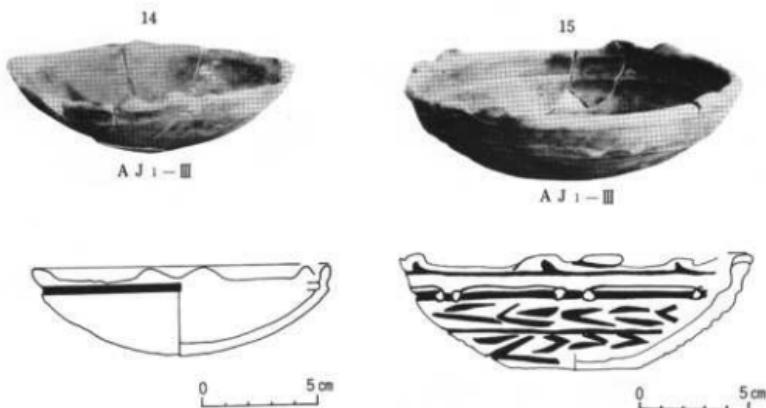
☆ここに掲げたものは、A J 1-III出土の粗製皿形土器である。このものも「大洞C<sub>2</sub>式」皿形土器であって、器形は平縁で口頸部はやや外反氣味のものである。肩部はふくらみを持ち、底面は丸底である。  
・施文は、口頸部に太く浅い沈線が2条めぐり、胴部には、(L·R) 繩文が左傾して密に施文されるものである。



## 〔皿形土器〕—12・13

☆ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」の精製皿形土器である。これらの両者は、AJ<sub>1</sub>—II・III層出土のもので、12は口頸部はやや直立し、肩部から胴部へかけては、ふくらみの小さい器形である。

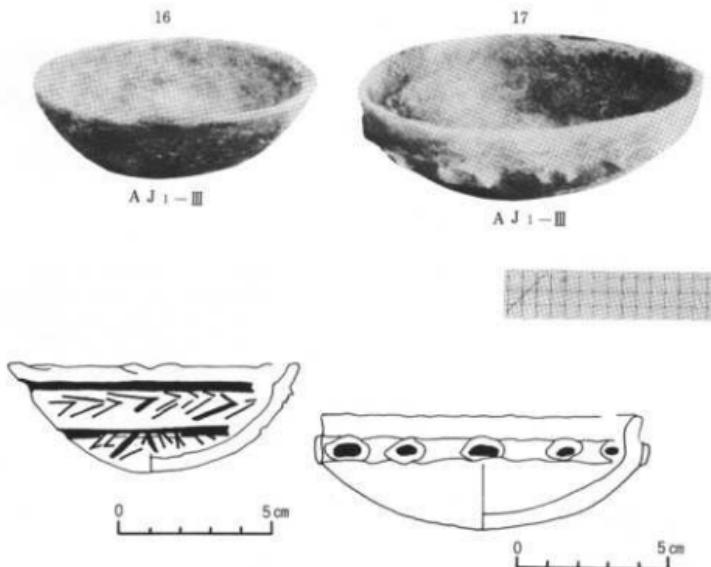
- 13は、まろやかなふくらみを持つ器形で、皿形よりも楕形に近い器形である。
- 施文は、12は口頸部が無文、胴部には左傾する（L・R）縄文が施文されるものである。13は、頸部に1条の沈線文がめぐるほかは無文である。12はやや上げ底、13は丸底である。
- 色調は、両者とも黄褐色、胎土、焼成とも良い。



## [皿形土器]—14・15

☆ここに掲げたものは、両者ともA J 1—III出土の精製皿形土器である。このうち、14は「大洞C<sub>2</sub>式」、15は「大洞A式」皿形土器である。

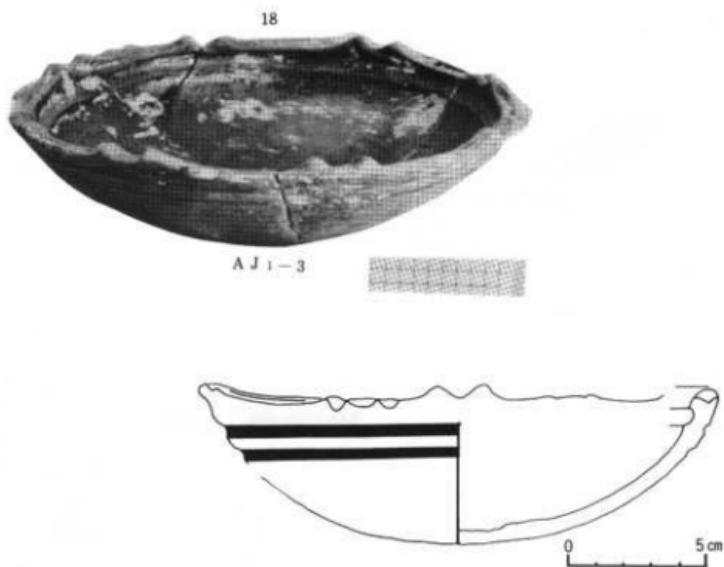
- ・器形は、14は小突起を4対付ける波状口縁で、口頸部はやや外反氣味のもので胸部は軽くふくらむ浅いものである。施文は口縁内側に沈線が1条めぐり、また口縁直下にも1条の沈線文がある。他は無文で朱ぬりの痕跡がある。
- ・15としたものも朱ぬり痕のあるもので、小突起をもち内面に沈線文、口縁下の頸部に無文帯をもち、肩部に山型突起を付す、胸部には「矢羽根状文」があるもので、底面はやや上げ底である。



## 〔皿形土器〕—16・17

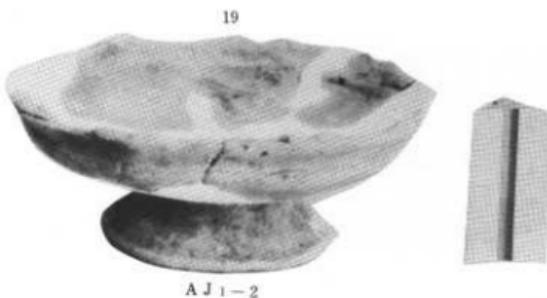
☆ここに掲げたものも、A J 1—I出土の皿形土器で、16は精製、17は、粗製土器である。そして両者とも「大洞A式」土器である。

- ・器形は、16は小突起をもつもので、口頸部はやや外反する。胴部には、「矢羽根状文」が施文され、底面は丸底である。
- ・17は、平縁のもので、口頸部は直立気味で肩部が張る。また肩部には前方に突き出る2こ一対の小突起が付される、胴部は無文である。また底面はやや上げ底である。
- ・色調は、16は黒褐色、17は暗黒褐色で、胎土・焼成とも16は良いが17は悪くもろいものである。

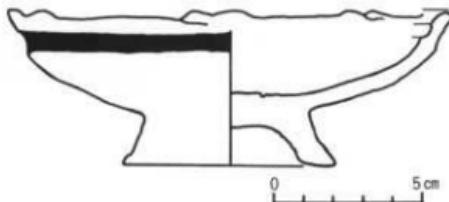


## 〔皿形土器〕—18

- ☆ここに掲げたものは、A J 1 - III出土の「大洞A式」精製皿形土器である。
- このものは、2こ一対の山形突起が付く口縁のもので、口唇部には沈線文があり突起間をつないでいる。口縁内側にも沈線文が1条めぐり、段をなしている。口縁直下には、2条の沈線文があり、胴部は無文であるが、朱うるし塗り土器である。
- このものは、口唇部の沈線文、山型突起と側方に突きでる扁平な突起等から「大洞A式」である。



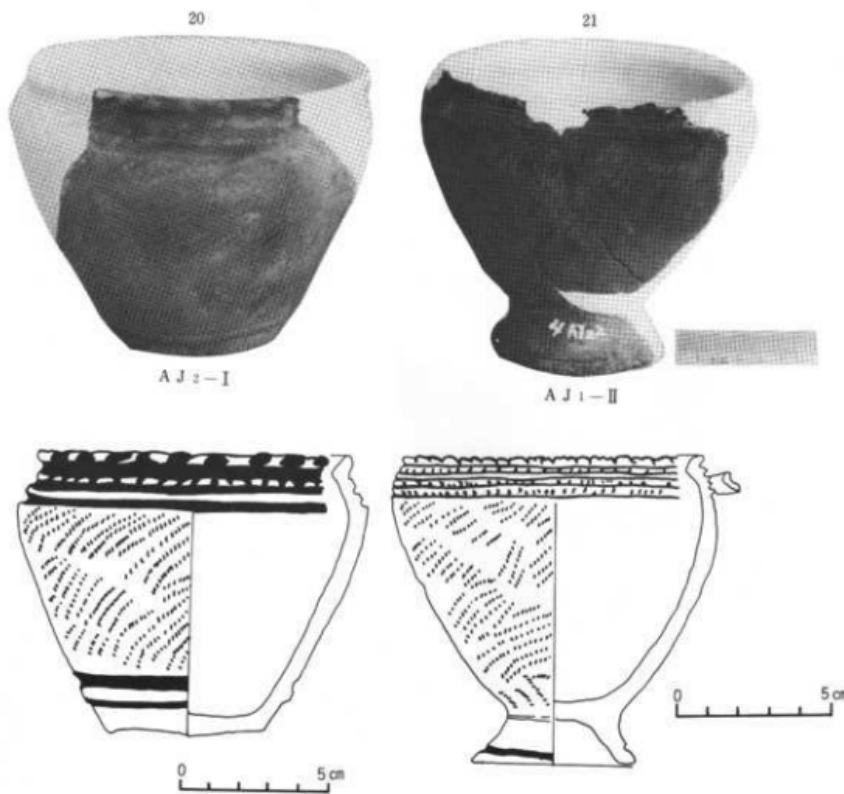
A J 1-2



## 〔皿形土器〕—19

☆ここに掲げた台付浅鉢形土器は、朱ぬりの痕跡を止めるもので、A J 1-II出土の精製土器で「大洞C<sub>2</sub>式」である。

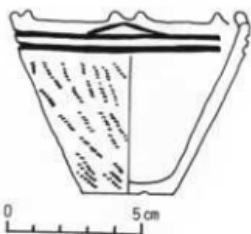
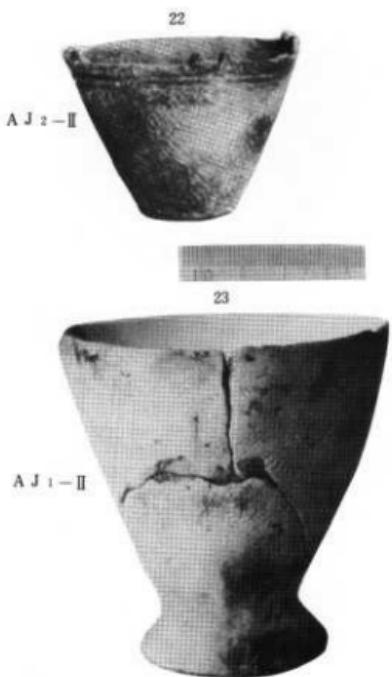
- このものは、口縁は波状口縁で、小突起をもち、その内側には沈線文が一条あり、外面にも沈線文が一条めぐるもので、他は無文である。
- この土器の特徴は、その台部が低く、末広がりに広い台をもつことである。



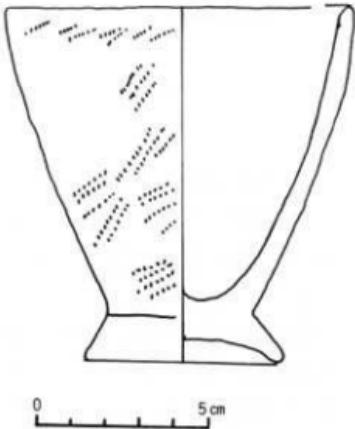
## 〔鉢形・台付鉢形土器〕—20・21

☆ここに掲げたものは、AJ<sub>2</sub>-I出土の「大洞C<sub>1</sub>式」鉢形土器とAJ<sub>1</sub>-II出土の「大洞C<sub>1</sub>式」台付鉢形土器で、両者とも粗製土器である。

- ・このうち、20は平縁で口縁下に、円形の粘土粒を付すもので、口頸部は外反する。頸部には三条の沈線文があり、胴部には、左傾する（L・R）縄文、底部直上に沈線文を付す、底面は平底である。
- ・21は、口縁部が小波状を呈し、頸部には細い沈線文が四条めぐり、小刺突文を付す、胴部には、（L・R）の左傾する縄文が付され、台下端には、一条の沈線文がめぐる。色調は、20・21とも黒褐色、胎土、焼成は20が良く、21はもろい。



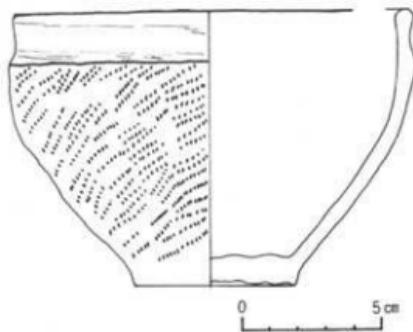
- [小形鉢形・台付深鉢形土器]—22・23  
 ☆ここに掲げた22・23は、AJ<sub>2</sub>—II、AJ<sub>1</sub>—II 出土の「大洞C<sub>2</sub>式」「十腰内I式」土器である。
- 22は、口縁に小突起を有し、二条の沈線文を肩部にめぐらし、胴部には(L・R)縄文を右傾させる。底面は平底である。
  - 23は、「十腰内I式」としてはめずらしいもので、(R・L)縄文が付される。台部は無文である。



24



A J 2-II



## [鉢形土器]—24

☆ここに掲げたものは、A J 2-II 出土の「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器で、粗製土器である。

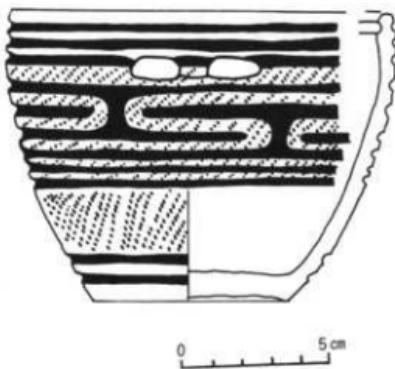
- ・欠失部位が多いため、断定はできないが、平縁と思われるもので、頸部は無文帶のようである。肩部がやや張り、胴部はふくらむ器形で底面はやや上げ底である。胴部には (L · R) 繩文が不整に施文されるものである。

☆「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器で頸部が無文帶のものは、C<sub>2</sub>式の後半に多く見られる。色調は、黒褐色、胎土・焼成も良く堅緻である。

25



A J 2-II



## 〔鉢形土器〕—25

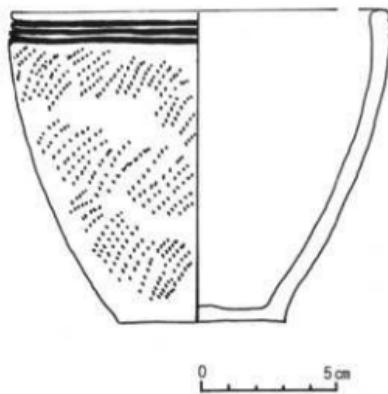
☆ここに掲げたものは、「大洞A式」鉢形粗製土器である。

- このものは、平縁で、頸部が内傾するもので、肩部と胴部には、側方につき出す突起が二段に付される。
- 胴部には、縄文（L・R）が施文され、その後、「入り組み工字文」が施文されるものである。
- 胴部がふくらむ器形で底面は平底と思われる。色調は黒褐色、胎土、焼成ともやや悪い。

26



A J 2-II



## 〔鉢形土器〕—26

- ☆ここに掲げたものは、A J 2-II 出土の「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器である。
- このものは、粗製土器で欠損のため底部は不明、平縁で頸部に三条の沈線文がある。肩部下より底部までは、(L・R) 繩文が左下りに施文されるものである。
  - 色調は、黒褐色、胎土、焼成は良好である。なお一部に煮沸痕がある。
- ☆「大洞C<sub>2</sub>式」土器群では、口頸部に三条の平行沈線が施文されるのが基本である。



## 〔鉢形土器〕—27

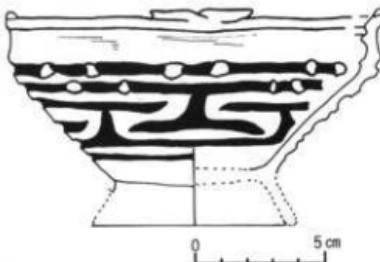
☆このもの、A J 1-III出土の「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形土器である。

- このものは、平縁で口頸部の器厚がうすく、外反するものでやや肩部が張る器形で、胴部がゆるやかにふくらみ、底部がやや直立する。底面は、上げ底氣味である。
- 胴部には（L・R）縄文が左下りに施文されるものである。色調は、黒褐色、胎土、焼成ともやや悪いものである。

☆26・27を比較すると、27は、口径と底径の差が大であって、27が26よりやや新しいものと考えられる。



AJz-II



## 〔台付鉢形土器〕—28

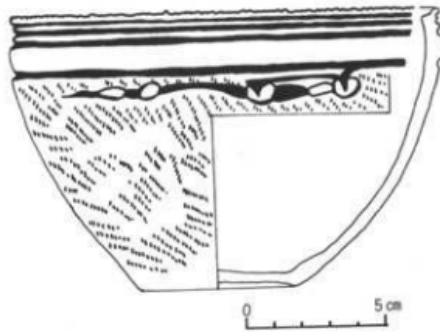
☆この土器はAJz-II出土の「大洞A式」精製土器である。

- ・このものは、口縁に扁平な突起をもっており、頸部は無文帯をなすもので肩部は強く側方に突出し、2ヶ一対の突起間、および突起間は沈線によって連結されている。その下段に小突起を付するもので、肩部から直線的に台部に接する器形である。
- ・施文は、「入り組み工字文」の典型的なものであり、器形もまた台付鉢形の典型的な器形である。
- ・色調は黒褐色、胎土、焼成とも良い。

29



A J z-II



## 〔鉢形土器〕—29

☆ここに掲げたものは「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製鉢形土器である。

• このものも口頸部の器厚はうすく、内面には段がある。口頸部は、やや外反するもので三条の浅い沈線文がある。肩部には小突起があり、胴部は丸味のある器形で底面は、上げ底氣味である。

• 胴部には、(R・L) 繩文が右下りに施文されるものである。この(R・L) 繩文の施文されるものは少ない。色調は、黒褐色、胎土、焼成とも良い。

☆当地方では、晩期の土器は(L・R) 繩文が多く、(R・L) はごく少数で、前者は左下り、後者は右下りである。すなわち繩文の回転方向は、←→横方向に一定している。



## 〔台付鉢形土器〕—30

☆ここに掲げたものは、A J 1-III出土の「大洞A式」精製土器である。

- このものは、肩部から口縁にかけて把手の付いたもので、口縁は平縁に低い小突起が認められる。頸部は無文帯をなし、肩部が張るもので、肩部には2個一対の粘土粒を付しており、胴部は、(L・R) 繩文を地文に「入組み工字文」が施文される。
- 脇下部には、同じ原体による (L・R) 繩文が付され、台部は無文で研磨されているものである。



## 〔台付鉢形土器〕—31

☆ここに掲げたものも、把手のある「大洞 A 式」台付鉢形土器である。

- このものは、精製土器で、口縁には低い小突起をもつが平縁である。  
口縁内側には太い沈線文がめぐる。頸部は沈線文をもち、肩部には隆起帶があり、  
その上面に短沈線をはさんで側方に突き出す突起を有している。胴下部には、(L  
・ R) 繩文が左下りに施文されるものである。
- 台部は無文であるが、台部下端直上には沈線文が一条めぐるものである。
- このものの色調は、黒褐色、胎土、焼成とも良好で堅緻である。なお、この土器  
には煮沸痕がある。

32

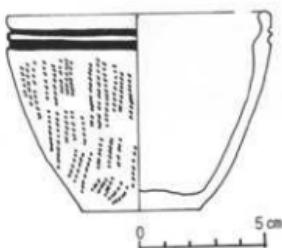


A J 1-III

33



A J 2-II



## 〔鉢形・台付鉢形土器〕—32・33

☆ここに掲げたものは、A J 1-III、A J 2-II出土「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形・台付鉢形土器である。両者とも粗製土器である。

- このうち、32は、口縁上端に縄文があり、頸部には、2条の浅い沈線文が施文される。肩部下には、(口端と同様の原体→L・R)縄文がやや左下りに施文されるものである。底面は、やや上げ気味のものである。
- 33としたものは、口縁が小波状を呈し、頸部には、3条の沈線がめぐり、胴部には、やや左下りのL・R縄文が施文されるものである。外面には煮沸痕が多量に付着するものである。



## 〔台付鉢形土器〕—34

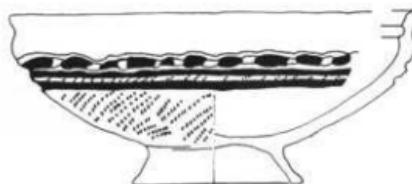
☆このものは、AN 1—I 出土の「大洞A式」精製土器である。

- ・欠損しているが多分把手がつくものであろう。口縁には小突起を付すもので、頸部は無文帯をつくり、肩部が張る器形で胴部には、(L・R) 繩文を最初に施文し、その後「入り組みI字文」が施文されたものである。
- ・また、胴下部には、(L・R) 繩文が左下りに付され、台部は無文で、その下端に沈線文が一条めぐる。色調は黒褐色、胎土、焼成はやや良い。

35



A J 1-III

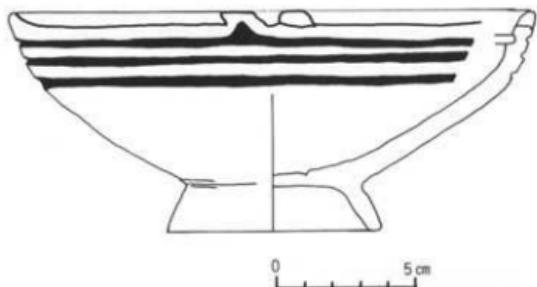


[台付浅鉢形土器]—35

☆このものは、A J 1-III出土の「大洞A式」精製台付浅鉢形土器で、器内外面に顯著な朱ぬりの痕跡がある。

• 口縁は平縁で、内面に段がある。口頸部は無文でやや内傾気味のもので肩部が張る。肩部には、沈線文が一部にある。胴部には（L・R）縄文が左下りに施文される。台部は無文で朱ぬりの痕跡がある。色調は赤色塗料の剥離した面は黄褐色、胎土、焼成とも最良である。

☆なお、この土器を「大洞A式」としたのは、肩部の沈線文の一部分が横位の短沈線文であること、および器形からであるが、「大洞C2式」の後半に出現する可能性もある。



### [台付浅鉢形土器]—36

☆ここに掲げたものも、A J 1-III出土の「大洞A式」精製台付浅鉢形土器で、朱ぬり痕のある土器である。

- 器形は、口縁に突起が2こ一対ずつ四対付くもので平縁である。口頸部には、三条の沈線がめぐり、そのうち一条目は突起の一つに山形に伸びている。内面には沈線文が一条施文されるものである。
- 色調は、赤黒色、胎土、焼成とも最良である。なお、このものは、口径に比して台部が小さく、低いものである。

☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の精製壺形土器である。

- ・この土器は、口縁に突起を二つ付し、口縁は、二重の隆帯がめぐる複合口縁をなすものである。
- ・頸部は、ほぼ直立するもので、この直立する頸部を持つ器形は、「大洞C<sub>2</sub>式」でも後半に出現するものと思われる。
- ・胴部は、下半が欠失しているが、実測図のようになるものと思われる。(図上復原)

☆この壺形土器の施文については下に述べる。



(②)アップ写真



☆施文について

- ・この壺形土器の施文を見ると、写真では、よくわからないのであるが、実測図に示すとおり、「大洞C<sub>2</sub>式」の主文様パターンの一つである曲線文と「大洞A式」の主文様の一つである入組み土字文の二つの文様が施文されるものである。

☆すなわち、「大洞C<sub>2</sub>式」の器形の特徴をもち、施文は既述のように2型式の文様要素を持つタイプである。

☆この「大洞C<sub>2</sub>・A式」の要素を有するものを大洞C<sub>2</sub>式期の後半(大洞C<sub>2</sub>式を新・旧に分けて)のものとして、「大洞C<sub>2</sub>-A」と仮称しておきたいと考える。

☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の精製鉢形土器である。

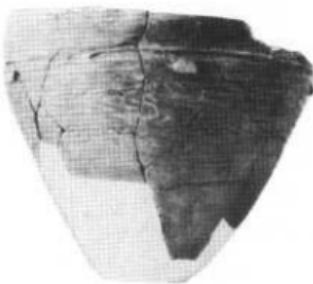
- このものは、口縁は平縁であるが、小突起をもつもので、頸部は無文帶をなすものである。

☆この頸部が無文帶をなすものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の後半に出現するものようである。

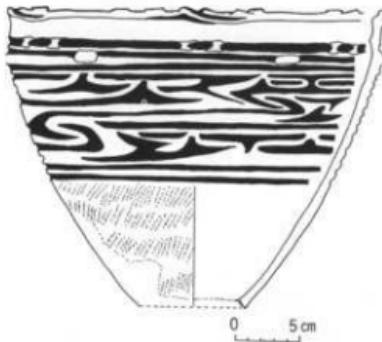
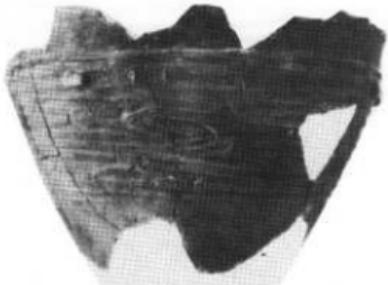
- 肩部下より胴部にかけては、②アップ写真、および実測図に示すとおり、「大洞C<sub>2</sub>式」の主文様の一つである曲線文と、「大洞A式」の主文様の一つである入組み工字文の二要素をもつ施文で、A・P・L27のものと同様である。

①

38



②アップ写真



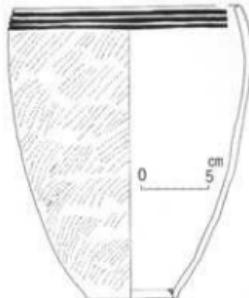
☆このように、「大洞C<sub>2</sub>式」「同A式」の2型式の要素を有するものを、「大洞C<sub>2</sub>-A式」と仮称し、「大洞C<sub>2</sub>式」の新しいものとして位置づけを考えたいと考える。

☆なお、さらに付記すれば、入組み工字文の未完成な施文のものも、「大洞C<sub>2</sub>-A式」の一タイプと考えられる。(このタイプのものは、五月女苑遺跡で出土した。)

☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製深鉢形土器である。

- ・このものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の典型的な大型の深鉢形土器である。
- ・口頸部は、軽く内傾する器形で、頸部には、沈線文が3条めぐっており「大洞C<sub>2</sub>式」の基本パターンである。(沈線文が2本のものもある。)

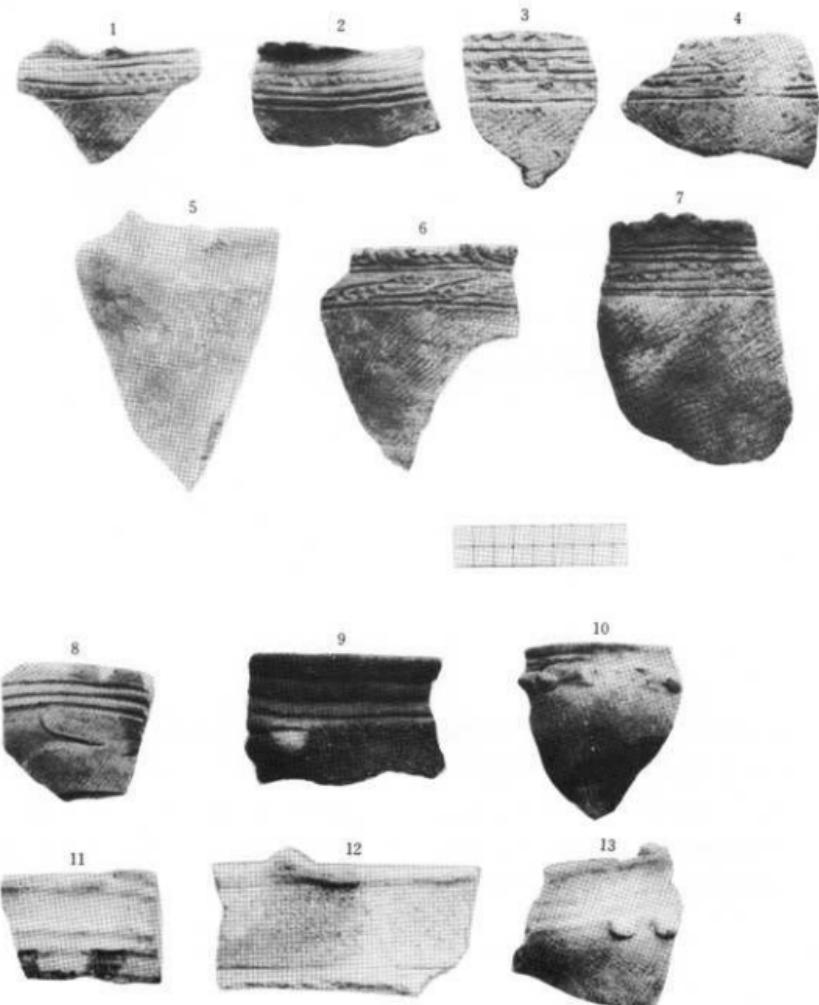
39



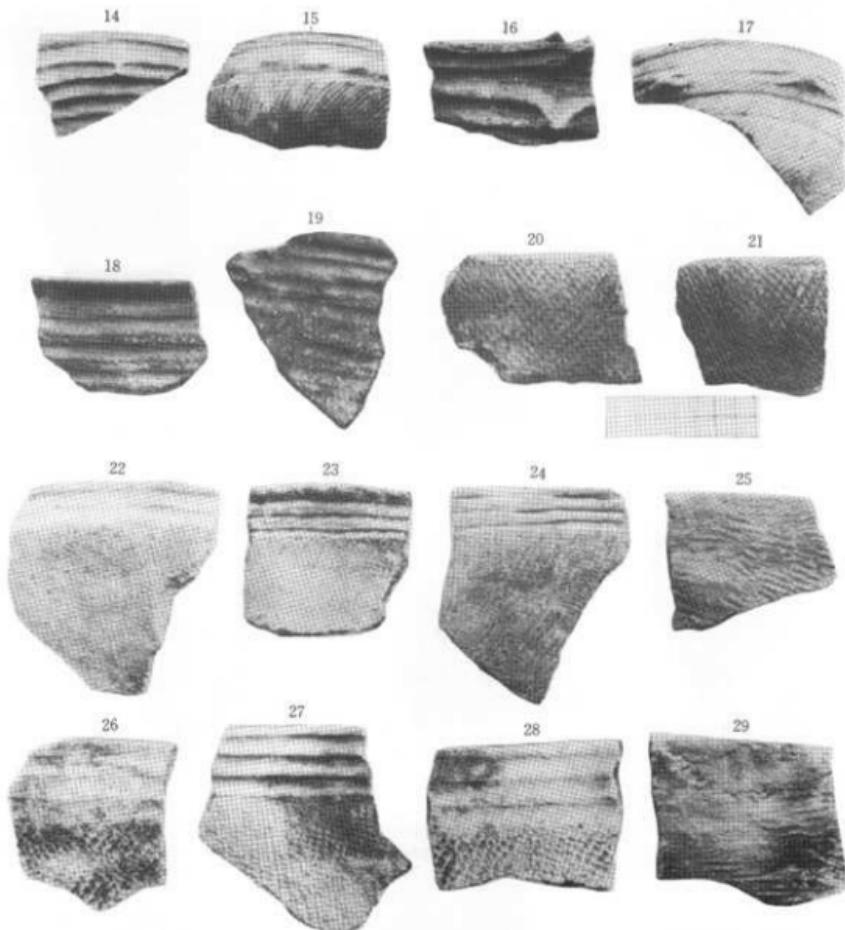
☆肩部下より胴部には、左下りの縄文（二段単節L・R）が施文されるものである。

- ・A・P・L 2～29に掲げた完形・復原土器34個の大部分がL・R縄文で、しかも左下りに斜行する。このことは、第三次の報告書、その他で指摘してきたとおり、当観音林遺跡、その他の遺跡においても、津軽半島西部においては、(L・R)縄文が極めて多く、(R・L)はきわめて少數である。

[A J 1—I 出土、土器]—(P・L 1～P・L 16)

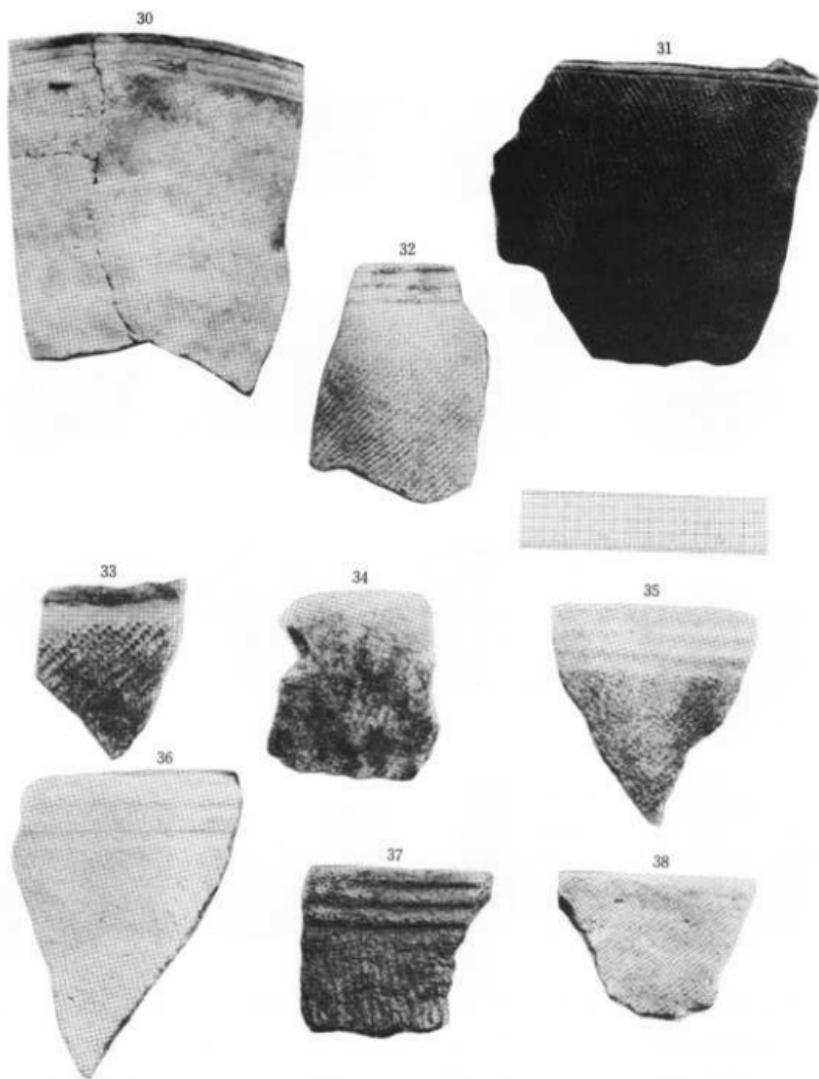


☆ここに掲げた1～7は「大洞C<sub>1</sub>式」鉢形土器である。また、8～13は、「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器である。このうち、8は精製、他の1～13はいずれも粗製土器である。

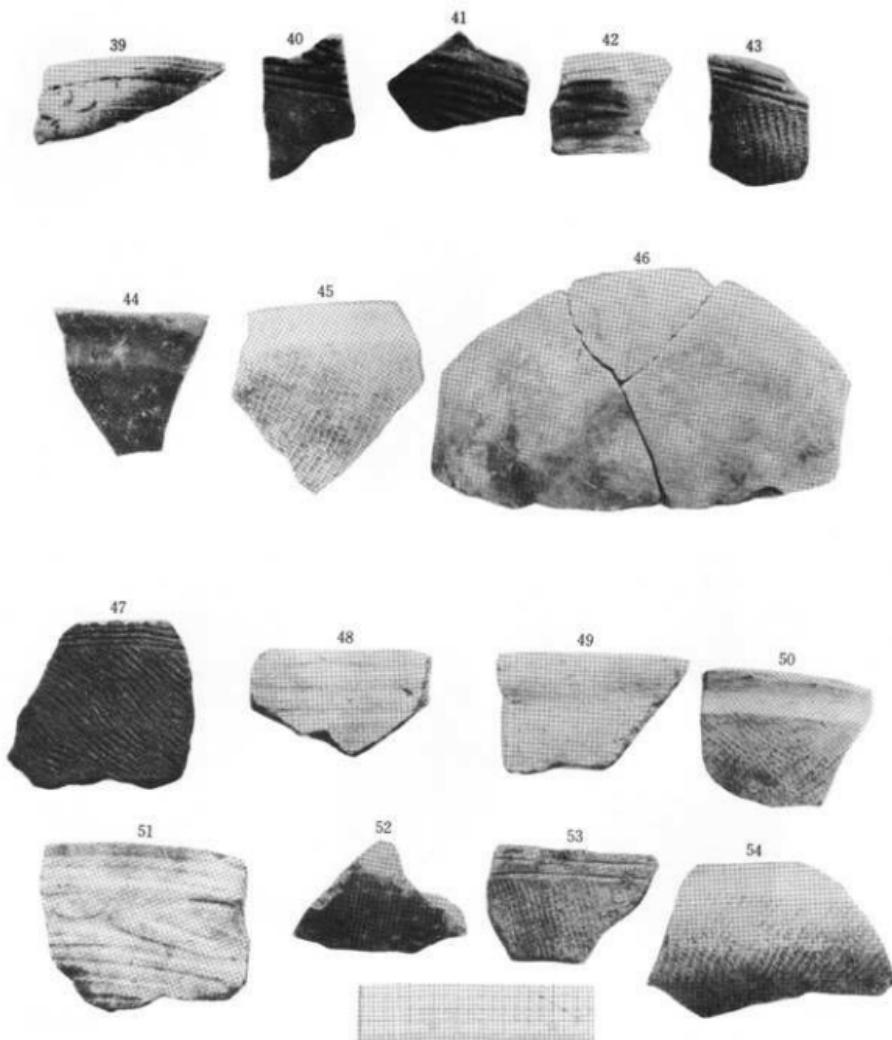


☆ここに掲げたもののうち、14～17は「大洞A式」土器である。また、18・19も同型式のものである。このうち、14は精製、他は粗製土器である。

- 22～24、26～28は、いずれも「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形～深鉢形土器でこれらの土器の頸部～肩部には、2～3条の平行沈線文がある。
- また、20・21・25・29は、縄文のみの破片で型式決定の決め手はないが、20・21は、晩期、25・29は後期であろう。いずれも大形深鉢と思われる。



☆ここに掲げたもののうち、30～32はJ 1-I 出土の大形鉢形土器で「大洞C 2式」、  
33～38は、やはり「大洞C 2式」鉢形～深鉢形土器で粗製土器である。

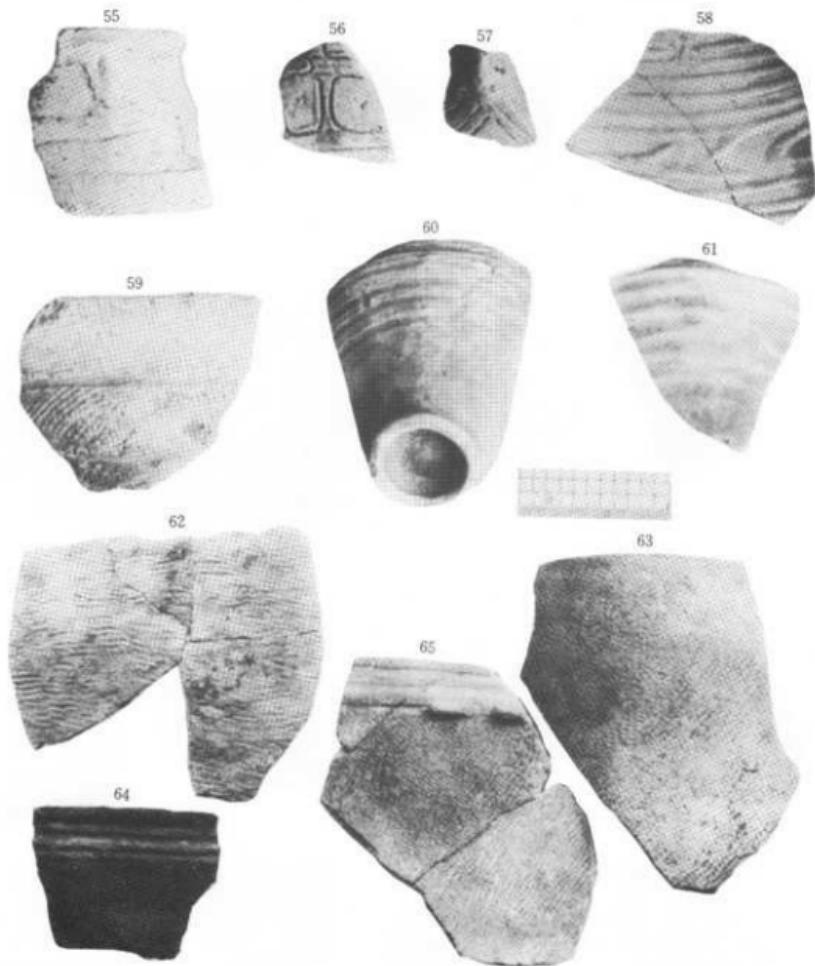


☆このP · L 4 のうち、39 · 40 · 47は「大洞C<sub>1</sub>式」、41 · 42は「大洞A式」土器で、他はすべて「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。(但し49は十腰内I式)

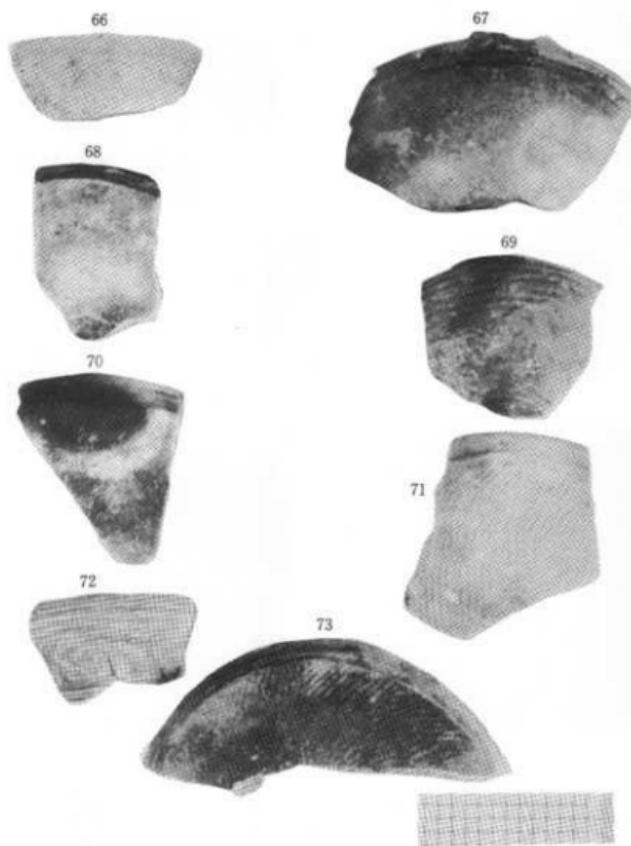
- このうち、46は皿形、43~45 · 48 · 50 · 51 · 53 · 54は、深鉢~鉢形土器であろう。なお、52は注口土器の破片である。

[A J 1—II 出土、土器]

P・L 5

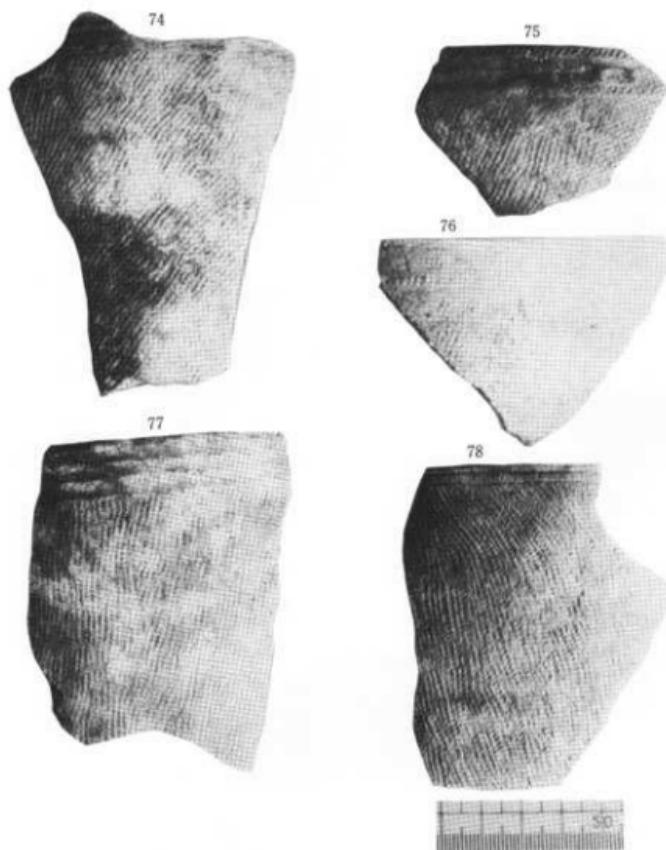


☆P・L 5 のうち、55～57・59は「十腰内 I 式」、64・65は「大洞C<sub>2</sub>式」土器、58・60・61は「大洞A 式」で精製土器である。また、62・63は晩期の粗製大形斐形土器と思われる。



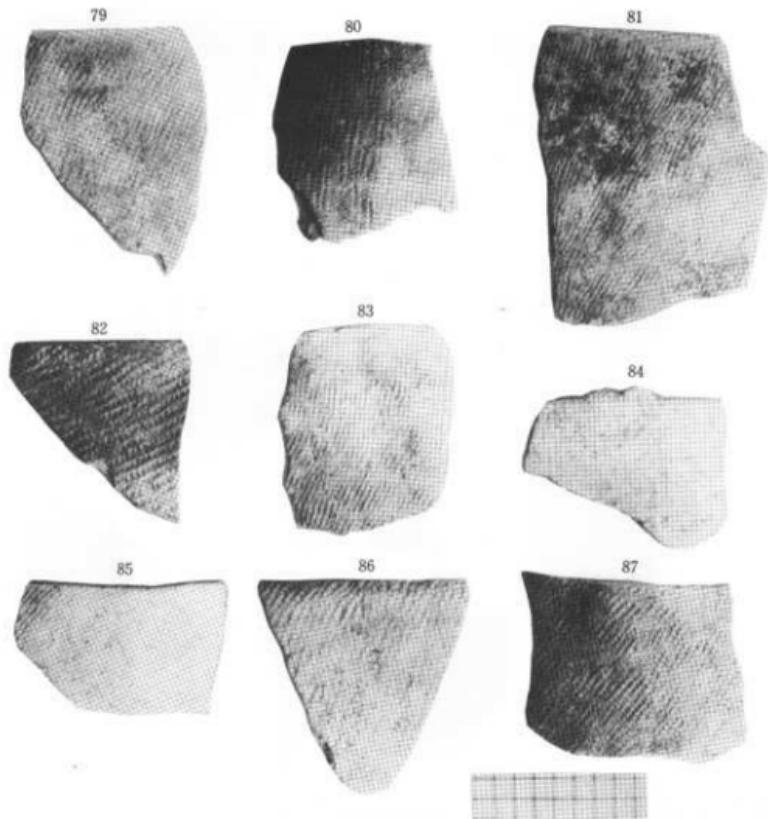
☆P・L 6に掲げたものは、71を除きすべて皿形土器である。このうち、69は「大洞A式」、他はすべて「大洞C<sub>2</sub>式」である。

- このうち、71は、深鉢形である。67・68は胴部が無文。69～73は胴部に縄文（L・R）が施文される。とくに72は、地文の上に沈線文がある。
- そして、66は、口頸部が無文、他は2～3条の平行沈線文が口頸部に施文されるものである。なお69は胴部無文、69・72は精製土器である。



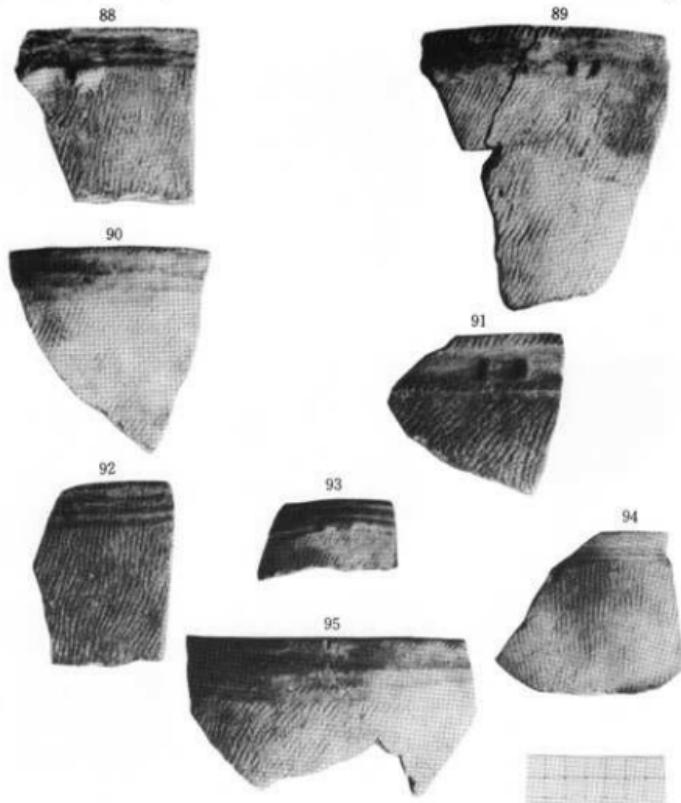
☆ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。いずれも粗製土器であるが、75は鉢形、他のものは深鉢形土器である。

- このうち、74・77は、口頸部に平行沈線が三条めぐり脣部には縄文（L・R）が左下りに施文される。76・78は、沈線文が二条のもので、縄文は、76は（L・R）で左下り、78は（R・L）で右下りである。また、75は口端にも縄文（L・R）がある。この75は「大洞C<sub>2</sub>式」でも新しいものである。



☆ここに掲げた79~87は、いずれも縄文・撚糸文の施文される大形の深鉢形土器である。このうち、80は単軸撚糸文（L・R）と思われる。他のものは、すべて（L・R）縄文である。

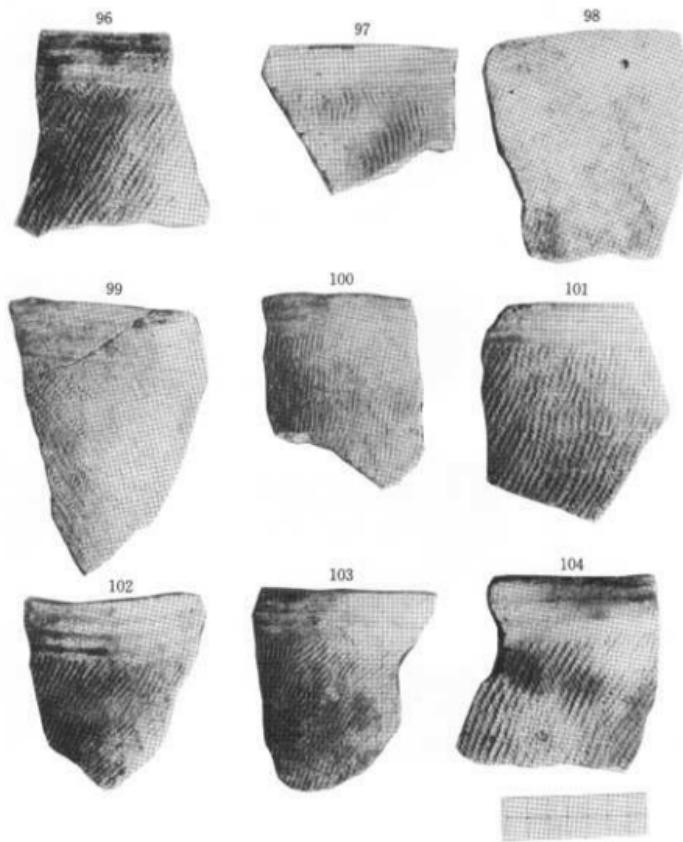
- ・口縁は、84に小突起を持つが、他は平縁のものである。また、83・87は口頸部がやや外反するが、他は口縁上端が内傾するものである。
- ・このP・L 8には、晩期「大洞C<sub>2</sub>式」を中心とする縄文のみ施文の深鉢形土器を一括して掲げたが「粗製土器」の期間が長いので特定型式に位置づけるのはむずかしい。



☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形土器である。このもののうち、88～92・95には口端に縄文（L・R）が施文されるタイプで93・94はそれがないタイプである。

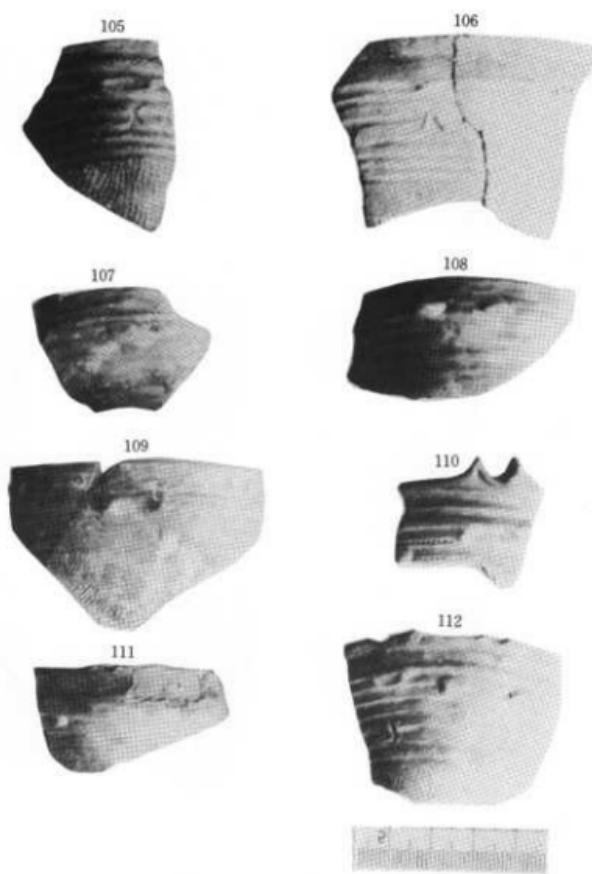
- これらの土器には、二・三条の沈線文が施文されるもので「大洞C<sub>2</sub>式」の基本パターンである。前頁で述べたとおり、口端に縄文のあるものは「大洞C<sub>2</sub>式」でも新しいものである。

- 縄文は、94は（L・r）撚糸文、他は（L・R）縄文である。



☆ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器で大形土器である。

- いずれも、口頸部～肩部に三条を基本とする平行沈線文が施文されるもので胴部には縄文 (L・R) → 96～98、101～104、(R・L) → 99、撚糸文 (R・ℓ) → 100 である。
- この96～104としたものも「大洞C<sub>2</sub>式」深鉢形土器の基本タイプである。

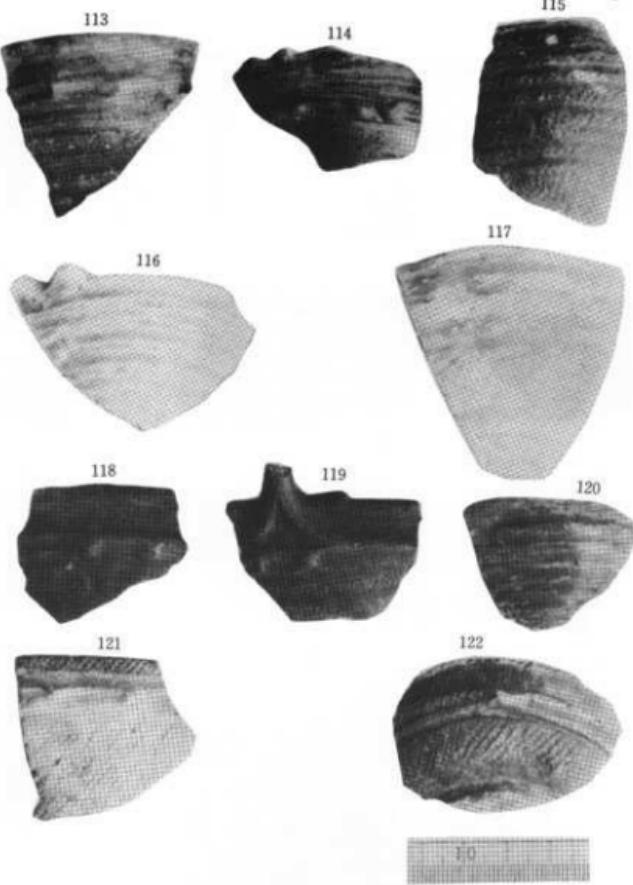


☆ここに掲げたものは「大洞A式」鉢形土器である。このうち、110は精製鉢形土器で他は粗製土器である。

- 口縁は、平縁のもの→105～109、口縁に小突起をもつもの→110～112である。これらの土器には、「入り組みI字文」が施文されるタイプである。
- ☆いずれも「大洞A式」土器の基本文様を施文したものである。また胸部下半には縄文（L・R）が施文されるものである。

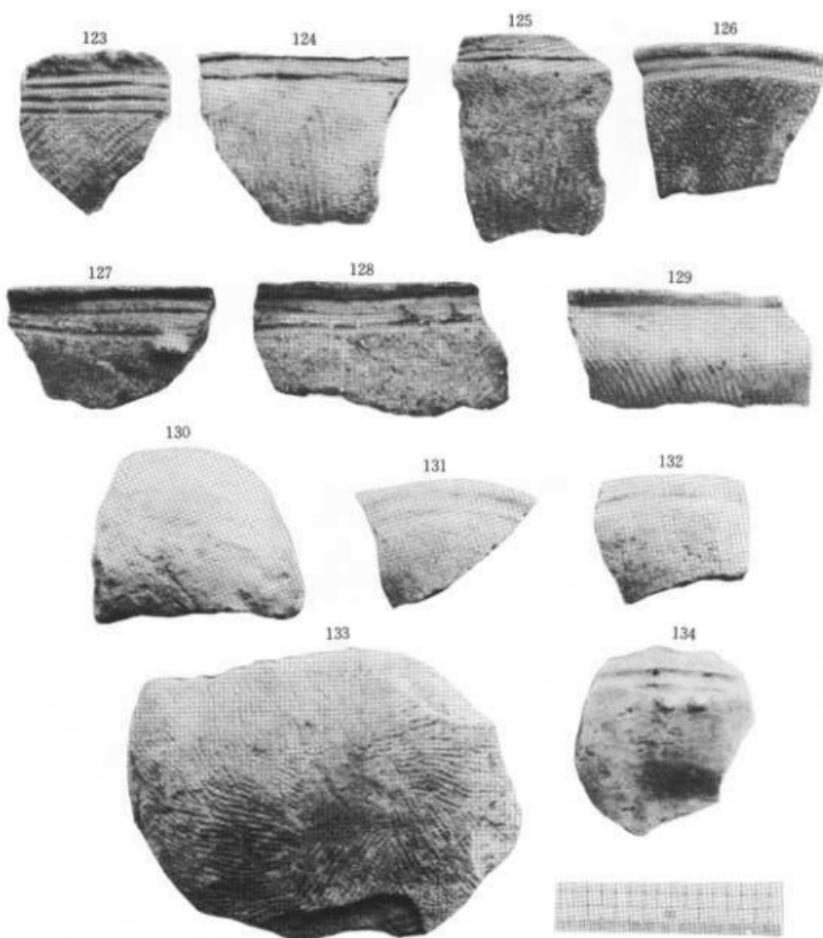
[A J 1-III出土、土器]

P・L 12



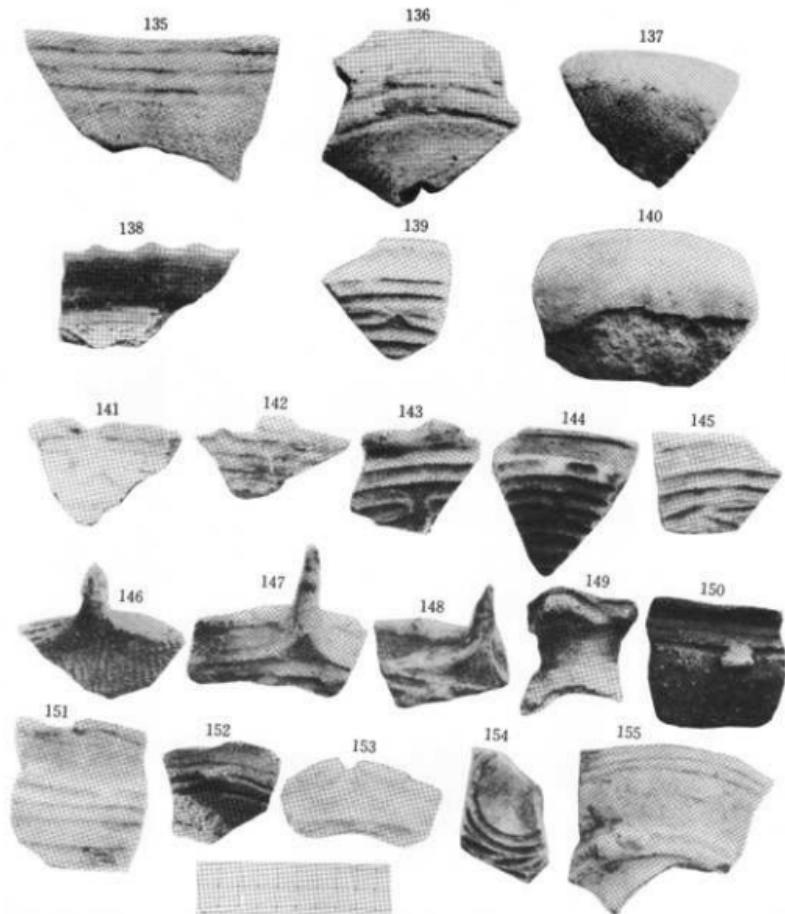
☆ここに掲げたものは、「大洞A式」皿形精製土器→116・117・120・122と、鉢形土器（粗製）である。

- このうち、113～116、118～120は、「入り組み工字文」、117は「矢羽根状文」、121は、沈線文と小突起、122は、小突起と沈線文の施文である。
- 繩文は、116・117を除く他の胴部下位に施文される。なお119には、把手が付くものである。



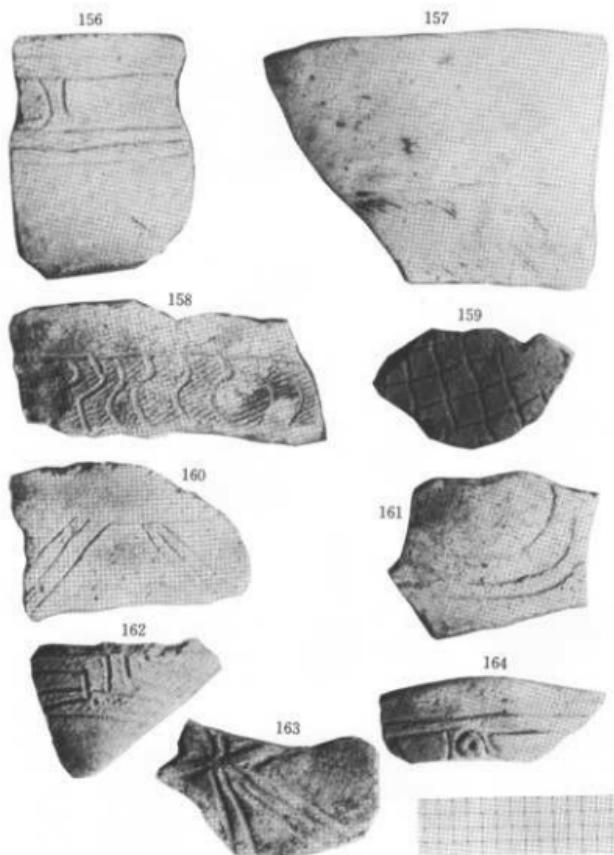
☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>1</sub>式」粗製鉢形土器→123~129と「大洞C<sub>2</sub>式」粗製皿形土器→130~134である。

- 123~129は、口端が強く外反するタイプで、特に129は肩部が張るものである。
- このうち124は燃糸文（R・ℓ）で他の123・125~129は（L・R）縄文である。
- 130~134は皿形土器で、沈線文のあるもの→131・132・134で、133は皿形土器の底面である。



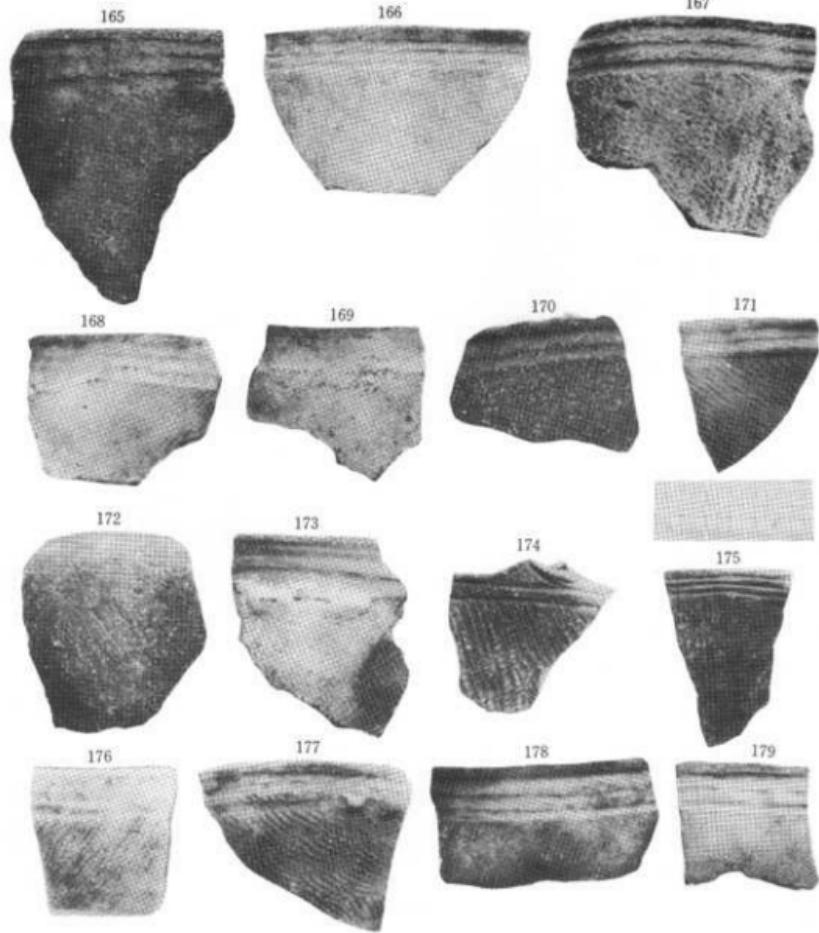
☆ここに掲げたもののうち、135～138、140は「大洞C<sub>2</sub>式」で、135・136・138は鉢形、137・140は皿形土器である。

- 139・143・144・145は「大洞A式」精製皿形土器である。また、141・142・146～148、151～153は「大洞A式」鉢形土器である。このうち151は精製・他は粗製土器である。なお150は「大洞C<sub>1</sub>式」鉢形と思われる。
- また、149・155は、壺形土器の口頸部で「大洞C<sub>2</sub>式」精製土器、154は底部である。



☆ここに掲げたものは、「十腰内 I 式」深鉢形土器である。この後期初頭「十腰内 I 式」土器群を新・旧に分けると、157・158・162は新、他は旧と考えられる。

- すなわち、広い口頸部が無文のもの、(157)、垂下するS字状文(158)、および縄文を充てんした「方形区画文」—162等である。
- 156、159～161・163・164は、旧のタイプ各種である。



☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形→165~173、177~179、および、深鉢形→174~176、土器である。また、179は「大洞A式」深鉢形土器である。

• これらのものには、口頸部に平行沈線文が、二~三条施文されるのが一般的であるが、172は縄文のみ、169は口頸部が無文のものである。

180-1



180-2

{ ☆P · L 19に  
再掲 }

☆ここに掲げたものは、2片とも同一個体のものである。いずれも口頸部の破片である。このものは、P · L X 1 · 2に示したものと同様「十腰内I式」終末期の深鉢形土器である。

• このものは、口頸部が大きく開き肩部がしばまる器形のものと思われる。

施文は、口縁直下に沈線文が一条めぐり、広い頸部の下端にも沈線文が一条ある。肩部下には、磨消帶と曲線で区画された中には、縄文 (L · R) が充てんされるものである。なお口頸部の縄文も同様である。

☆この土器についても本文において再度述べることにする。



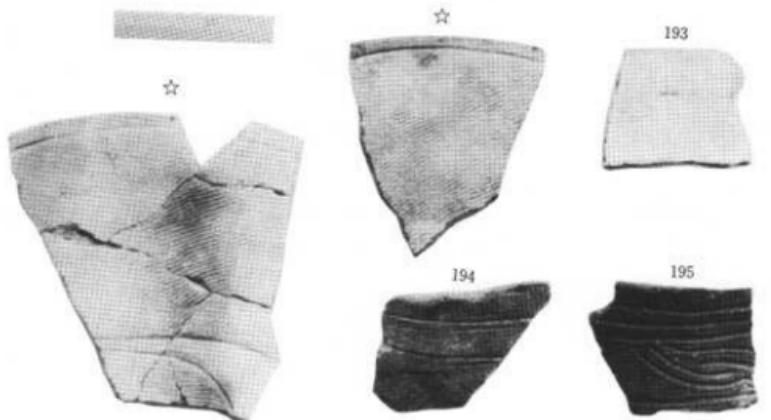
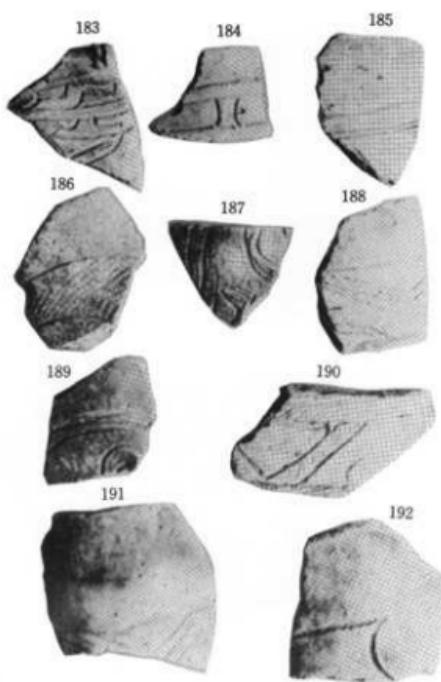
(☆181は線刻石である。)

☆ここに掲げたものは「線刻石」と、それに伴出した朱ぬりの「大洞C<sub>2</sub>式」皿形土器である。

- 182とした朱ぬりの皿形土器は、181の線刻石の時期を明らかにしたい意図で掲示した。
- 181とした線刻石は「泥岩」に線刻のあるもので、中央にクボミがあり、それを囲むように線刻があるので、線刻の持つ意味は不明である。また、裏面にも、中央左よりに線刻が若干認められる。

☆ここに掲げたものは、上段・下段とも「十腰内I式」土器である。

- このうち、183~186、188~189、191~192は、口頸部破片、187~190はそれぞれ胸部、肩部下破片である。
- 193~195も口頸部破片であるが、193は、折り返えし口縁、194~195は波状口縁と思われる。





☆ここに掲げたもののうち、上段は「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形→196・198・199・201・197・200→深鉢形と思われる。

☆下段のものは、「大洞C<sub>2</sub>式」→209・213で他はすべて「大洞A式」土器である。このうち、210は粗製、他は精製土器である。

☆器形→202・204・205・207・208・211・212は皿形土器

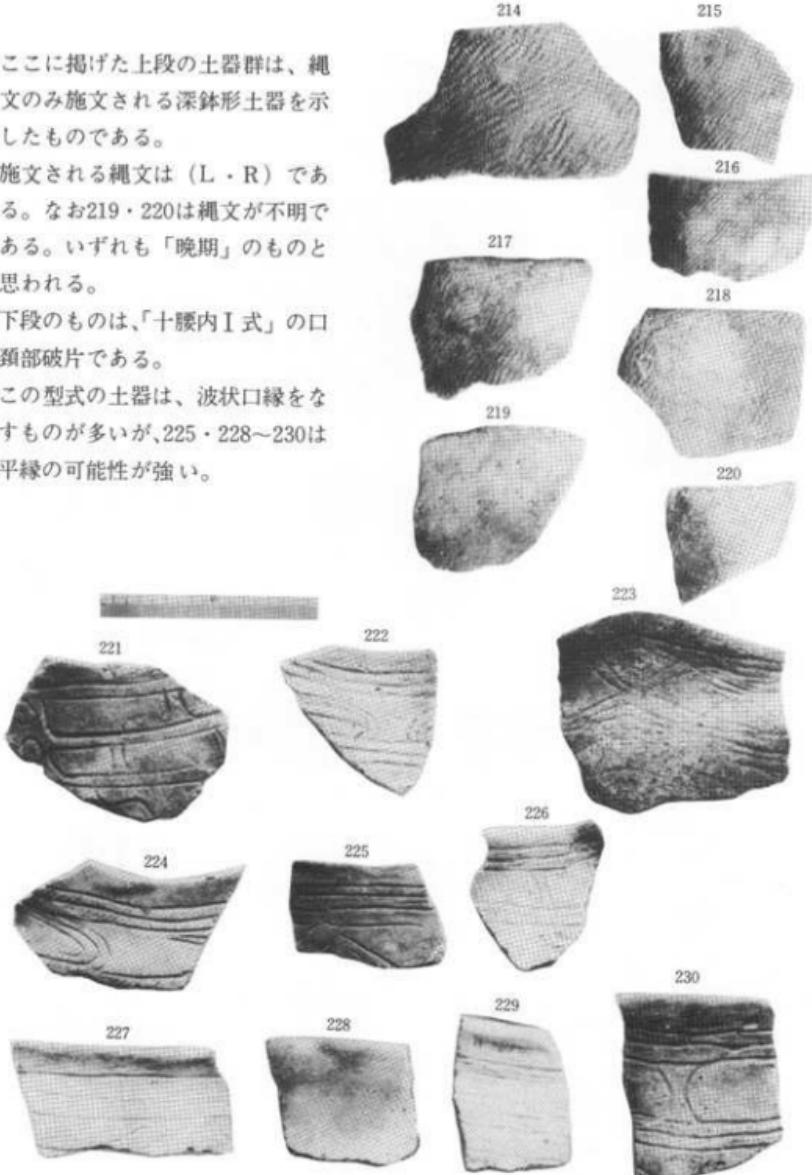
→203・206・209・210は鉢形土器と思われる。

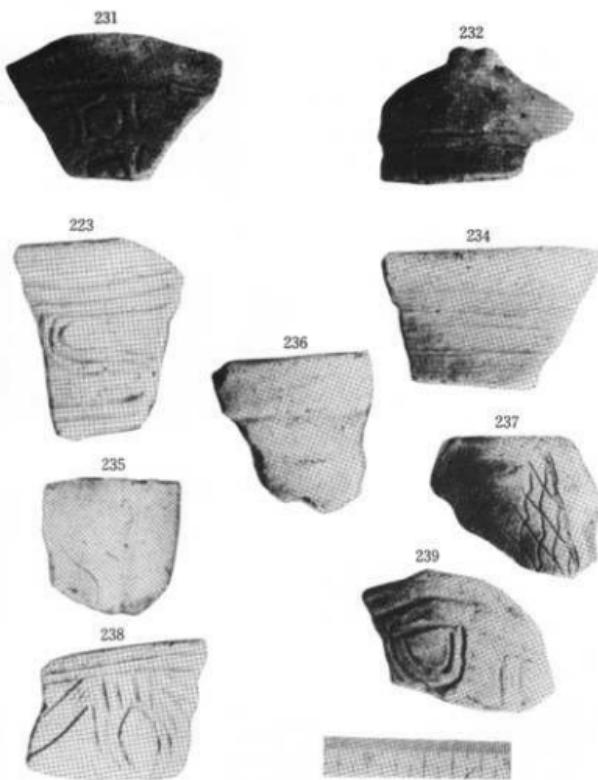
☆ここに掲げた上段の土器群は、縄文のみ施文される深鉢形土器を示したものである。

- 施文される縄文は（L・R）である。なお219・220は縄文が不明である。いずれも「晩期」のものと思われる。

☆下段のものは、「十腰内I式」の口頸部破片である。

- この型式の土器は、波状口縁をなすものが多いが、225・228～230は平縁の可能性が強い。

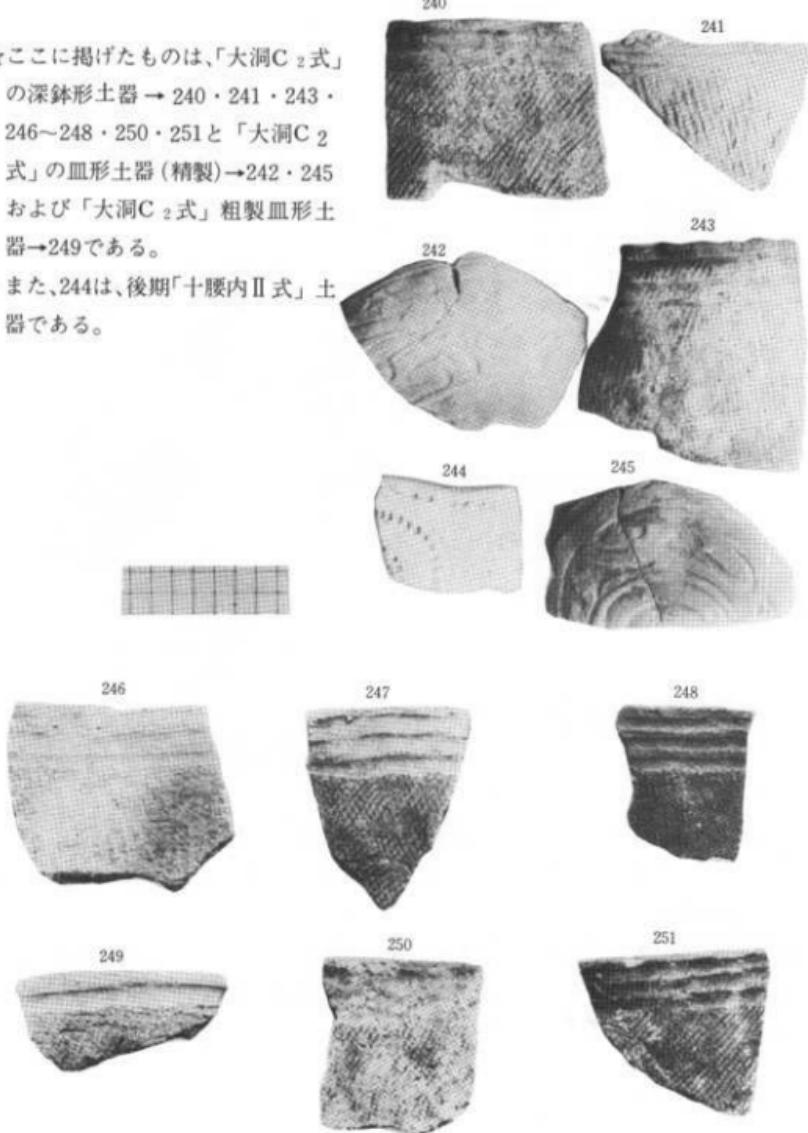




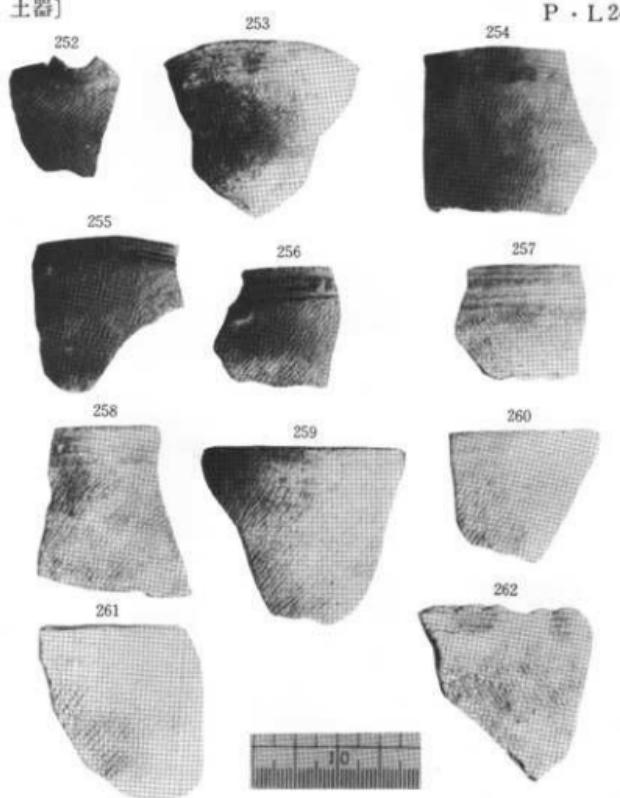
☆ここに掲げたものも、縄文時代後期「十腰内I式」土器群である。

すべて口頸部破片であるが、小突起をもつもの、232・237折り返えし口縁のもの、235・236、波状口縁のもの、231・239、平縁のもの、233～235・238等である。器形は、深鉢か壺形土器と思われる。施文は縄文のあるもの238、他は縄文が無く沈線文で施文される。この沈線で施文される文様は、きわめて変化に富み、そのパターンがつかみがたいものである。

☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の深鉢形土器→240・241・243・246~248・250・251と「大洞C<sub>2</sub>式」の皿形土器(精製)→242・245および「大洞C<sub>2</sub>式」粗製皿形土器→249である。  
•また、244は、後期「十腰内II式」土器である。



[A J 2-II出土、土器]

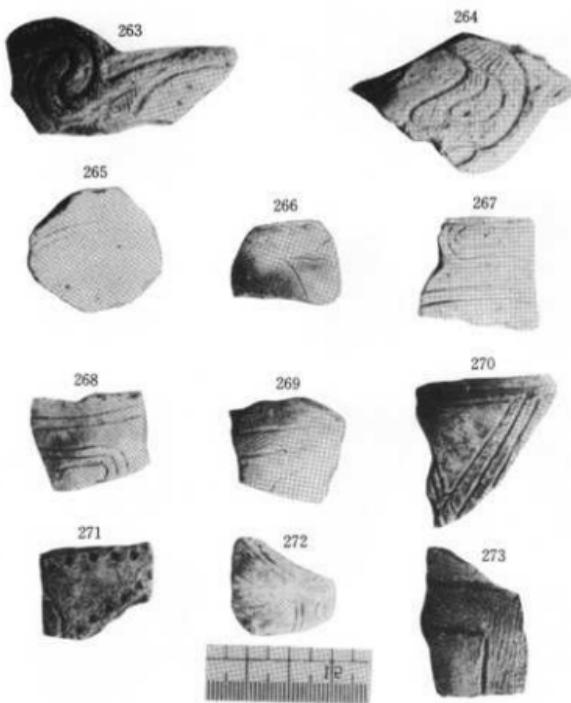


☆ここに掲げたもののうち、252は片口鉢形土器、253～262のうち、253～257・259・260・262は粗製鉢形土器である。

- また、258・261は、粗製の深鉢形土器と思われる。これらのものは、いずれも「大洞C<sub>2</sub>式」土器であるが、257・262の右下り縄文は（R・L）他は、すべて左下りで（L・R）縄文である。

☆このように当地方における縄文は、（L・R）が多く（R・L）が僅少であるが、縄文の回転方向は、←→横方向が多い。

☆なお、252・262・およびP·L 23-241の粗製土器は、一時期前「大洞C<sub>1</sub>式」よりつづく可能性がある。



☆ここに掲げたものは、271を除き、すべて「十腰内Ⅰ式」土器である。なお271は「十腰内Ⅱ式」土器である。

- ・破片のため器形は不明であるが、曲線文に縄文が充てんされるもの→263・264・267・268・269、沈線文だけで縄文のないもの→272、磨消帯をもつもの→266その他、方形区画文に縄文の充てんされるもの→270・273等変化に富んでいる。
- ☆このうち、264・270・273は「十腰内Ⅰ式」の新しいものようである。なお、271は「十腰内Ⅱ式」である。

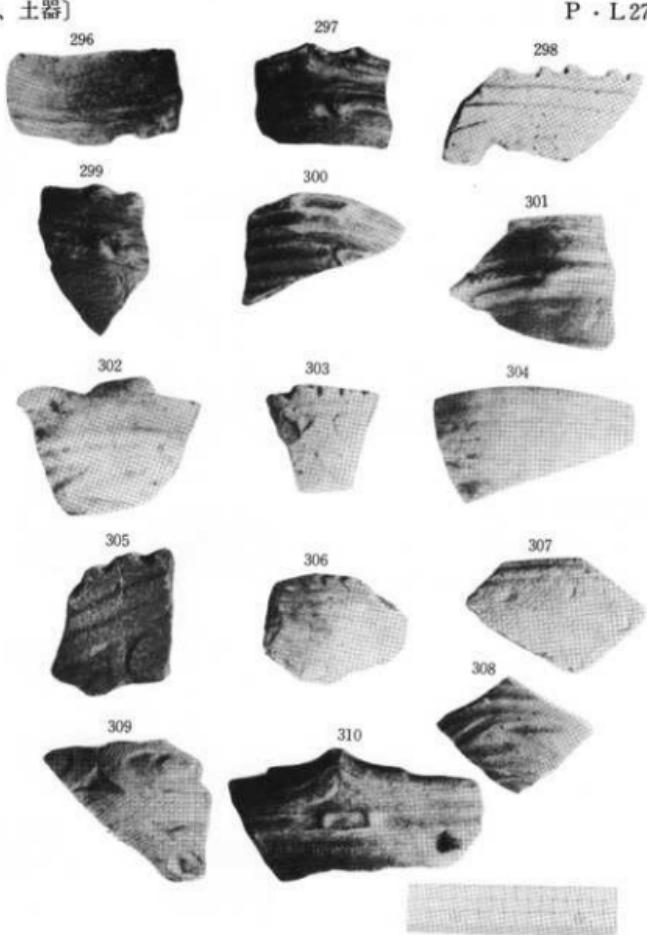
☆ここに掲げたものは、上段・下段とも、すべて粗製土器である。

- ・この上段・下段の土器のうち、274~287・291・293~295は「大洞C<sub>1</sub>式」鉢形土器である。これらのものには、295を除き、すべて刻目文をもつものである。
- ・他の288~290・292は「大洞C<sub>2</sub>式」土器で、292は深鉢形、他は鉢形土器である。

☆当遺跡では、晩期の土器ではこの「大洞C<sub>1</sub>式」が最も古い型式である。(但しB・C式を除く)

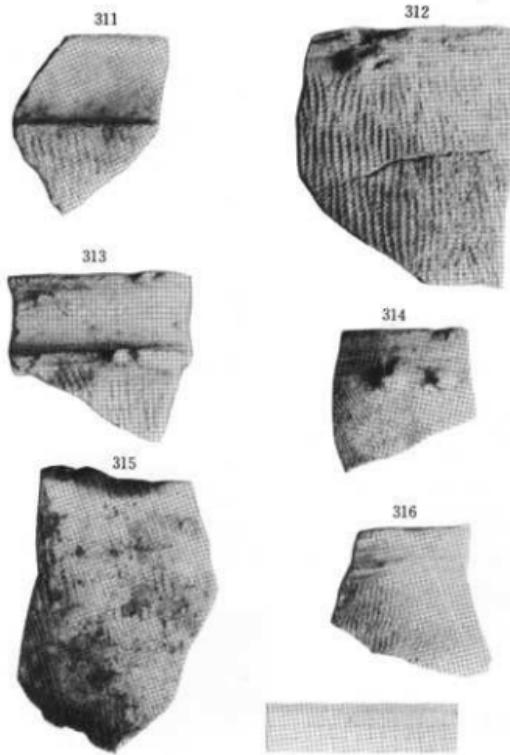


[A J<sub>2</sub> - II 出土、土器]



☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>1</sub>式」精製皿形土器→303・304・305・309、「大洞A式」皿形土器→300・302・308(精製)、「大洞C<sub>2</sub>式」精製皿形土器→306・307、同鉢形土器296・298・301・310(粗製)、および「大洞A式」鉢形土器→297・299である。

☆このうち、301・310は「大洞C<sub>2</sub>式」のうち後半に属するものと思われる。当遺跡では、皿形土器の出土がきわめて多い。



☆ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の鉢形→314、および大形變形土器→311～313・315・316である。

- このうち、311・313は口頸部が無文帶のもので「大洞C<sub>2</sub>式」の後半のものと考えられる。また、312・315は、一時期前からつづくものと考えられる。
- 314・316は、ともに「大洞C<sub>2</sub>式」の鉢形・深鉢形の基本タイプである。
- 施文された胸部の縄文は316が左下りの(L・R)、他のものは、すべて(R・L)で右下りに斜行する。このように(L・R)が左下り、(R・L)が右下りが見られる。すなわち、縄文原体の回転方向は、←→横方向である。